京都市内遺跡発掘調査概報

平成16年度

2005年3月

京 都 市 文 化 市 民 局

瓦積基壇（北東から）

1号窯全景（北西から）

ご あ い さ つ

山紫水明の都・京都市は，世界に誇る数多くの貴重な文化遺産に恵まれた歴史都市であります。市内には多くの「埋蔵文化財包蔵地」があり，古代から近世までの時代毎に積み重なった遺跡は，我が国の歴史や文化の成り立ちを知ることができる国民共有の貴重な財産であり，将来の日本文化の向上発展の基礎を成すものです。先人が残した埋蔵文化財を引き継いだ私たちには，それらを後世に伝え残していく責務があります。

しかしながら，近年，埋蔵文化財包蔵地内において土木工事等による開発がすすみ，埋蔵文化財の保護に重大な影響を及ぼしかねない状況です。こうした中，本市では，「開発」と「保存」の両立をしっかりと行いながら，貴重な文化財の保護に取り組んでおります。

さて，この度，平成16年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査の結果をまとめた概要報告書を作成致しました。調査のうち，試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが実施し，発掘調査及び立会調査は，財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託して実施したものであります。

各調査の実施に当たり，御理解と御協力を賜りました市民の皆様をはじめ，御指導・御助言を賜りました関係機関の皆様に深く感謝申し上げますとともに，本報告書が京都の歴史を知り，理解を深めるために，お役に立てば幸いに存じます。

平成17年３月

京都市文化市民局長

柴　田　重　徳

例　　言

1　本書は、京都市文化市民局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した文化庁国庫補助事業による平成16年度の京都市内遺跡発掘調査報告である。

2　調査地は、下記のとおりである。

Ⅰ	大宅廃寺・大宅遺跡	山科区大宅鳥井脇町24番地
Ⅱ	小野瓦窯跡	左京区上高野小野町16番地
Ⅲ	鳥羽離宮150次調査	伏見区竹田浄菩提院町64番地
Ⅳ	栢ノ杜遺跡	伏見区醍醐南端山町20番地の２
Ⅴ	史跡・名勝嵐山	右京区嵯峨天竜寺芒ノ馬場町10番地の１および10番地の14

3　本書の執筆分担は下記のとおりである。

Ⅰ　網　伸也

Ⅱ　吉崎　伸

Ⅲ　山口　真

Ⅳ　南　孝雄

Ⅴ　平尾政幸

4　整理作業および本書の作成には、上記の執筆者の他に以下のものが参加した。

出水みゆき（遺物彩色）、村上　勉（遺物復元）

5　本書に使用した写真の撮影は、主に村井伸也・幸明綾子が担当し、遺構の一部は現場担当者が行った。

6　本書で使用した土壌名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。

7　測量基準点は、京都市遺跡発掘調査基準点を使用した。調査における測量基準点の設置は、宮原健吾が行った。本書中で使用した方位及び座標の数値は、日本測地系（改正前）　平面直角座標系Ⅵによる。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。

8　本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の京都市都市計画図（勧修寺・行者ヶ森・三宅八幡・城南宮・石田・大覚寺・嵐山、縮尺1/2,500）を調整したものである。

9　本書の編集は、網　伸也が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　大宅廃寺・大宅遺跡

1　調査経過 …… 1
2　遺　　構 …… 3
3　遺　　物 …… 7
（1）瓦　類 …… 7
（2）土器類 …… 14
（3）金属製品 …… 15
（4）炭化材 …… 15
4　ま と め …… 16

Ⅱ　小野瓦窯跡

1　調査経過 …… 21
2　位置と環境 …… 22
3　遺　　構 …… 24
（1）基本層序 …… 24
（2）遺　構 …… 25
4　遺　　物 …… 27
（1）土器類 …… 27
（2）瓦　類 …… 28
（3）その他の遺物 …… 28
5　ま と め …… 40
（1）おかいらの森について …… 41
（2）窯跡について …… 41
（3）出土瓦について …… 42
（4）他遺跡との関連 …… 42

Ⅲ　鳥羽離宮跡150次調査

1　調査経過 …… 45
2　遺　　構 …… 46
3　遺　　物 …… 48
（1）土器類 …… 48
（2）瓦　類 …… 49

（3）木製品 …… 52
4　まとめ …… 52

Ⅳ　栢ノ杜遺跡

1　調査経過 …… 53
2　遺　構 …… 54
3　遺　物 …… 60
（1）瓦　類 …… 60
（2）土器類 …… 64
（3）金属製品 …… 64
4　まとめ …… 65
（1）検出基壇の性格 …… 65
（2）基壇の復元 …… 65
（3）出土瓦について …… 66
（4）栢ノ杜堂の堂舎の配置と建立時期に関する問題 …… 67

Ⅴ　史跡・名勝嵐山

1　調査経過 …… 69
2　遺　構 …… 70
3　遺　物 …… 76
4　まとめ …… 78

図　版　目　次

原色図版1　大宅廃寺・大宅遺跡　遺構　瓦積基壇（北東から）
原色図版2　小野瓦窯跡　遺構　1号窯全景（北東から）

図版1　大宅廃寺・大宅遺跡　遺構　1　調査区全景（東から）
2　瓦積基壇（東北東から）
図版2　大宅廃寺・大宅遺跡　遺構　1　瓦積基壇（北東から）
2　瓦積基壇東瓦落ち状況（北から）
図版3　大宅廃寺・大宅遺跡　遺構　1　礎石据付穴1（北西から）
2　瓦積基壇断面細部（南から）
3　瓦積基壇断面（南東から）

図版4	大宅廃寺・大宅遺跡　遺物	軒瓦・鬼瓦
図版5	大宅廃寺・大宅遺跡　遺物	平瓦
図版6	大宅廃寺・大宅遺跡　遺物	1　土器類
		2　青銅製品
		3　鉄釘類
図版7	小野瓦窯跡　遺構	1　調査区全景（南から）
		2　石積3（北から）
		3　1トレンチ壁面瓦堆積状況（北から）
図版8	小野瓦窯跡　遺構	1　1号窯全景（南西から）
		2　1号窯隔壁（西から）
		3　1号窯焼成室（南から）
図版9	小野瓦窯跡　遺物	土器・埴・その他の遺物
図版10	小野瓦窯跡　遺物	軒丸瓦
図版11	小野瓦窯跡　遺物	軒丸瓦
図版12	小野瓦窯跡　遺物	軒丸瓦
図版13	小野瓦窯跡　遺物	軒平瓦
図版14	小野瓦窯跡　遺物	軒平瓦
図版15	小野瓦窯跡　遺物	軒平瓦
図版16	小野瓦窯跡　遺物	軒平瓦
図版17	小野瓦窯跡　遺物	丸瓦
図版18	小野瓦窯跡　遺物	平瓦・鬼瓦
図版19	鳥羽離宮跡150次調査　遺構	1　調査区全景（東から）
		2　SG1腐植土層遺物出土状況（東北から）
		3　SG1洲浜（東から）
図版20	鳥羽離宮跡150次調査　遺物	SG1出土土器
図版21	鳥羽離宮跡150次調査　遺物	SG1出土軒丸瓦
図版22	鳥羽離宮跡150次調査　遺物	SG1出土軒平瓦・鬼瓦
図版23	栢ノ杜遺跡　遺構	1　調査区全景（南から・写真奥が史跡指定地）
		2　石垣2（北西から）
		3　溝3（北西から）
図版24	栢ノ杜遺跡　遺構	1　塔跡全景（西から）
		2　塔基壇（北から）
		3　塔基壇東辺瓦落ち状況（北から）
図版25	栢ノ杜遺跡　遺物	軒丸瓦
図版26	栢ノ杜遺跡　遺物	軒平瓦

図版27　栢ノ杜遺跡　遺物　丸瓦
図版28　栢ノ杜遺跡　遺物　平瓦
図版29　栢ノ杜遺跡　遺物　1　鉄製風鐸
2　用途不明鉄製品
3　鉄釘類
図版30　史跡・名勝嵐山　遺構　1　調査前全景（南から）
2　1区全景（北から）
図版31　史跡・名勝嵐山　遺構　1　2区全景（北から）
2　3区全景（北東から）
図版32　史跡・名勝嵐山　遺構　1　5区全景（南西から）
2　4区全景（北東から）
3　5区SD32（東から）
図版33　史跡・名勝嵐山　遺物　SD24(b)・SX33出土土器
図版34　史跡・名勝嵐山　遺物　1　SD24(b)出土瓦器・焼締陶器
2　SD24(b)出土輸入陶磁器

挿　図　目　次

図1　調査地位置図（1：5,000）…… 1
図2　試掘トレンチおよび立会調査地点位置図（1：200）…… 2
図3　調査状況 …… 3
図4　瓦積取り上げ作業 …… 3
図5　X=−114,871ライン断面実測図（1：20）…… 4
図6　調査区遺構平面および断面実測図（1：50）…… 5
図7　瓦積二重基壇平面および見通し実測図（1：20）…… 6
図8　軒瓦・鬼瓦拓影および実測図（1：4）…… 8
図9　丸瓦拓影および実測図（1：4）…… 9
図10　A型式・B型式平瓦拓影および実測図（1：4）…… 11
図11　C型式・D型式平瓦拓影および実測図（1：4）…… 12
図12　E型式平瓦拓影および実測図（1：4）…… 13
図13　出土土器実測図（1：4）…… 14
図14　金属製品実測図（1：4）…… 15
図15　炭化材電子顕微鏡写真（×25）…… 15
図16　立会調査No.12・No.13地点南壁断面実測図（1：50）…… 17

図17　立会調査No.13地点出土軒平瓦拓影および実測図（1：4）…… 17
図18　大宅廃寺遺構配置図（1：1,000）…… 18
図19　調査地位置図（1：5,000）…… 21
図20　おかいらの森全景（西から・後方は比叡山）…… 22
図21　現地説明会風景 …… 22
図22　地形および調査区配置図（1：250）…… 23
図23　土層断面実測図（1：100）…… 24
図24　1号窯実測図（1：80）…… 26
図25　石積3実測図（1：50）…… 27
図26　土器実測図（1：4）…… 28
図27　石器実測図（1：4）・土錘実測図（1：2）…… 28
図28　軒丸瓦拓影および実測図（1：4）…… 29
図29　軒丸瓦拓影および実測図（1：4）…… 30
図30　軒平瓦拓影および実測図（1：4）…… 31
図31　軒平瓦拓影および実測図（1：4）…… 32
図32　軒平瓦拓影および実測図（1：4）…… 33
図33　丸瓦・塼拓影および実測図（1：5）…… 34
図34　平瓦拓影および実測図（1：5）・文字瓦拓影（1：1）…… 35
図35　調査地位置図（1：2,500）…… 45
図36　調査前全景 …… 46
図37　調査状況 …… 46
図38　調査区遺構平面実測図（1：150）…… 46
図39　北壁断面実測図（1：50）…… 47
図40　SG1出土土器実測図（1：4）…… 48
図41　SG1出土瓦拓影および実測図（1：4）…… 50
図42　SG1出土木製品実測図（1：4）…… 51
図43　調査地位置図（1：5,000）…… 53
図44　栢ノ杜遺跡調査区配置図（1：1,000）…… 55
図45　調査区遺構平面および断面実測図（1：150）…… 56
図46　基壇南北断面実測図（1：50）…… 57
図47　基壇東西断面実測図（1：50）…… 57
図48　石垣2平面および見通し実測図（1：50）…… 58
図49　石垣2東西断面実測図（1：50）…… 59
図50　溝3東西断面実測図（1：50）…… 59
図51　調査区南壁断面実測図（1：50）…… 59

図52　軒瓦拓影および実測図（1：4）…… 61
図53　丸瓦拓影および実測図（1：4）…… 62
図54　平瓦拓影および実測図（1：4）…… 63
図55　出土土器実測図（1：4）…… 64
図56　鉄製品実測図（1：4）…… 64
図57　調査地位置図（1：5,000）…… 69
図58　調査区配置図（1：400）…… 70
図59　調査状況 …… 70
図60　1区遺構平面および断面実測図（1：50）…… 71
図61　SD20石垣実測図（1：50）…… 72
図62　SD24(b)平面および見通し実測図（1：50）…… 72
図63　2区遺構平面および断面実測図（1：50）…… 73
図64　3区・4区遺構平面および断面実測図（1：50）…… 74
図65　5区遺構平面および断面実測図（1：50）…… 75
図66　SD32断面実測図（1：50）…… 76
図67　SD24(b)出土土器実測図（1：4）…… 77
図68　SX33出土土器実測図（1：4）…… 78

表目次

表1　瓦類観察表 …… 36
表2　SD24出土土器の構成 …… 76

Ⅰ　大宅廃寺・大宅遺跡

1　調査経過

調査地は、創建が7世紀後半に遡る大宅廃寺の伽藍地中心地にあたる。昭和33年に行われた名神高速道路建設に伴う発掘調査では、当調査地の北側で乱石積み基壇をもつ礎石建物とその北方に中軸をそろえた礎石建物を検出していた[1]。また、昭和60年に行った大宅中学校建設に伴う発掘調査では、当調査地の南側で掘立柱建物や伽藍を区画する築地などを検出しており、南面する中門の存在が想定されていた[2]。今回の調査区は中門想定地と乱石積基壇建物の中間西寄りに位置し、中心伽藍の存在が想定できた。実際に昭和33年の調査で、当調査地で基壇建物の存在が指摘されている。さらに、平成15年度には調査地北を東西に通る道路で下水道工事に伴う立会調査を行い、調査地真北の地点（No.13地点）と東へ約8mの地点（No.12地点）で瓦積基壇を検出している。今回の発掘調査では立会調査で確認した瓦積基壇の実態を明らかにするとともに、大宅廃寺の中心伽藍を具体的に復元するデータの収集を目的として調査を行った。

調査はまず、遺構の遺存状況を調べるために試掘調査から実施した。敷地北半に東西方向の第1トレンチ、敷地南半に南北方向の第2トレンチを設定し調査を行ったところ、第1トレンチでは

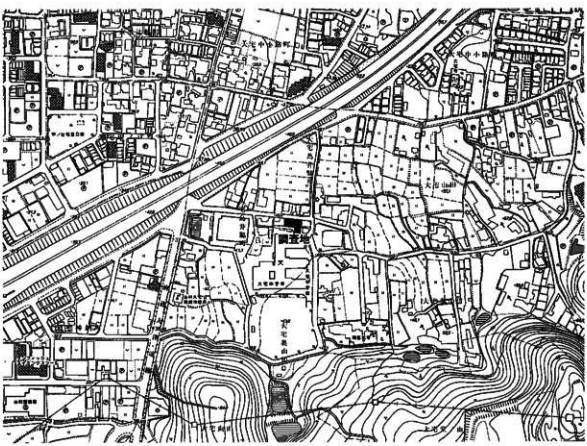


図1　調査地位置図（1：5,000）

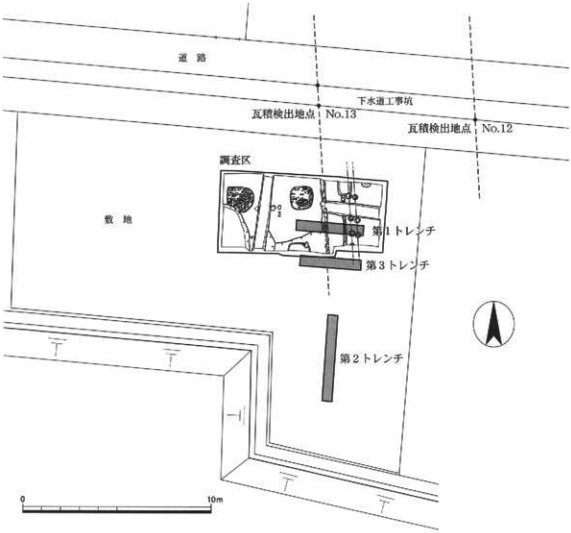


図２　試掘トレンチおよび立会調査地点位置図（１：200）

G.L.－0.65ｍの深さで瓦積基壇の南北列を発見し、寺院に関する遺構が良好に遺存していることが判明した。しかし、第２トレンチではG.L.－1.4ｍまで盛土と旧耕土が堆積しており、敷地南半部の遺構は削られて遺存しないことが明らかとなった。さらに、第１トレンチで確認した遺構の南への広がりを確認するために、第１トレンチの南約1.5ｍの地点に新たに第３トレンチを設定し調査を行ったが、南へ傾斜する削平面を検出したのみで遺構は確認できなかった。これらの試掘調査の成果をうけて、京都市埋蔵文化財調査センターと建築施工者との協議を行い、寺院遺構が良好に遺存する敷地北半部に東西約９ｍ、南北約４ｍの調査区を設定し、発掘調査を行うこととなった。

調査は地盤改良された盛土と旧耕土を重機で除去したところ、試掘調査で確認していた瓦積基壇の延長部を検出し、瓦列の西側では基壇版築面を確認した。版築面上では礎石据付穴を３箇所で確認し、少ないながら建物復元のためのデータを得ることができた。瓦列の東側では、炭や焼土とともに多量の瓦が基壇上から流れ落ちる状況で検出でき、火災による建物基壇の崩壊が想定できた。これらの瓦落ちを除去したところ、幅１ｍの下成基壇を検出し基壇の構造を明らかにすることができた。また、調査区東端部から塔の水煙破片が出土し、今回検出した瓦積基壇建物の周辺に塔が存

図３　調査状況

図４　瓦積取り上げ作業

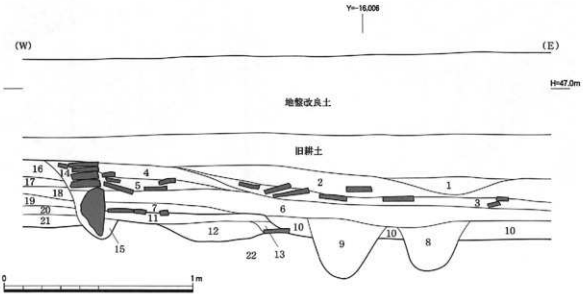
在することが推測できた。

発掘調査では、これらの瓦積基壇遺構をすべて検出した後、写真撮影および実測などの記録を行い、最終的に建築予定地内の瓦積を取り上げて、すべての作業を終了した。なお、建築予定地外の遺構については現地で保存の処置を行い、そのまま埋め戻すように指導が行われた。調査期間は平成16年６月７日に試掘調査を行い、引き続き発掘調査を６月25日まで行っており、実働日数は12日間である。

２　遺　　構

敷地は現状では平坦になっているが、これは現代の造成によるものである。実際はなだらかに南に下がる傾斜面で、敷地南半部では畑地による近代以前の削平を受けて比高差1.5m以上の段差が形成されており、遺構は遺存しない。調査地での基本層序は、北端では約0.4mほどの地盤改良土の直下で、南半ではこの地盤改良土と下層の約0.2mほど堆積した旧耕土を除去すると瓦積基壇の版築面となる。基壇版築面の標高は最も良好に遺存する北端部で46.7m、耕作による削平を受けた南端部で46.5mである。また、瓦積基壇の東側は崩壊土や整地土が約0.5m堆積しており、創建当初の生活面である地山層（暗褐色砂泥層）上は標高46.2mとなっている。

基壇の構築は、地山層の直上に版築して積み上げている。断面観察によると、基壇内に礎石を据え付ける段階で下層版築と上層版築は様相が異なっており、版築の仕方を変えているようである。つまり、標高46.6mまでは黒褐色砂泥・暗褐色砂泥・褐色砂泥を厚さ４㎝ほどの細かい単位で版築を基壇全域に施しているが、その上層では褐色砂泥で厚さ10㎝の厚い版築を施し、版築内に礎石を据えるための基礎地業がなされている。この基礎地業である礎石据付穴は直径1.2～1.4mの浅い凹みに石や瓦を敷き詰めたもので、東西に並ぶ据付穴１と据付穴２は良好に根石群が遺存していたが、調査区南端で検出した据付穴３は痕跡しか確認できなかった。柱間は据付穴１・２の心々距離から約３m（10尺）と想定できる。これら基壇版築と礎石の据え付けは基壇造営の一連の工程の中で行われたものである。なお、基壇断ち割りを行ったところ、据付穴１と据付穴２の中間で下層版築内に据え置かれた人頭大の集石が確認できた。



1　7.5YR4/3 褐色砂泥
2　7.5YR3/4 暗褐色砂泥
3　7.5YR3/2 黒褐色砂泥
4　5YR4/4 にぶい赤褐色砂泥（焼土を多量に含む）
5　N1.5/ 黒色炭層
6　7.5YR4/3 褐色砂泥（整地層）
7　7.5YR3/2 黒褐色砂泥
8　7.5YR3/2 黒褐色砂泥（柱列１柱穴）
9　7.5YR3/4 暗褐色砂泥（柱列２柱穴）
10　7.5YR3/4 暗褐色砂泥
11　10YR4/6 褐色砂泥（下成基壇土）
12　10YR3/3 暗褐色砂泥（下成基壇土）
13　10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥（瓦積み裏込）
14　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（瓦積み裏込）
15　10YR3/3 暗褐色砂泥（基底石裏込）
16　10YR4/4 褐色砂泥（版築土）
17　10YR3/3 暗褐色砂泥（版築土）
18　10YR4/4 褐色砂泥（版築土）
19　10YR3/3 暗褐色砂泥（版築土）
20　7.5YR3/3 暗褐色砂泥（版築土）
21　7.5YR3/2 黒褐色砂泥（版築土）
22　7.5YR3/3 暗褐色砂泥（地山）

図５　X＝-114,871ライン断面実測図（１：20）

基壇化粧の瓦積みは、最下層に0.3～0.4mの石を平坦面を外側にそろえて並べ、その上に瓦を積み上げる。積み上げ方は厳密ではないが、最下段の瓦は端面を外に向けて並べ、その上に側面をそろえた平瓦片を積み上げていく。最も残りが良好な場所で８枚分の平瓦が遺存しており、ここでは軒平瓦の文様面を最下段にそろえていた。瓦積み化粧に使用されている瓦は小破片のものも多く、修築が行われた可能性がある。ただ、平瓦をみると現状では一枚作り平瓦は確認できず、ほとんどが桶巻き作りの縄叩きナデ消し平瓦か斜格子平瓦で構成されている。最下層の基底石（地覆石）は創建当初から動いていない。

また、瓦積基壇の外周りに幅約１m、高さ約0.2mの低い基壇状遺構を検出しており、この縁部にも３枚分ほどの瓦積み化粧が施されていた。基壇上面には瓦の小破片や小石が敷かれており、明らかに装飾的要素をもっていることから、この基壇状遺構を装飾的な下成基壇として理解している。この下成基壇の性格を考えるうえで、柱位置と基壇との位置的関係は示唆的である。礎石据付穴１の中心から瓦積基壇縁まで約1.3mしかなく、軒の出を考えると狭すぎる。この基壇状遺構の外まで軒の出を考えれば約2.4mとることができ、建物復元においてバランスがよくなる。この下成基壇は断面観察から瓦積基壇の地覆石列を構築した後に形成されたことがわかるが、建物の柱位置との関係からこの時期差は基壇造営過程の工程差とするのが妥当であろう。低い下成基壇によって地覆石面のほぼ上半分がみえるように構成されており、下成基壇は創建当初から瓦積基壇の外周りの装飾を担う基壇として構築されたと考えられる。同様の装飾的な二重基壇は大鳳寺跡で検出されて

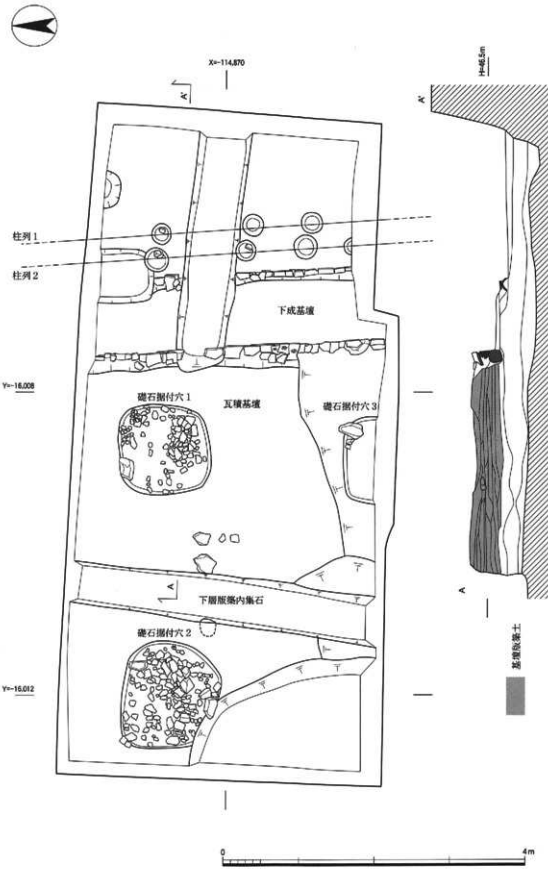


図6　調査区遺構平面および断面実測図（1：50）

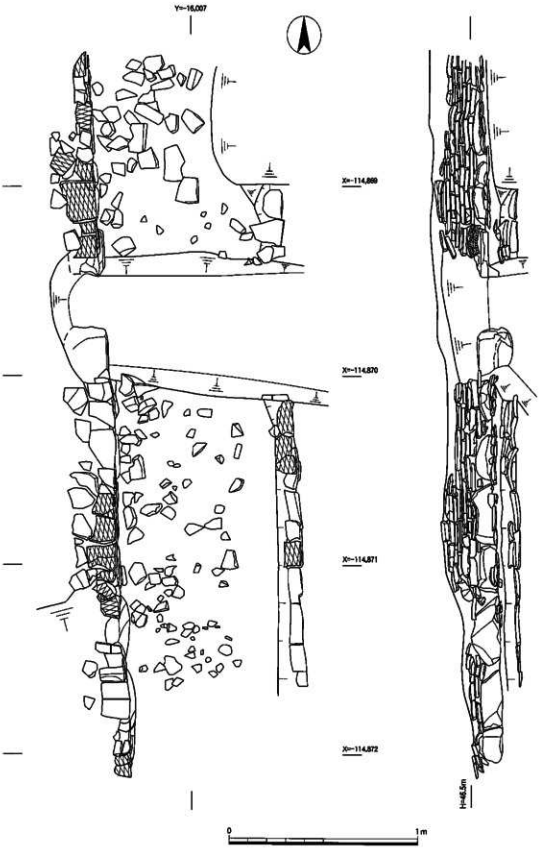


図7　瓦積二重基壇平面および見通し実測図（1：20）

いるが、大鳳寺跡では瓦積本体には地覆石がなく下成基壇化粧は石列で構成されていた。[3]

なお、下成基壇の外側に南北柱列を２条検出した（柱列１・２）。柱は直径約0.3mの円形で、柱間は狭く一定でない。おそらく、屋根周りの修理に伴う足場穴と考えられる。これらの足場穴は下成基壇が埋没した暗褐色砂泥層を切り込んで検出している。また、この柱穴検出面の上層に褐色砂泥整地層が厚さ0.1mほど堆積しており、この整地が施された段階では瓦積基壇の地覆石はほぼ土中に埋没し、基壇は瓦積み化粧だけが見える状況だったのであろう。そして建物の終焉であるが、瓦を多量に含む炭焼土層をこの褐色砂泥整地層上で検出しており、ここから９世紀後半から10世紀前半の土師器が出土している。おそらく、このころに火災によって焼失し、以後は再建されなかったものと考えられる。

３　遺　　物

出土遺物は整理箱にして42箱分出土しているが、その大半は基壇東側の瓦落ちや攪乱坑から出土した瓦群である。また、炭焼土層からは少量の土器片とともに塔水煙の破片と考えられる青銅製品や鉄釘が出土した。これらの金属製品は、焼失した寺院建物に使用されたものであろう。ここでは、まず最も多く出土した瓦類について概要を報告し、その後に土器類と金属製品について説明を加えることとする。

（１）瓦　類

軒瓦　軒瓦は紀寺式軒丸瓦と重弧文・藤原宮式軒平瓦が出土しているが、それぞれ現状で確認できる点数は軒丸瓦16点と軒平瓦７点であり、点数的には非常に少ない。軒丸瓦はすべて紀寺式軒丸瓦の破片である（１～７）。大宅廃寺から出土する紀寺式軒丸瓦は、大きな中房に蓮子が１＋４＋８と二重に巡り蓮弁がやや短い型式と、やや小さい中房に３＋８の蓮子が配され蓮弁がやや長い型式があるが、今回出土した資料はすべて後者のようである。[4] 全体に焼成が甘い資料が多いが、資料（１・３・７）は砂粒を多く含み粗く灰白色から灰色に焼き上がる特徴的な資料である。とくに、資料（７）の裏面には縄叩きが残り古式な製作技法を踏襲する。これに対し、資料（６）は側面・裏面の調整が丁寧で須恵質に焼成された対照的な資料となっている。資料（１）が試掘第２トレンチ、資料（３）が下成基壇上、資料（６）が瓦積基壇東の埋土上層から出土した他は、すべて瓦積基壇東の攪乱坑から出土している。

軒平瓦は重弧文軒平瓦が１点出土している他は、すべて藤原宮式軒平瓦である。重弧文軒平瓦（８）は四重弧文を分割前に施文し、分割後に側面を後から前に削って仕上げる。砂粒を多く含み灰白色に焼き上がる特徴は、軒丸瓦資料（１・３・７）と共通する。[3] また、同型式資料が移築保存のために取り上げた瓦積基壇内に使用されており、平成15年度立会調査のNo.13地点でも１点出土している（図17資料）。瓦積基壇東の攪乱坑から出土した。藤原宮式軒平瓦は変形偏向唐草文軒平瓦が２種出土している。大宅廃寺では藤原宮6646Ｃ型式と同笵の軒平瓦が出土しており、資料（９

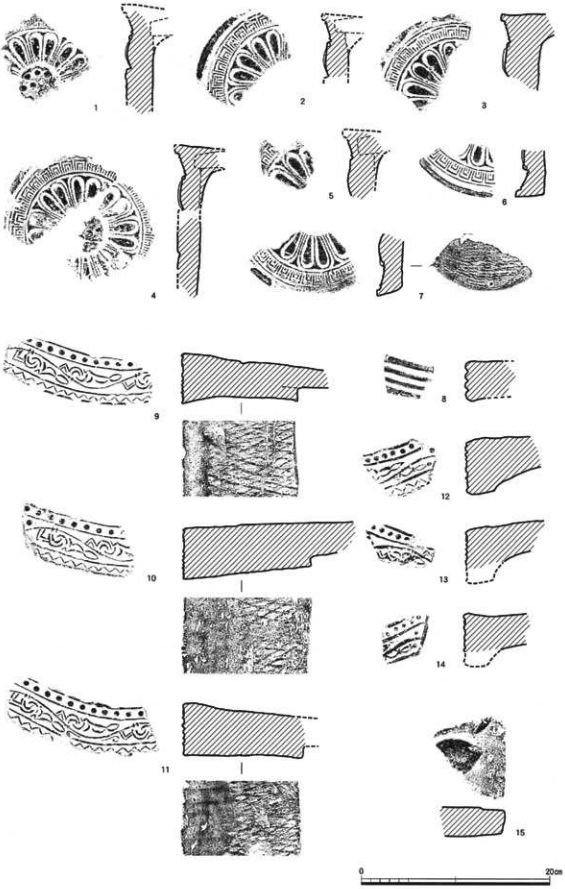


図8　軒瓦・鬼瓦拓影および実測図（1：4）

～11）はこの文様を模倣して製作された軒平瓦群である。長さ12～13cmの深い段顎をもち、顎面には斜格子叩き（C型式）を施した後にナデ整形で仕上げる。また、資料（9）顎面には後端から2～3cmの位置に浅く二重沈線が走る。砂粒を若干含むが胎土は緻密で乳白色に焼き上がるのが特徴である。これらは同笵資料で製作技法も共通するが、資料（11）では唐草文を彫り加えており笵の前後関係が追える[6]。資料（9・10）は瓦積基壇東の攪乱坑からの出土で、資料（11）は瓦積化粧内に積み上げられた軒平瓦である。資料（12～14）は、変形偏向唐草文がさらに在地化した文様に変化したものである。顎部は貼り付けの曲線顎で、胎土は砂粒を多く含み粗く、灰白色から灰色の硬質に焼き上がる。北白川廃寺から同笵資料が出土している。瓦積基壇東の攪乱坑から出土した。

鬼瓦　蓮弁状の文様を浮き彫りにした板状土製品(15)で、その形状から鬼瓦の一部と想定している。全体の文様構成は不明で、ヘラケズリによって仕上げた側面は若干の丸みを帯びている。裏面はナデ調整によって平坦に整形されているが、側面に向かって若干厚みが薄くなっている。砂粒を多く含み、焼成はやや軟質で乳白色を呈する。瓦積基壇東の攪乱坑から出土した。類例が醍醐御霊廃寺で出土している[7]。

丸瓦・平瓦　出土遺物の大半は丸瓦と平瓦である。過去の調査では最も多く出土するこれらの資料化が充分行われなかったため、大宅廃寺出土の丸瓦と平瓦の実態は全く不明であった。今回の調査で出土した資料は整理箱にして40箱あまりと量的に充分ではないが、丸瓦と平瓦を型式分類し出土破片数を分析することによって、大宅廃寺で使用された瓦の全体像の把握を試みてみたい[8]。

まず、丸瓦と平瓦の比率であるが、丸瓦の破片数は459点、平瓦の破片数は1,629点で、丸瓦：平瓦は22：78となる。丸瓦は全体の2割強しか出土していないが、これは遺構が瓦積基壇周辺の狭い範囲であったため、瓦積基壇に使用された平瓦が多く含まれることにも起因すると考えられる。実際に出土平瓦の遺存状況をみると、建物が被災し倒壊した状態であるにも関わらず全体が残る資料は出土していない。

丸瓦の出土傾向としても大半が小破片であるが、凸面縄叩き後にナデ調整を施したものが主流を占める。狭端部の形状はほとんどが無段式（行基式）で、有段式（玉

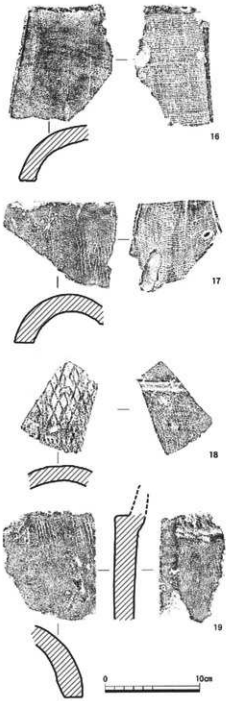


図9　丸瓦拓影および実測図（1：4）

縁式）丸瓦は２点しか確認していない。資料（16・17）は縄叩きナデ消しの無段式丸瓦である。資料（19）は有段式丸瓦であるが、凸面はやはり縄叩きナデ消しで調整しており、他の資料は狭端部資料でなければ厳密には無段式か有段式か区別できない。ただ、資料（19）は燃し焼きのため表面が黒色化しており、厚く大振りに作られているようで、同様の資料は非常に少ないといえる。無段式丸瓦は創建期に製作されたと考えられ、有段式丸瓦は後述する一枚作り平瓦（Ｅ型式）と同じく８世紀末以降の補足瓦であろう。なお、斜格子叩きが残る丸瓦（18）が２点と極めて少量だが出土している。

平瓦は凸面の叩き成形および調整の違いから、Ａ～Ｅ型式に分類した。以下にそれぞれの型式的特徴を概説する。

＜Ａ型式平瓦＞　凸面縄叩きを施した桶巻き作りの平瓦である。凸面叩きを丁寧にナデ消すA1型式（20）と、ナデ消しをあまり行わないA2型式（21・22）に細分される。A1型式には部分的に一次調整の縄叩き痕跡を多く残す資料も認められる。ともに凹面には幅３㎝強の枠板痕跡が残り、資料（22）には粘土板接合痕跡が認められる。A1型式には側面に分割破面を残すものもあり、砂粒を多く含み胎土・焼成が四重弧文軒平瓦と共通している。四重弧文軒平瓦の凸面も縄叩きナデ消しであることが確認されており、創建期に主流を占めた平瓦である。これに対し、A2型式はA1型式のナデ消し調整が不十分な資料を多く含み、資料（21）では狭端部に向けて叩き締めの円弧を描いている。胎土は砂粒を含むがやや緻密で、焼成は乳白色に焼き上がる資料が多い。A1型式・A2型式ともに瓦積み化粧内に使用されており、資料（20）は下成基壇構築瓦、資料（21）は瓦積基壇本体の構築瓦である。

＜Ｂ型式平瓦＞　凸面にやや大振りの斜格子叩きを施した桶巻き作りの平瓦である。Ａ型式と同様に、凸面叩きを丁寧にナデ消すB1型式（23・24）とナデ消しを行わないB2型式（25）に細分される。B1型式は厚手に作られたものが多く、凸面は横ナデ調整を行った後に側部および狭端部を大きくヘラケズリして面取りするのが特徴的である。凹面には幅４～4.5㎝のやや幅広の枠板痕跡が残り、凸面に対応して側部および狭端部にヘラケズリ調整を施す。側面および端面はヘラケズリで丁寧に仕上げる。胎土は砂粒を多く含み、灰白色から灰色を呈する。資料（24）にみられるように、凸面狭端部に一次調整痕跡であるB2型式の斜格子叩きを残すものが多く確認できる。B2型式は凸面ナデ調整を全く施さず、横長でやや大振りな斜格子叩きを残す。側面はヘラケズリ調整、凹面には幅約2.5㎝のやや狭い枠板痕跡が残り、側端部はヘラケズリで面取りを行う。B1型式に比べて胎土は緻密である。

＜Ｃ型式平瓦＞　凸面に縦長の斜格子叩きを施した桶巻き作りの平瓦（26～28）である。資料（27）では狭端部に向かって叩き締め円弧を描いて左上方へ傾いており、面取りが大きく断面が剣先状を呈する。凹面の枠板痕跡は幅が一定でなく、幅２～3.5㎝ほどの枠板を繋げて成形桶を形成しているようである。胎土は緻密で乳白色に焼き上がるものが多く、軒平瓦（９～11）と共通する。これらの軒平瓦の顎面に施された叩きがC型式であり、同一系列の瓦工によって製作されたことがわかる。Ａ型式平瓦とともに瓦積基壇化粧内に多く使用されており、資料（28）は瓦積基壇本体の

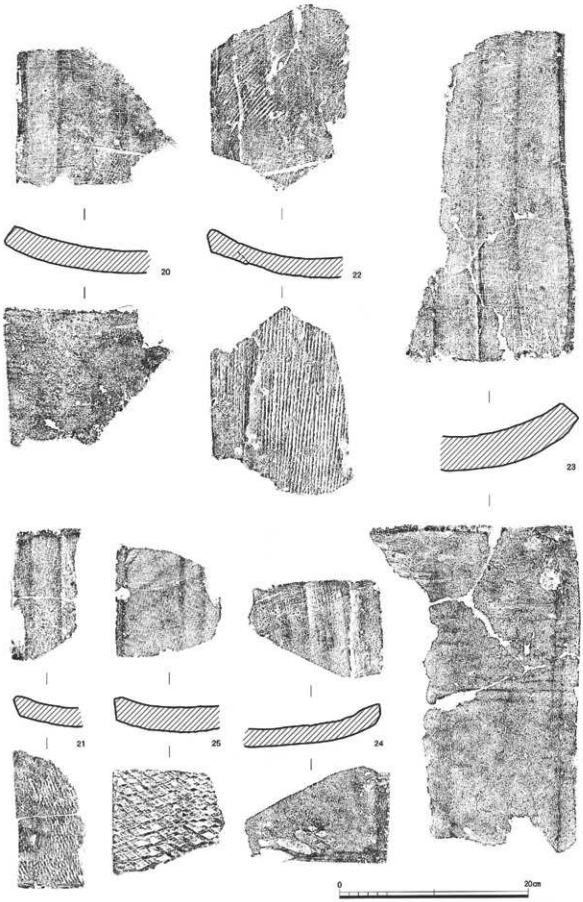


図10　A型式・B型式平瓦拓影および実測図（1：4）

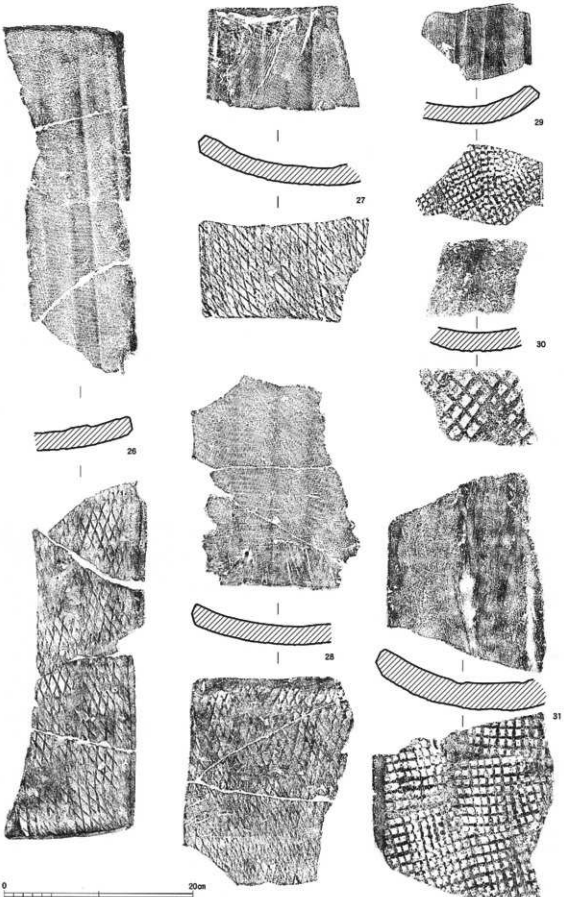


図11　C型式・D型式平瓦拓影および実測図（1：4）

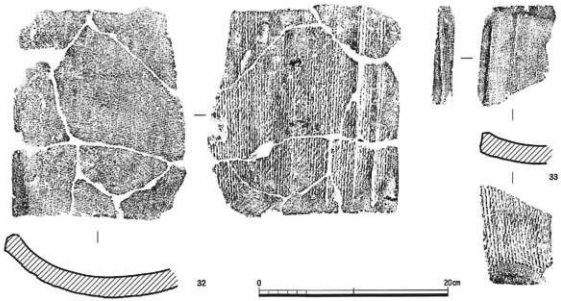


図12　E型式平瓦拓影および実測図（1：4）

構築瓦である。

＜D型式平瓦＞　凸面に格子叩きを施した桶巻き作りの平瓦である。格子叩きの大きさによって、D1型式・D2型式・D3型式に細分できるが、共通して凹面にナデ調整を施すものが多い。D1型式は幅0.6cmほどの細かい正格子叩きを施したもの（29）で、凹面にはナデ調整の下に幅2～2.5cmほどの狭い枠板痕跡が残る。胎土は緻密で焼成は良好な須恵質である。D2型式は0.8cm×1cmほどの縦長の格子叩きを施したもの（31）で、側部はヘラケズリによって大きく面取りする。凹面中央はナデ調整を施して布目を消しているが、確認できるもので枠板の幅は約3cmほどである。胎土は砂粒・小石を含み、やや軟質の焼成である。D3型式は1.2cm×1.7cmほどの縦長の格子叩きを施したもの（30）で、凹面はナデ調整を施す。胎土は緻密、軟質な焼成で乳白色を呈する。出土数が少なく詳細は不明である。

＜E型式平瓦＞　凸面に縄叩きを施す一枚作り平瓦である。凸面側端部は叩きを強く行うために叩き板の段が残る資料（32）や、側面に凹面から連続した布目が残る資料（33）もある。凹面には枠板痕跡が認められず、滑らかに湾曲する。胎土は緻密で焼成がやや軟質なものが多い。

以上、限られた資料であるが大宅廃寺出土の平瓦を分類した。次にこれらの破片数を分析することによって、各型式の使用状況を確認しておきたい。

今回カウントした平瓦は前述したように1629点であるが、そのうち651点が叩きをナデ消した無文平瓦で、比率として40.0%という高い数値となっている。この中には縄叩きがナデ残された資料も多く含んでおり、A1型式が大半を占めると考えられるが、B1型式に特徴的な資料も多く見受けられた。破片ではこれらの型式差の中間的な様相を持つ資料が多く、厳密には分類できなかったのが実状である。ただ、両型式ともに創建期の平瓦であることはほぼ間違いなく、B1型式と同時期に想定できるB2型式18点（1.1%）を加えて、これらが全体の4割を越えていることは注目できる。また、藤原宮式軒平瓦に使用されたC型式は428点で全体の26.3%を占めている。ちなみに同じく

創建期と想定できるD型式平瓦の比率は、D1型式が70点（4.3%）、D2型式が14点（0.8%）、D3型式が2点（0.1%）とすべて合わせても5.2%にしかならず、主流を占める瓦群ではなかったことを示している。これに対し、縄叩き平瓦は446点で全体の27.4%である。これら縄叩き平瓦も破片のためにA2型式とE型式を厳密に分けることができなかったが、補足瓦であるE型式が多くを占めておりA2型式は少ないと考えられる。たとえA2型式の数量が増えても、創建期平瓦の比率が高まることになり、造営過程における平瓦の様相は大きく変わらないであろう。

これらの分析結果をもとに平瓦の供給状況を復元すると、大宅廃寺の伽藍造営にはA2型式・B2型式を含む創建当初の無文平瓦群が全体の4割以上を占めることから主流として使用され、藤原宮式軒平瓦の採用にあたって斜格子叩き平瓦（C型式）が無文平瓦群とともに製作され始めたと考えられる。この時、格子叩き平瓦も少量ながら供給されたのであろう。そして、8世紀末から9世紀初頭にかけて一枚作り平瓦（E型式）が修造に伴う補足瓦として製作され、それらが全体の約4分の1を占めるようになったと想定できるのである[3]。

（2）土器類

瓦積基壇の東に堆積した被災炭層から少量ながら土器片が出土しているが、これらは建物の廃絶時期を類推する重要な資料となる。土師器（34～37）は小破片で口径を復元することができないが、口縁部が外上方に湾曲しながら立ち上がり口縁端部が上方に肥厚する一群で、平安京編年のⅡ期新段階に比定することができる。実年代として10世紀初頭の年代が与えられ、このころに建物が被災したことを示している。この炭層からは須恵器杯A底部（41）とともに緑釉陶器香炉蓋片（40）も出土している。また、補修に伴う足場穴と考えられる南北柱列の柱穴から土師器皿（38）が出土している。口径は約14cmほどに復元でき、Ⅱ期中段階から新段階にかけての年代が与えられる。炭層から出土した土器群とあまり型式差が認められず、9世紀末に補修が行われて間も無く被災したと考えられる。建物の創建に関わる土器は版築基壇内から土師器皿の小破片（39）が出土している。外面はナデ調整で、内湾して立ち上がる口縁端部を内側に肥厚させる。口径約21cmほどに復元でき、内面に放射状暗文を施す。胎土は緻密、にぶい赤褐色を呈する。1点のみの出土であり詳細を明らかにできないが、飛鳥・藤原地域の編年と対比すればⅣ期からⅤ期に相当し、7世紀第4四半期の年代が与えられる土器である。

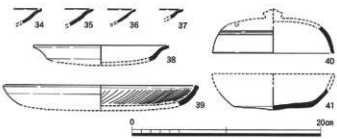


図13　出土土器実測図（1：4）

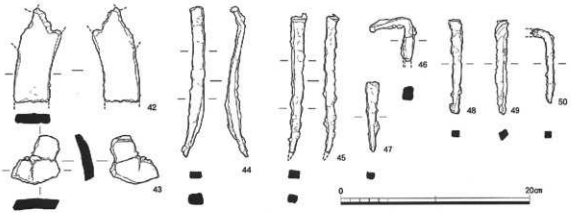


図14　金属製品実測図（1：4）

（3）金属製品

青銅製品として塔の水煙の一部と考えられる資料（42）が、調査区東端部で出土している。厚さ1㎝ほどの板状を呈し、形状は緩やかな曲線を描く。上方では枝分かれしていたようで、側面に破面が残っている。資料（43）も相輪装飾の一部と考えられる青銅製品で、形状的には受花の口縁部などに想定できる。端部に向かって緩やかに外反し、端面はやや中央が窪む。内面には端部から約0.5㎝の位置に沈線が巡る。表面はかなり被熱しており、火膨れや歪みが生じている。瓦積基壇東に堆積した炭層から出土した。

鉄製品は釘類が同じ炭層から多量に出土している。資料（44）は断面が長方形を呈した大型釘で、長さ15.7㎝、頭部から約2㎝の位置で「く」の字状に折れている。資料（45）も平頭の方形大型釘で、残存長14.3㎝である。資料（46）は資料（44）と類似した断面長方形の大型釘の頭部破片である。頭部は先端から約4㎝の位置で約100°の角度で曲げている。資料（47）は残存長7.3㎝の大型方形釘の先端部である。これらの大型釘はいわゆる「瓦釘」と称される屋根の瓦留めに使用される釘と考えられる。資料（48・49）は残存長10㎝ほどの平頭方形釘で、資料（49）では頭部付近が強くねじれている。資料（50）は鎹と考えられるもので、先端から約7.5㎝の位置で直角に折れ曲がっている。

（4）炭化材

瓦積基壇東に堆積した被災炭層から炭化材の破片が多く出土している。これらの樹種を調べるために電子顕微鏡によって観察を行ったところ、傷害樹脂道が明瞭に確認でき針葉樹材であるモミである可能性が高い。[10] 建築部材としては屋根材の一部として使用されたと想定している。

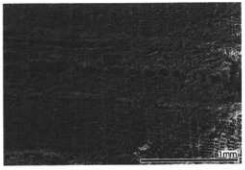


図15　炭化材電子顕微鏡写真（×25）

4 まとめ

大宅廃寺は、山科盆地の南東部、山頂に石座遺跡の存在が推定されている高塚山とその北に連なる行者ケ森の西麓の扇状台地上に位置する古代寺院である。古くから古瓦が採集されており、『今昔物語』に宮道彌益の妻が醍醐天皇の御世に建立したとみえる「大宅寺」とする説や、藤原鎌足の私第を寺とした山科精舎（山階寺）とする説が提示されていた。ここで過去の調査成果をもう一度確認しておきたい。

昭和33年に名神高速道路の建設に伴う発掘調査が実施され、乱石積基壇を持つ礎石建物跡（中央建物）とその北方に中軸を揃えた礎石建物（北方建物）を検出した。中央建物の基壇は北辺と西辺に乱石積みの痕跡をとどめる程度であったが、礎石の据付穴から推測して間口７間、奥行き４間の四面廂建物と考えられている。北方建物は残された礎石据付穴から９間×４間の建物が推定されている。また、建物の前面に細殿の存在が指摘されているが、構造的に不明な点が多い。このほか、中央建物の南に設定された南北トレンチ（Ｄ地区）において、中央建物の中心より約129尺（約39ｍ）の位置で東西建物の基壇南辺を、約180尺（約54.5ｍ）で東西建物の基壇北辺を検出している。これらの建物群について発掘調査の所見では、４つの建物が一直線上に並んでおり、一応中央建物を金堂跡、北方建物を講堂跡とし、南方建物を南門と中門に当てる解釈を示している。しかし、中央建物が一般の金堂の平面プランよりも東西に長いことや、北方建物の構造が前述したように特種で前殿をもつことなどから、中央建物が講堂、北方建物が食堂にあたる可能性も指摘されている。[11]

その後、昭和60年度に中央建物の南方で発掘調査を広い範囲で行い、具体的に伽藍配置を解明する有力な成果を得ることができた。検出した遺構としては、新旧の時期差をもつ建物南東隅の雨落ち溝と伽藍を区画すると考えられる溝群、伽藍区画溝の外側に配置された掘立柱建物群である。伽藍区画溝は創建期から二重になっていたようで、東辺では創建期の溝を埋めて土盛りした８世紀後半の築垣基壇と礎石据付穴の一部を検出していることから、創建段階も築垣が存在したと推測でき、二重の区画溝は築垣の内外溝と考えられる。この築垣遺は昭和33年度調査でも検出していたようで、中央建物の西北と西南で一直線上に並ぶ瓦の堆積を検出している。この瓦堆積列は位置的に西築垣内溝の延長線上に位置し、おそらく中央建物の西までは区画していたことが推定できる。ただ、調査の所見では中央建物には回廊などが取り付いた痕跡は認められていない。また、南辺中央では区画溝が途切れており、位置的に昭和33年度の調査で確認したＤ地区の南基壇にあたることから、ここに門を想定することができる。[12]

ところで、この調査で検出した建物南東隅の雨落ち溝は、昭和33年度調査のＤ地区北基壇の検出地点からほぼ東25ｍほどの地点に位置するが、これらの建物遺構については現在まで二通りの解釈が想定されていた。一つはこれらの遺構を同一の建物とみなし、中央基壇の南に東西棟を想定する説である。この考え方は昭和33年度に想定された伽藍配置を踏襲したもので、中央建物を講堂としてその南に金堂・中門が一直線上に並び、中門より築垣によって中心建物を囲む伽藍である。[13]もう一つの考えは、中央建物は講堂とするが、Ｄ地区北基壇とこの雨落ち溝を別建物として考える説で

ある。これはD地区北基壇の南辺と古い段階の雨落ち溝南辺が、同一地図上に落とすと2mほどのずれが生ずることや、同一建物とすると東西30mを越える基壇となり金堂に相応しくないことから、塔と金堂が東西に並ぶ伽藍配置を想定する考えである。[14] これら中心伽藍の復元案は少ないデータに基づいて想定されたものであり、ともに考古学的な裏付けが乏しく実態については長く不明であったといえる。

しかし、平成15年度に当敷地北側道路の下水道工事に伴う立会調査が行われ、これらの問題を解決する糸口になる成果を得ることができた（図2および図16参照）。当調査区で検出した瓦積基壇の延長部分にあたるNo.13地点において、G.L.-0.55mの深さで東面する瓦積基壇を検出したのである。断面観察によれば、瓦積みは平瓦2枚分しか残存していなかったが基底部の地覆石が遺存しており、瓦積みの西側には基壇版築土である暗褐色砂泥層と黒褐色砂泥層が確認できた。さらに、No.13地点の東へ約8mのNo.12地点でも、G.L.-0.6mの深さで西面する瓦積基壇を確認している。こちらは瓦積みの遺存状況が良好で、少なくとも平瓦6枚分が確認でき基底部の地覆石も据えられていた。このNo.12地点で検出した東側の建物基壇については下成基壇の有無は確認できなかったが、瓦積み化粧の下に地覆石を並べており、今回検出した建物と同じ基壇構造であった可能性が高い。この建物は位置関係から、昭和60年度に南東隅部を検出した建物と同一建物と考えられる。また、西側の建物と同様に被災したようで、建物基壇から西へ炭層が崩落している状況が確認できたのも大きな成果である。[19]

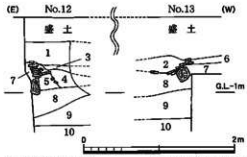


図16　立会調査No.12・No.13地点
南壁断面実測図（1：50）

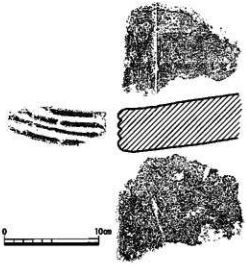


図17　立会調査No.13地点出土軒平瓦
拓影および実測図（1：4）

今回の発掘調査では、中央建物の南西にあたる伽藍中軸ラインの西側で瓦積基壇建物の東縁を検出しており、昨年度の立会調査の成果もあわせると少なくとも金堂1堂説は成立しないことが判明した。つまり、中央建物の南西に瓦積基壇建物が存在し、東にもう1堂の瓦積基壇建物が存在したことが確実となったのである。この調査結果を受けて、前者を南西建物、後者を南東建物と新たに呼称することとする。これら東西に並列する瓦積基壇建物は、大宅廃寺が造営された丘陵の最も良好な位置に存在しており、中門が建てられた南側は緩やかな傾斜面となっていたと想定できる。これらの調査成果をまとめると、中門と中央建物の間に瓦積基壇建物が中軸線を挟んで2棟東西に並列する伽藍として復元する考えが最も妥当であり、両建物ともに同時期に火災にあい崩壊したと考

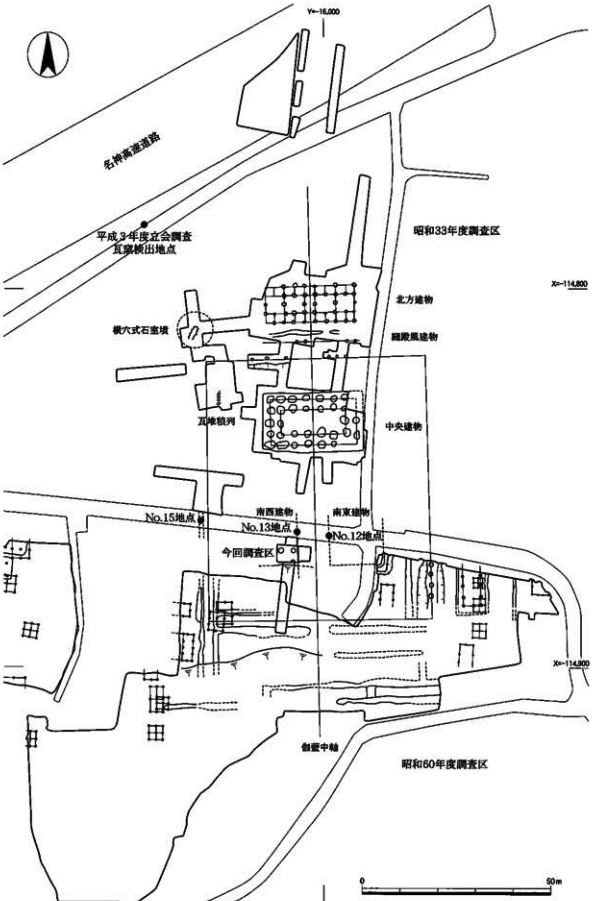


図18　大宅廃寺遺構配置図（1：1,000）

えられるのである。

ところで、新たに判明した東西に並列する建物の性格であるが、当調査で出土した遺物の中に水煙の破片など塔の相輪の一部と考えられる資料があり、いずれかの建物が塔である可能性が高くなった。塔関係遺物の出土地点は調査区の東端部であり、両建物の中間にあたりどちらに伴うものか明らかでない。被災炭層内から受花部と考えられる青銅製品が出土しており、遺物の出土状況からはこの南西建物を塔と考えることもできるが、南東建物も同時期に被災していることが立会調査の断面観察から明らかであり、厳密には被災炭層内の遺物の帰属を決定することはできない。ただ、南西建物の南辺は後世の削平のために遺存していないのに対して[20]、南東建物では昭和60年度の調査で建物南東隅を確認している。南西建物は礎石据付穴の位置からもさらに南へ延びており、南辺は南東建物の南辺よりも南に位置すると考えられる。このような伽藍内の建物の配置から考えると、南辺が北に位置する南東建物を塔に想定するほうが空間構成を考えるうえで理解しやすく、今回検出した建物は西金堂として認識することができる。そして、従来想定したように中央建物は講堂で、中門から派生した築垣が講堂の北側で伽藍地を閉鎖し、北には僧坊と想定できる北方建物が存在したのであろう。狭い調査区での所見であり今後の調査で明らかにすべきであるが、現状では講堂に伽藍閉鎖施設が取り付かない変則的な法起寺式あるいは観世音寺式伽藍配置として復元するのが妥当のようである。

大宅廃寺は北山背において藤原宮と同笵軒平瓦をもつ、中央と直結した唯一の古代寺院である。今回の調査では、出土瓦の様相に相応しく在地寺院としては非常に整った伽藍をもつことが判明したといえる。今後も継続して調査を行うことによって、より確かな伽藍の解明を行うとともに、伽藍周辺の寺院地の実態についても検討していく必要があろう[21]。

註

1）『名神高速道路路線地域内埋蔵文化財調査報告』　京都府教育委員会　1959年

2）平方幸雄・菅田　薫「大宅廃寺」『昭和60年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1988年

3）『大鳳寺跡発掘調査報告』宇治市文化財調査報告第1冊　宇治市教育委員会　1987年

4）以前、昭和33年調査資料と昭和60年調査資料を観察して大宅廃寺出土軒瓦を分類している。この分類では前者がAa型式、後者がAb型式となる。
網　伸也「大宅廃寺再考」『瓦衣千年　森郁夫先生還暦記念論文集』　森郁夫先生還暦記念論文集刊行会　1999年

5）註4文献のEb型式に相当する。

6）註4文献でFc型式として分類したもので、さらに唐草を彫り加える以前のものをFc1型式、彫り加えた後のものをFc2型式と細分した。当時の観察ではFc1型式が深い段顎を貼り付けたもので、Fc2型式では平瓦端部を肥厚させて一連の粘土で浅い顎部を作りだすようになり、唐草の迫刻と顎の形状の変化が対応すると想定した。しかし、今回の調査でFc1型式とFc2型式で製作技法が共通する

資料の存在が明らかとなり、Fc2型式を製作する過程の中で製作技法が変化していったと考えられる。なお、藤原宮6646C型式と同笵の軒平瓦は、Fa型式として分類している。

7）星野献二・宇佐晋一『器瓦録想』 伏見城研究会　2004年

8）今回破片数を分析するにあたって、丸瓦・平瓦ともに長辺8cm以上残る資料をカウントし、遺存状況が悪く分類不可能な資料は意図的に検討の対象外とした。このため、ここでの分析結果は統計学的にも厳密なデータとはいえないが、大宅廃寺出土瓦の大まかな概略と傾向を知るうえではある程度の有効性をもつと考えている。

9）なお、平成3年度に実施した立会調査で、当調査地の北北西約100mの地点でE型式平瓦を焼成したと考えられる有牀式平窯を発見している。

竜子正彦・尾藤徳行「大宅廃寺・大宅遺跡」『平成3年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所　1995年

10）樹種鑑定に際しては、くらしき作陽大学の北野信彦氏にご教示いただいた。

11）註1文献に同じ。

12）註2文献に同じ。

13）註4文献に同じ。

14）平方幸雄「山背・大宅廃寺に関する二、三の問題」『平安京歴史研究　杉山信三先生米寿記念論集』杉山信三先生米寿記念論集刊行会　1993年

15）平成15年度に実施した立会調査の調査経過と、その他の地点の調査成果については、以下の概報で報告している。なお、No.15地点では、西条垣の西側溝を確認しており、後述する伽藍配置を裏付けている。

吉本健吾「大宅遺跡・大宅廃寺（03RT241）」『京都市内遺跡立会調査概報』平成16年度　京都市文化市民局　2005年

16）昭和33年度の調査においてD地区で確認した東西建物の基壇南辺は、今回の調査で南西建物の基壇版築が南に削平されて途切れるラインであることが判明した。

17）網　伸也「畿内における在地寺院の様相」『古代』第110号　早稲田大学考古学会　2001年

Ⅱ　小野瓦窯跡

1　調査経過

この調査は文化庁国庫補助事業による、小野瓦窯跡の遺跡確認調査である。調査地は、京都市左京区上高野小野町地内に所在する「おかいらの森」と呼ばれている小丘である。ここは現在、上高野西明寺山町内に所在する崇道神社の御旅所となっており、鎮守の森として周辺住民に親しまれている。古くからこの付近では古瓦が数多く採集されており、その中に「小乃」銘のある軒瓦が存在したことから、当地が『延喜式』に記載されている「小野瓦屋」ではないかと推測されていた。しかしながら、現在に至るまで瓦窯本体は発見されていない。そこで今回、文化庁の国庫補助事業として瓦窯の有無を確認する調査を実施することになった。

調査は丘の地形測量から開始した。その地形図に基づいて、丘の主軸に沿って１トレンチを、窯跡が存在する可能性が高いと判断した丘の西側斜面に２トレンチを設定した。２トレンチは立木などの関係から３区（2−1、2−2、2−3トレンチ）に分割した。さらに丘の東斜面に３トレンチを設定した。調査の結果、２および３トレンチでは窯跡を確認することができなかったが、１トレンチの南端で窯体の一部とみられるものを検出した。このため、１トレンチの南端を拡張し

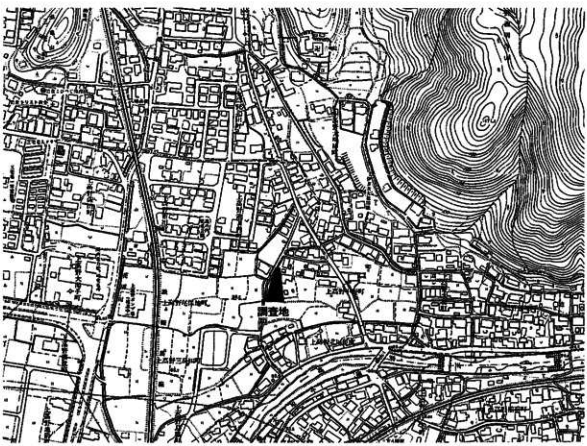


図19　調査位置図（1：5,000）

て調査を進めた。その結果、半地下式の平窯を１基確認することができた。検出した窯は写真、実測などの記録を行った後、真砂土や土嚢を用いた保存処置を施して埋め戻し、調査を終了した。なお、２月28日には現地説明会（参加者約150名）と報道発表を行い成果の公表に務めた。

2　位置と環境

小野瓦窯のある「おかいらの森」は京都盆地の北東部に隣接する岩倉盆地の東部に位置する。東方には比叡山が控え、鴨川の支流の一つである高野川が大原、八瀬の狭隘部から岩倉盆地へ抜け出した地点の北岸にあたる。高野川が形成した河岸段丘の北側は北東から南西方向に緩く下降する平地が広がり、畑や水田が営まれているが近年は宅地化が進行している。おかいらの森はその中にあり、古樹の茂る小丘を形成している。

現在、おかいらの森は崇道神社の御旅所となっているが、本社である崇道神社はここから東方へ約0.5kmの高野川北岸にある。この神社は延暦５年（785）造長岡宮使藤原種継暗殺事件に絡んで、自害した早良親王の鎮魂のため、平安時代の貞観年間（859～877）に建立されたと伝えられるが時期は定かではない。また、おかいらの森が御旅所となった経緯も判然としていない。なお、崇道神社の北側山中には、墓誌銘板が出土したことで著名な小野毛人の墓がある。[11]

おかいらの森で古瓦が採集された記録は古く、大正時代初年にさかのぼる。[21] 大正時代の末には、当時京都府の調査委員であった梅原末治氏が、おかいらの森で採集された瓦の中に「小乃」銘のある軒瓦に注目し、ここが『延喜式』の木工寮、車載の項に記載されている「小野瓦屋」でないかと考察した。[21] その後、同じく『延喜式』記載されているもう一方の「栗栖野瓦屋」にあたる栗栖野瓦窯跡を発見した木村捷三郎氏[1]や平安京の研究家である坂東善平氏[2]なども、当地で古瓦を採集している。しかし、おかいらの森の発掘調査例はない。ただ、丘の東側に隣接した宅地の私道において平成９年に試掘調査[6]が行われた。調査では瓦窯に関する遺構は検出できなかったものの、大量の瓦類に混じって溶着した瓦や炭を確認しており、瓦窯の存在をうかがわせる資料を得ている。

図20　おかいらの森全景（西から・後方は比叡山）

図21　現地説明会風景

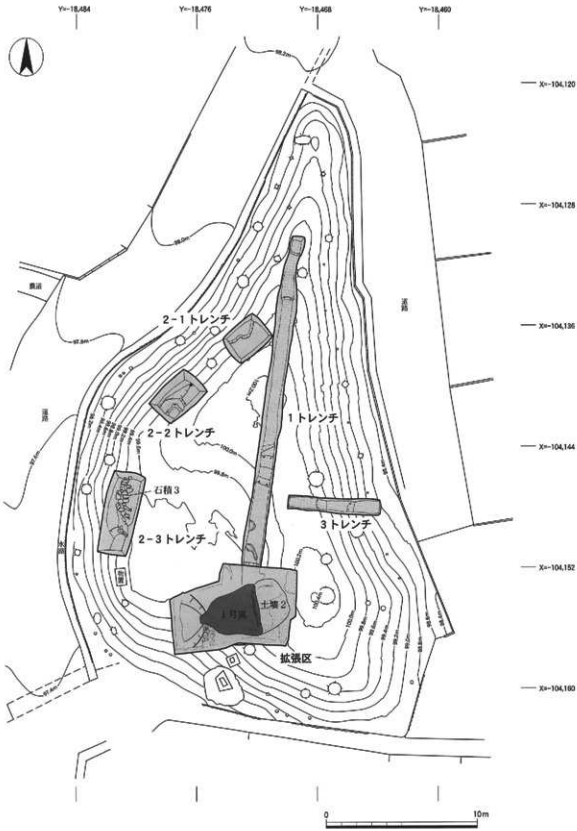


図22　地形及び調査区配置図（1：250）

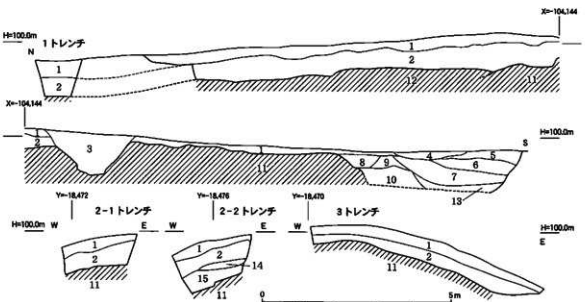
3　遺　構

(1) 基本層序

おかいらの森は北側が細長く突出した楕円形を呈している。南北約40m、東西約25m、周辺道路からの高さ約3mの小規模な独立丘陵で、頂部の標高は100m前後である。裾部の傾斜は急であるが、頂部は比較的平らで、断面の形状は台形に近い。

1トレンチは丘の主軸に沿ってほぼ中央に設置した長さ24m、幅約1mの調査区である。基本的な層序は、中心部分で0.1～0.2mの表土の直下に、焼土や炭化物、瓦などを大量に含んだ暗赤褐色砂泥層（5YR3/3）があり、この土層が平安時代の丘の基盤層となる。北側では暗赤褐色砂泥層は徐々に下降し、この層と表土の間に褐色砂泥層（10YR4/4）が堆積する。この褐色砂泥層は北に向かって厚くなり、最大で0.7mに達する。また、この層には瓦や窯体の一部を大量に含んでおり、土よりもむしろ瓦の占める割合が多い。そして締まりも悪いため、包含する瓦と瓦の間に空間を生じている部分もある。南側も同様に暗赤褐色砂泥層が徐々に下降するが、南端にはこの層を掘り込んで後述する瓦窯（1号窯）が存在する。

2トレンチは丘の西斜面に設定した調査区で、北側から2－1トレンチ（2m×3m）、2－2トレンチ（2m×3m）、2－3トレンチ（2m×5.5m）である。基本層序は1トレンチと同じで0.1～0.3mの表土、瓦を大量に含む褐色砂泥層などが0.5～1.0mあり、その下に暗赤褐色砂泥層がある。2－3トレンチでは暗赤褐色砂泥層の上面で、後述する石積遺構（石積3）を検出した。



1　10YR3/4 暗褐色砂泥（φ5～10cm瓦片多）（表土）
2　10YR4/4 褐色砂泥（瓦多量に含む）
3　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（瓦多量に含む）
4　2.5Y6/3 にぶい黄色泥砂
5　1と同じ
6　10YR3/3 暗褐色砂泥（φ5cm大の礫少量に含む）
7　10YR3/4 暗褐色砂泥（φ5cm大の礫瓦多量に含む）
8　10YR4/6 褐色泥砂（窯砂土を含む）（攪乱）
9　10YR3/2 黒褐色砂泥（焼土含む）
10　窯体
11　5YR3/3 暗赤褐色砂泥（焼土、炭化物多）（丘の基盤層）
12　5YR3/3 暗赤褐色砂泥（瓦を多く含む）（丘の基盤層）
13　7.5YR3/3 暗褐色砂泥（焼土多く含む）（窯体内部堆積土）
14　10YR4/2 灰黄褐色砂泥（焼土、炭化物含む）
15　2.5Y4/6 オリーブ褐色砂泥（φ3～5cmの礫含む）

図23　土層断面実測図（1：100）

3トレンチは丘の東斜面に設置した調査区で基本的な層序は同様で、0.2m前後の表土、斜面の下方に向かって厚くなる0.2～0.3mの褐色砂泥層が堆積している。その下に平安時代の基盤層である暗赤褐色砂泥層がある。

こうした状況から平安時代のおかいらの森は、暗赤褐色砂泥層を核にした丘であったことがわかる。今回の調査は確認調査のため、暗赤褐色砂泥層より下層については追求しなかった。しかし、撹乱壊などの断面観察によれば、丘の周辺を巡る道路面とほぼ同じ高さまで、暗赤褐色砂泥層及びこれに類似した土層が堆積しており、いわゆる地山（無遺物層）は確認していない。

（2）遺　構

1号窯　1トレンチの南端で検出した半地下式の有牀式平窯である。[21] 全長約3.6m、西側に焚口があり、中央の隔壁をはさんで西側に燃焼室、一段高まって東側に焼成室がある。窯体は前述の暗赤褐色砂泥層を掘り込んで構築されている。

焚口部は人頭大の石を積み上げて閉塞されていた。確認調査の性格上、遺構の破壊を最小限にとどめるため閉塞石を取り外さなかった。このため焚口の状況は不明である。なお、閉塞石の一部が燃焼室内に認められる。これは燃焼室が空洞の状態のまま閉塞され、後に天井の崩壊に伴って閉塞石が内部に転落したことを示している。また、焚口の両袖部分にも人頭大の石が広く分布している。これは閉塞に伴うものではなく、後述する2－3トレンチで検出した石積遺構と同様の施設が窯の前面に施されていた可能性がある。

燃焼室も閉塞石のため判然としないが、焚口付近から袋状に広がり、隔壁付近での最大幅約2.4mを測る。南側壁上部には天井の一部が残存しており、それから復元すると天井高は約1.2m程度と推定できる。側壁は平瓦とスサ入り粘土を交互に積み上げて構築し、表面はスサ入り粘土を薄く塗りつけて仕上げている。床面は焚口から奥へ向かって徐々に上昇しているが、隔壁近くで大きくせり上がっている。なお、床面を部分的に断ち割って調査したところ、新旧2面が確認できた。いずれも赤変して堅く焼き締まっている。

隔壁は後述する焼成室にある分焔牀の前端に瓦と粘土を積み上げて構築されている。下部には幅0.1～0.2m、高さ0.7m前後の長方形の通焔孔が7箇所設けられてる。柱部分には花崗岩や砂岩の縦長石材が用いられており、表面にはスサ入り粘土が塗られている。

焼成室の床面は燃焼室より約0.4m高くなっている。方形を呈し、幅約2.4m、奥行き約1.3mあり、奥壁付近では床面から1.6mの高さがある。底部には6条の分焔壁と7条の焔道からなる分焔牀があり、隔壁の下部に開いた通焔孔と通じている。分焔壁の高さは床から約0.5mある。分焔壁は平瓦とスサ入りの粘土を交互に積み上げて造られており、その幅は約0.25mで1枚の平瓦の横幅とほぼ等しい。今回の調査では焔道の幅が狭く、一部は床面まで掘削していない。このため不確定要素は残るが、現状では分焔壁側面に設けられる通焔道（畦下通焔）は確認していない。焔道は中央の幅ものが約0.1mと狭く、その他は0.2m前後である。側壁、奥壁はほかと同じく平瓦とスサ入り粘土を交互の積み上げて構築され、表面にはスサ入りの粘土を薄く塗りつけている。

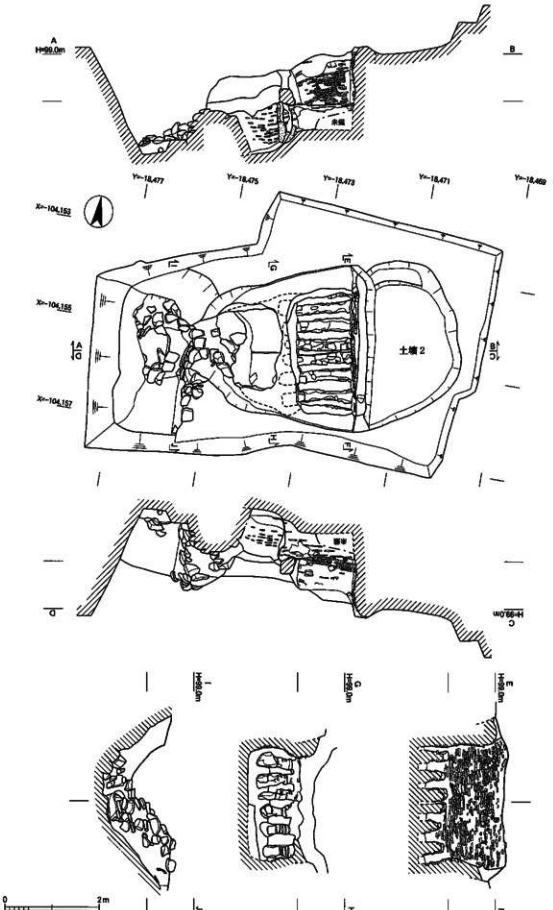


図24　1号窯実測図（1：80）

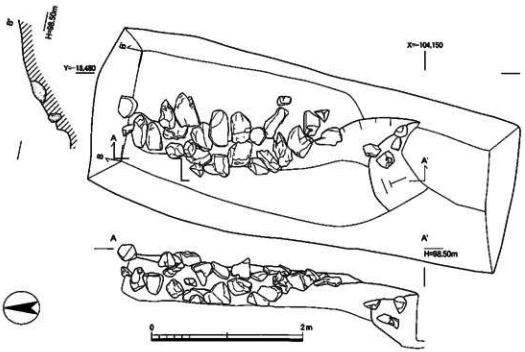


図25　石積３実測図（１：50）

土壙２　窯体の奥壁に隣接した馬蹄形の掘込みである。幅約3.3m、奥行き1.9mで、横幅は窯跡の掘形とほぼ一致している。床面はほぼ平らで、斜面を開削しているため検出面からの深さは奥で0.5m、手前で0.3m程度である。埋土には瓦や炭などを大量に含んでいる。

石積３　２－３トレンチで検出した西に面した石積遺構である。径30～50cmの自然石を用いて、丘の傾斜に沿って３段程度積み上げられたものである。基本的に小口積みであると思われるが、積み方は乱雑で、斜面に石をはり付けただけの状況である。平安時代の基盤層である暗赤褐色砂泥層の表面に施されており、丘の裾を保護するための施設であると考えられる。

４　遺　　物

今回の調査では大量の瓦類が出土した。その全てを取り上げることは困難であるため、軒瓦を中心に鬼瓦や文字瓦などに限り、平瓦や丸瓦については残存状況の良いものをサンプル的に取り上げた。その結果、遺物コンテナに42箱の遺物を採集した。ほぼ全て安時代の中期の瓦類である。その他に平安時代の土器・土製品、弥生時代の石器、古墳時代の土器などが１箱程度である。

（１）土器類

土器類は包含層、窯体埋土などから平安時代中期の土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器などが出土した。その他に古墳時代の須恵器の小片を地表面で採集している。以下図化できたものについて記す。

（1・2）は土師器の皿でいずれも外反する口縁部が残存している。口縁部外面には1段の強いヨコ方向のナデが施されている。（1）は1号窯焼成室埋土、（2）は1トレンチ包含層から出土している。（3）は灰釉陶器の椀である。底部のみが残存している。底部は糸切りの後、やや高い高台を貼り付けている。底部内面には重ね焼きの痕跡である高台の跡が輪状に認められる。また、薄い緑灰色の灰釉がわずかに認められる。（4）は緑釉陶器の椀の素地である。底部のみが残存しており、外面に削り出しのいわゆる蛇の目高台が付く。底部内面、体部外面にはヘラミガキが施されている。1トレンチ包含層から出土している。（5）は緑釉陶器の椀である。底部と口縁部の一部が残存している。底部外面には貼り付け高台が付き、内面には細い沈線が巡る。体部は内湾しながら立ちあがり、端部はわずかに外反する。高台の内側以外は濃い緑色の釉薬が施されている。焼成は甘く軟質である。2−3トレンチ包含層から出土している。（6）は須恵器の甕の底部である。平らな底部から体部中程まで残存している。底部外面は未調整、体部外面は平行タタキを交差させ格子目風に仕上げ、下半はこれをナデ消している。体部内面は同心円タタキの後ナデ消している。1トレンチ包含層から出土している。

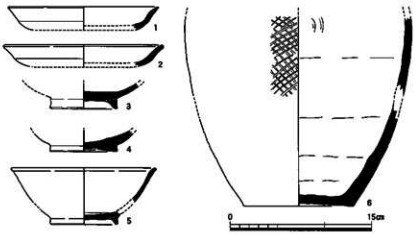


図26　土器実測図（1：4）

（2）瓦　類

包含層、窯体埋土などから平安時代中期の軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦・塼などが出土しており、平瓦には刻印のあるものも認められる。この内、軒丸瓦は11型式101点、軒平瓦は19型式231点、鬼瓦は3点ある。なお、瓦類の詳細については観察表にまとめる。

（3）その他の遺物

その他の遺物としては石器と土製品（土錘）が出土している

石器（75）は器種不明の石器である。サヌカイト製の幅広剥片の先端から両側の縁辺部に細かい剥離を加えて刃部を形成している。他は剥片作成時の剥離面をそのまま残している。表層出土のため時期は不明であるが、加工の状況、風化の程度から弥生

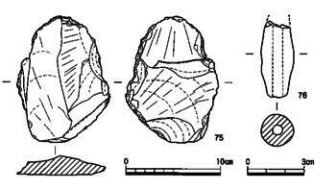


図27　石器実測図（1：4）・土錘実測図（1：2）

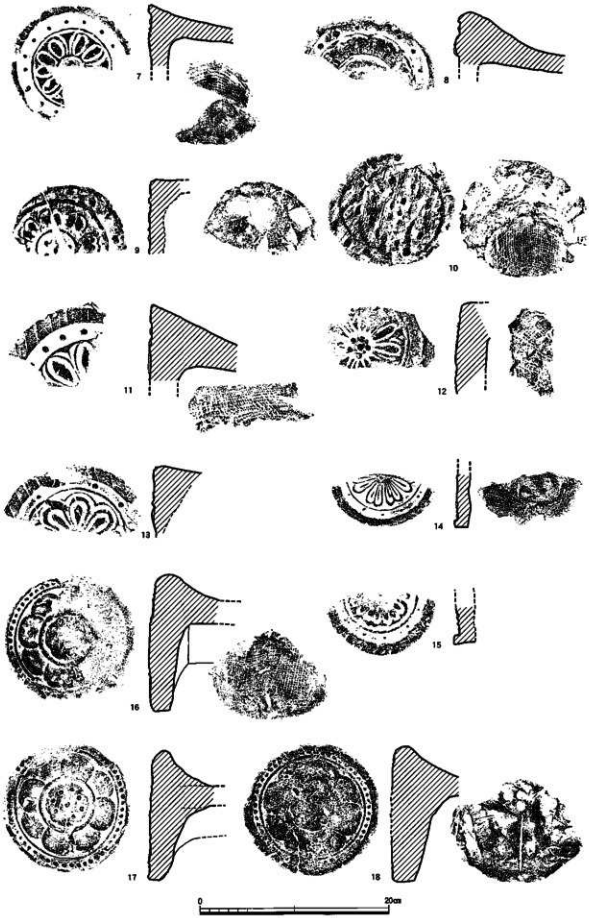


図28　軒丸瓦拓影および実測図（1：4）

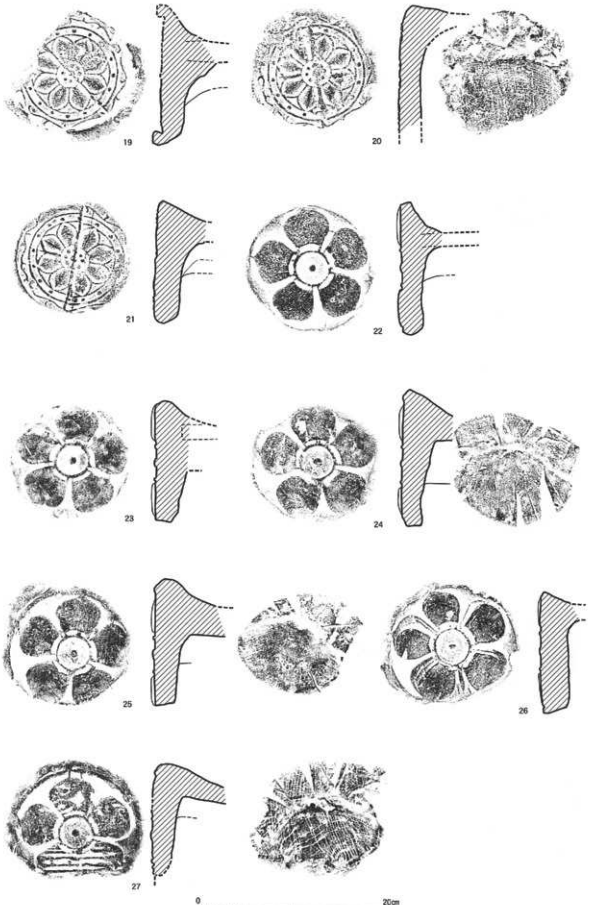


図29　軒丸瓦拓影および実測図（1：4）

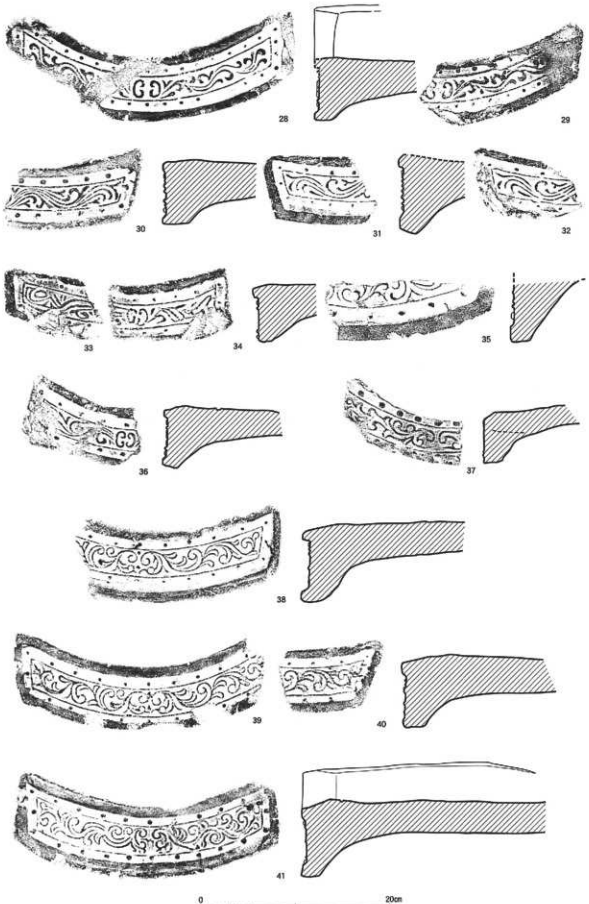


図30　軒平瓦拓影および実測図（1：4）

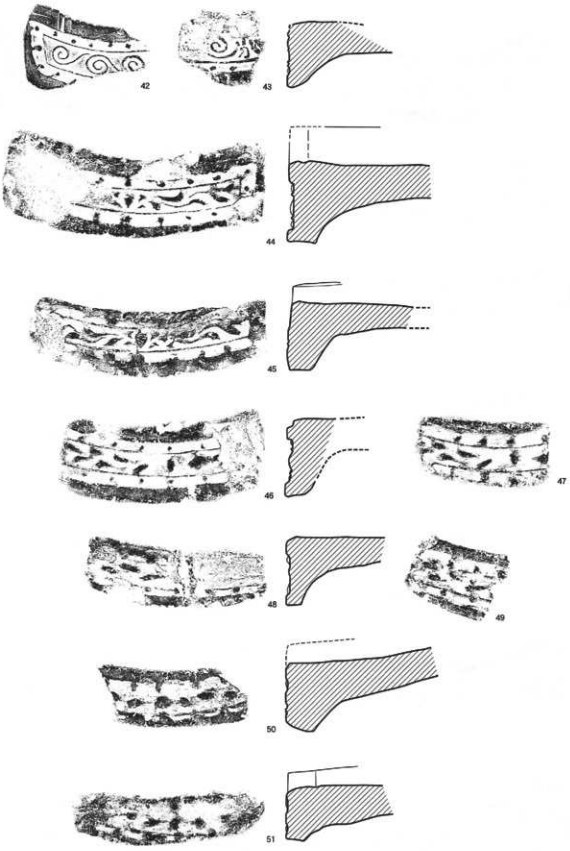


図31　軒平瓦拓影および実測図（1：4）

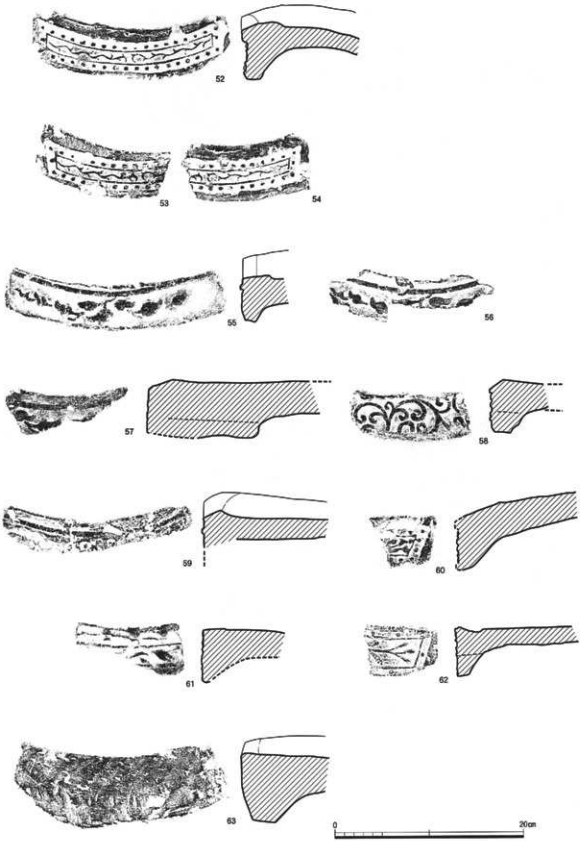


図32　軒平瓦拓影および実測図（1：4）

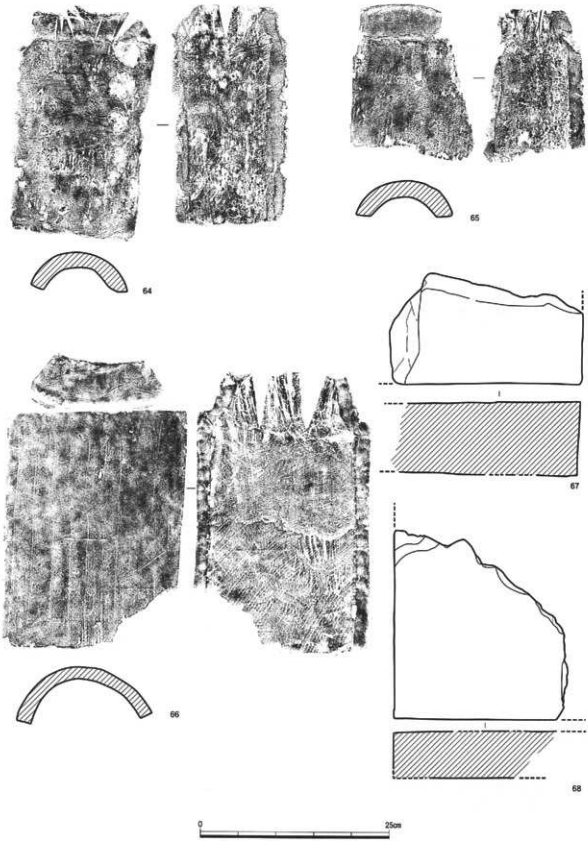


図33　丸瓦・塼拓影および実測図（1：5）

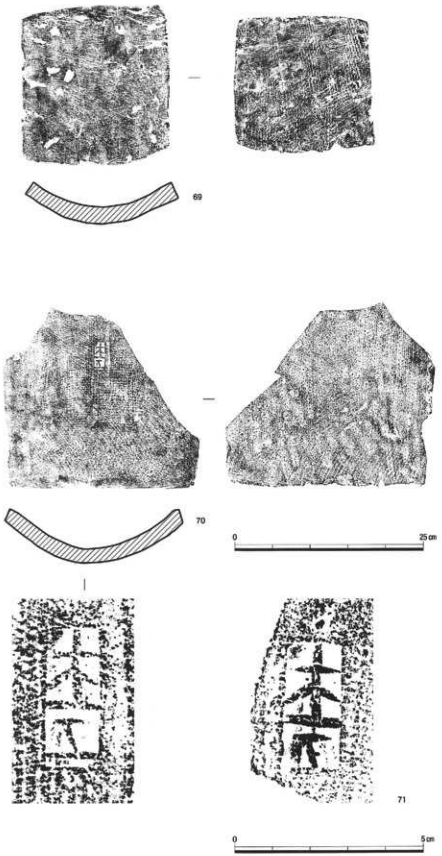


図34　平瓦拓影および実測図（1：5）・文字瓦拓影（1：1）

表1　瓦類観察表

遺物番号	種類	形式	文様の特徴	手法の特徴	備考
7	軒丸瓦	1類	複弁四葉蓮華文。 中房は界線が巡り、蓮子は不明。子葉は盛り上がる。間弁は撥形。外区は小粒の珠文が巡る。周縁は素文。	瓦当部成形は、成形台による一本造り。 瓦当部上半から丸瓦凸面にかけて丁寧な縦ケズリ。丸瓦凹面に布目。胎土は砂粒を含み、色調は暗灰色、焼成は良好。	3点出土。
8		2類	複弁十二葉蓮華文。 中房は平坦で圏線を巡り、蓮子は不明。子葉は盛り上がり、間弁は三角形。界線は弁に対応して巡る。外区は小粒の珠文が巡る。周縁は素文。	瓦当裏面剥離のため、瓦当部成形は成形台による一本造りと推定できる。 瓦当部上半ナデ。丸瓦凸面縦ナデ、凹面布目。胎土は小石を含み、色調はにぶい褐色、焼成は良好。	1点出土。 同文瓦が池田窯から出土。
9・10		3類	複弁八葉蓮華文。 中房は平坦で界線が巡り、蓮子は1＋5。子葉は長円形で輪郭線で囲む。界線はやや偏広。外区は珠文が粗く巡る。周縁は素文。 10は9に比べ笵の厚被が強しい。	瓦当部成形は、成形台による一本造り。 瓦当部上半から丸瓦凸面にかけて縦ケズリ。瓦当部下半横ケズリ。胎土は少量の砂粒を含み、色調は灰黄色、焼成は良好。	12点出土。 同文瓦が平安宮朝堂院龍尾壇・中務省から出土。
11		4類	単弁八葉蓮華文。 中房は平坦で、圏線が巡り、蓮子は1＋8。蓮弁は子葉が盛り上がり、輪郭線が囲る。先端は鋭角に接する。間弁は撥形で界線に接する。外区には珠文が巡り、対向の位置に『小・乃』銘を配す。『乃』字は弁縁に対応し珠文の位置に配し、『小』字は珠文間に配す。周縁は素文。	瓦当部成形は、成形台による一本造り。 瓦当周縁に側面痕跡あり。瓦当部上半から丸瓦凸面にかけて縦ケズリ。丸瓦凹面に粗い布目。胎土は砂粒を含み、色調は灰色、焼成は良好。	4点出土。 同笵瓦が平安宮大極殿・登楽院・内裏・民部省、三条西殿から出土。
12		5類	単弁九葉蓮華文。 中房は半円形で、蓮子は1＋5。子葉は細長く、輪郭線で囲む。外区は小粒の珠文が巡る。周縁は素文。	瓦当部成形は、成形台による一本造り。 瓦当部上半ナデ。胎土は少量の砂粒を含み、色調は灰色、焼成はやや軟質。	1点出土。 同文瓦が池田窯、仁和寺円堂院から出土。
13		6類	単弁八葉蓮華文。 中房は平坦で、圏線は巡らず、蓮子は不明。子葉は盛り上がり、弁に対応して輪郭線が巡る。周縁は不明。	瓦当裏面剥離のため、瓦当部成形は成形台による一本造りと推定できる。 瓦当部上半から丸瓦凸面にかけて縦ケズリ。胎土は少量の砂粒を含み（一部大きなぎも含まれている）、色調は灰白色、焼成は良好。	5点出土。 同文瓦が平安宮朝堂院・内裏、左京一条三坊九町から出土。
14		7類	複弁八葉蓮華文。 中房は平坦で圏線は巡らず、蓮子数は不明。子葉は盛り上がり、輪郭線で囲む。外区は小粒の珠文が粗く巡る。周縁は素文。	瓦当部成形は、成形台による一本造り。 瓦当部下半は横ナデ、裏面下半は横ケズリ。胎土は少量の砂粒を含み、色調は灰色、焼成は良好。	1点出土。
15		8類	複弁八葉蓮華文。 中房は平坦で圏線が巡り、蓮子は不明。子葉は盛り上がる。外区は小粒の珠文が巡る。周縁は素文。	瓦当裏面剥離のため、瓦当部成形は成形台による一本造りと推定できる。 瓦当部側面下半横ケズリ。胎土砂粒を含み、色調は灰色、焼成はやや軟質。	1点出土。
16～18		9類	単弁四葉蓮華文。 凸中房で、下の弁に対応して周囲が凹み、周りに鋸帯が巡る。蓮子は1＋8。蓮弁は上・下2重で交互に配する。上・下の蓮弁共に単弁4弁で弁端が返る。外区は珠文が密に巡る。周縁は素文。 18は、瓦当裏面に「I」ヘラ記号あり。	瓦当部成形は、成形台による一本造り(16)と、瓦当部貼付け(17)の2種類がある。 16は、瓦当部上半押さえ、瓦当部上半から丸瓦凸面にかけて強く縦ナデ。瓦当部側面下半横ケズリ。瓦当面下部は削られる。17は、瓦当部上半から丸瓦凸面にかけてナデ、側面下半は横ナデ、裏面下半1/3は円周状にナデ、上半は丸瓦凹面にかけて縦方向のナデ。胎土は砂粒を含み、色調は浅黄橙色、焼成はやや軟質。	7点出土。 同笵瓦が左京二条二坊から出土。 同文瓦が平安宮内裏殿、左京一条三坊九町から出土。

遺物番号	種類	形式	文様の特徴	手法の特徴	備考
19 ～ 21	軒丸瓦	10類	単弁八葉蓮華文。 中房は平坦で圏線が巡り、蓮子は数は1＋8。子葉は盛り上がり弁端は界線と接する。外区は小粒の珠文が巡り、さらに外側に唐草文が右回りに巡る。19は素文周縁があるが、他は無し。 瓦当の造行により1～3段階に分ける。 1段階（19）は中央に瓦が割れた傷がある。2段階（20）は1段階よりも中央の瓦割れが太くなり、間弁部分に瓦傷が1箇所ある。3段階（21）は2段階より中央瓦割れの付近に2つ瓦傷が増える。	瓦当部成形は、成形台による一本造り（20）と、瓦当部貼付け（19・21）の2種類がある。 20は、瓦当部上半ケズリ。19・21は、瓦当部上半から丸瓦凸面にかけて縦ナデ。瓦当部側面下半押さえ、裏面ナデ。瓦当部周縁上端は削られる。胎土は砂粒を含み、色調は瓦当表面浅黄色、中部灰色、焼成はやや軟質。	15点出土。 同笵瓦が森ヶ東窯、栗栖野窯、平安宮朝堂院衢尻遺・中務省・太政官・内裏殿・外記、仁和寺円堂院、寛寺、左京三条四坊四町から出土。
22 ～ 27		11類	単弁五葉蓮華文。 中房は平坦で圏線が巡り、中心に珠文1個。蓮弁は盛り上がり、弁端は尖る。弁周縁と中房が凸線で繋がる。周縁は無い。 瓦傷の進行により1～4段階に分ける。 1段階（22）は弁と中房の間に1つ、弁・中房の接続部に1つ、弁間に1つ。2段階（23）は1段階より、弁間に太い瓦傷が1つ増える。3段階（24）は2段階より、弁・中房の接続部に1つ増える。4段階（25）は3段階より、弁端と界線間に1つ増える。27は4段階で、瓦当部に傷状のもので横方向に削る。26は段階は不明、瓦老2度押し。	瓦当部成形は、瓦当部貼付け（22・23・26）と、成形台による一本造り技法（24・25・27）の2種類がある。1・2段階は瓦当部貼付け、3・4段階は一本造り。 22は、瓦当部上半から丸瓦凸面にかけて縦ナデ。瓦当側面下半横ナデ、裏面下半は不定方向のナデ、上半から丸瓦部凹面付近は横ナデ。24は、瓦当部上半から丸瓦凸面にかけて縦ナデ。瓦当側面下半は横ケズリ。胎土は砂粒を含み、色調は灰色、焼成はやや軟質。	51点出土。 同笵瓦が左京二条二坊、法勝寺から出土。 同文瓦が柄土墓、平安宮民部省・内裏から出土。
28 ・ 29	軒平瓦	1類	唐草文。 中心飾りは対向C字で、唐草文は両側に緩やかに3回反転する。上側支葉は先端が2又に分かれる。外区は珠文が巡り、珠文上15、下15、脇4。周縁は素文。 瓦傷の進行により1・2段階に分ける。 1段階（28）は、瓦傷を確認できない。 2段階（29）は1段階より、瓦が摩滅し、上半珠文が周縁部と接する。	瓦当部成形は不明。曲線顎。 28は、瓦当部凹面横ケズリ。側面斜方向のナデ。顎部凸面横ケズリ、裏面横ケズリ後ナデ。平瓦部凸面不明、凹面布目。 29は、瓦当部凹面端部横ケズリ。顎部凸面横ケズリ、裏面横ケズリ後ナデ。凸面縦ケズリ。胎土は砂粒を含み、色調は灰黄褐色、焼成はやや軟質。	3点出土。 同笵瓦が平安宮中務省から出土。 同文瓦が平安宮朝堂院・豊楽院・民部省・中務省・太政官・内西廊、右京三条一坊二町、右京三条二坊十六町、右京七条一坊から出土。
30		2類	唐草文。 中心飾りは対向C字。唐草文は両側に緩やかに3回反転する。主葉の先端は2又に分かれ、支葉も主葉に沿って緩やかに反転し、内側は先端が2又に分かれる。珠文上11、下11、脇3。周縁は素文。	瓦当部成形は不明。曲線顎。 瓦当部凹面横ケズリ、側面縦ケズリ。顎部凸面ナデ、裏面横ナデ。平瓦部凹面布目で両側縁縦ケズリ。凸面縦ナデ、側面縦ナデ。胎土は少量の砂粒を含み、色調は暗灰色、焼成はやや軟質。	1点出土。 同笵瓦が栗栖野窯、平安宮六條院・朝堂院・内裏・民部省・内西廊から出土。 同文瓦が栗栖野窯、平安宮内裏外郭・中和院・真言院・造酒司、左京二条二坊、右京三条二坊十六町、三条西殿跡、仁和寺円堂院から出土。
31 ・ 32		3類	唐草文。 中心飾りは対向C字。唐草文は両側に緩やかに3回反転する。主葉の先端は2又に分かれ、支葉も主葉に沿って緩やかに反転するが、所々で先端が2又に分かれる。上下脇に珠文あり、脇3、上下不明。周縁は素文。瓦傷の進行によって1・2段階に分ける。1段階（31）は瓦傷なし。2段階（32）は1段階より界線に瓦傷1つ増える。	瓦当部成形は不明。曲線顎。 31は、顎部凸面横ナデ、裏面ナデ、側面縦ケズリ。32は、瓦当部凹面横ケズリ。平瓦部凹面布目で両側縁縦ケズリ。胎土は少量の砂粒を含み、色調は暗灰、焼成はやや良好。	5点出土。 同文瓦が平安京内裏、仁和寺子院から出土。
33 ・ 34		4類	唐草文。 中心飾りは対向C字。唐草文は複線で両側に反転する。左・右の文様は異なる。珠文は上7、下不明、脇3。周縁は素文。	瓦当部成形は不明。曲線顎。 47は、瓦当部凹面横ケズリ、側面横ナデ。顎部凸面横ナデ、裏面縦ケズリ後ナデ。平瓦部凹面縦かい布目で両側縁縦ケズリ、側面ナデ。胎土砂粒を含み、色調は灰黄色、焼成はやや軟質。	2点出土。 同笵瓦が修学院村大字高野発見古瓦（京都府史跡名所報告書2巻）から出土。

遺物番号	種類	形式	文様の特徴	手法の特徴	備考
35	軒平瓦	5類	唐草文。 中心飾りは対向C字。唐草文は両側に2回反転する。主葉先端は2又に離れ、支葉は強く巻き込む。珠文は上不明、下7、脇不明。周縁は素文。	瓦当部成形は、平瓦凸面に顎部の粘土を付加する。 瓦当部側面ケズリ。顎部凸面横ケズリ、裏面横ナデ、指圧痕跡残存。胎土は砂粒を含み、色調は灰色、焼成は良好。	2点出土。 同文瓦が平安宮朝堂院から出土。
36		6類	唐草文。 中心飾りは対向C字。唐草文は緩やかに両側に3反転する。支葉先端は2又に分かれる。珠文は上8、下8、脇3。周縁は素文。	瓦当部成形は不明。曲線顎。 瓦当部凹面横ケズリ、側面不明。顎部凸面ケズリ、裏面縦方向のケズリ後ナデ。平瓦凹面布目で両側縁縦ケズリ、凸面縦方向のケズリ後ナデ、側面横ケズリ。胎土砂粒を含み、色調は灰色、焼成は良好。	3点出土。 同笵瓦が平安宮内裏から出土。
37		7類	唐草文。 中心飾りは下向きC字を2つ並列する。唐草文は両側に3回反転する。主葉は連続して緩やかに反転し、子葉は緩やかに巻き込む。珠文は上9、下不明、脇なし。周縁は不明。	瓦当部成形は、平瓦凸面に顎部の粘土を付加する。 瓦当部凹面横ケズリ、側面縦ナデ。顎部凸面横ケズリ、裏面ケズリ。平面凹面細かい布目、凸面縦ケズリ。胎土は少量の砂粒含み、色調は灰色、焼成は良好。	14点出土。 同笵瓦が平安宮朝堂院、法勝寺から出土。 同文瓦が柯上窯、池田窯、平安宮内酒殿、三条西殿から出土。
38～40		8類	唐草文。 中心飾りは対向C字で、中央に菱形珠文2個あり。唐草文は複線で両側に3回反転する。主葉は大きく反転し、子葉は2個づつで小さく回る。珠文は上9、下9、脇3。周縁は素文。 笵傷の進行により1～2段階に分ける。 1段階（38）は、右脇区に笵傷1個。2段階（39・40）は1段階より、中心部に笵傷1個、右唐草1転目に1個、左脇区に3つ増える。	瓦当部成形は、平瓦凸面に顎部の粘土を付加する。曲線顎。 38は、瓦当部凹面横ケズリ。顎部凸面横ナデ、裏面縦ケズリ。側面縦ケズリ。平瓦凹面布目で両側縁縦ケズリ。凸面・側面縦ケズリ。39・40は、瓦当部凹面横ケズリ、後横ナデ。顎部凸面横ケズリ、裏面は平瓦凸面にかけ縦ケズリ。側面縦ケズリ。平瓦凹面布目で両側縁縦ケズリ、凸面・側面縦ケズリ。胎土は少量の砂粒を含み、色調はにぶい黄橙色、焼成はやや軟質。	18点出土。 同文瓦が平安宮朝堂院・豊楽院・内裏・中務省、左京二条二坊・右京三条一坊二町・右京八条二坊、円宗寺、仁和寺円堂院、沢ノ池遺跡から出土。
41		9類	唐草文。 中心飾りは対向C字で、中央に小葉を配す。唐草文は複線で両側に3回反転する。主葉、子葉は大きく反転する。珠文上9、下9、脇3。周縁は素文。	瓦当部成形は不明。曲線顎。 瓦当部凹面横ケズリ、側面横ナデ。顎部凸面横ケズリ、裏面横ケズリ。平瓦部凹面布目で両側縁縦ケズリ、凸面縦ケズリ、側面縦ケズリ。胎土は少量の砂粒を含み、色調は灰白、焼成はやや軟質。	11点出土。 同笵瓦が平安宮豊楽院から出土。 同文瓦が平安宮中務省・内膳殿・朝堂院・神祇官・近衛府、三条西殿、右京七条一坊から出土。
42・43		10類	唐草文。 中心飾りは「小乃」。唐草文は両側に3回反転する。主葉は連続して大きく反転、支葉は巻き込む。珠文は上12、下12、脇3。周縁は素文。瓦当面周縁に調整痕あり。	瓦当部成形は不明。曲線顎。 42・43は、瓦当部凹面横ケズリ、側面縦ケズリ。顎部凸面横ケズリ、裏面ナデ。平瓦部凹面布目で両側縁縦ケズリ、凸面縦ケズリ。胎土は少量の砂粒含み、色調は褐灰色、焼成はやや軟質。瓦当周縁は叩き目あり。	19点出土。 同笵瓦が平安宮内裏・太政官（平安京古瓦図録378）から出土。
44～51		11類	唐草文。 中心飾りは花弁で、中心は紡錘形。唐草文は各単位が離れ上下に派生する。珠文上8、下8、脇3。周縁は不明。 笵傷の進行により1～6段階に分ける。 1段階（44）は、右脇区に1個笵傷あり。 2段階（45）は1段階より、全体的に笵傷が増える。右脇区の笵傷が進行する。 3段階（46・47）は2段階より、中心飾りの両脇が笵傷のため不明瞭になる。下外区珠文に笵傷が増える。4段階（48・49）は3段階より、全体的に笵が摩滅し、中心飾りに縦に笵傷が入る。5段階（50）は4段階より、さらに笵が全体的に摩滅し、珠文が不明瞭になる。上外区は界線が無くなり珠文は周縁と接する。下外区は珠文が界線と周縁に接する。6段階（51）は5段階より、さらに笵が全体的に摩滅し、文様が不明瞭になる。	瓦当部成形は不明。曲線顎。 44は、瓦当部凹面横ケズリ、側面横ナデ。顎部凸面横ケズリ、裏面横ナデ。平瓦凹面細かい布目、凸面縦ケズリ。側面縦ナデ。45は、顎部裏面縦ケズリ。平瓦部凹面右端縦ケズリ。46・47は、瓦当部側面縦ナデ。顎部凸面横ナデ。平瓦部凹面布目。48・49は、平瓦凹面布目で両側縁縦ケズリ、凸面押さえ。50・51は、瓦当部凹面横ナデ。顎部凸面横ナデ、裏面ナデ後押さえ。平瓦部側面横ナデ。胎土は砂粒を含み、色調は浅黄色、焼成はやや軟質。	52点出土。 同笵瓦が平安宮内裏、左京三条三坊十一町から出土。 同文瓦が平安宮朝堂院豊楽堂、仁和寺円堂院から出土。

遺物番号	種類	形式	文様の特徴	手法の特徴	備考
52 ～ 54	軒平瓦	12類	唐草文。 唐草文は両側から中心に反転。主葉は緩やかに反転し、支葉は巻き込む。珠文は上16、下16、脇3。周縁は素文。 瓢箪の進行により1・2段階に分ける。 1段階（52）は、内区に瓢箪が1つ、下外区に瓢箪1つ。右界線瓢箪が1つある。 2段階（53・54）は1段階より、上外区に瓢箪が2つ、下外区に1つ増える。	瓦当部成形は不明。曲線顎。 瓦当部凹面横ケズリ、側面縦ケズリ。顎部凸面横ケズリ、裏面押さえ後ナデ。平瓦凹面布目、凸面押さえ後縦ケズリ。側面縦ナデ。胎土は少量の砂粒を含み、色調は褐灰色、焼成はやや良好。	20点出土。 同笵瓦が左京二条二坊から出土。 同文瓦が栗栖野窯、平安宮兵部省、三条西殿、法勝寺から出土。
55 ～ 57		13類	宝相華文。 蕚肉彫の雲盤状の花弁を中央に釣りさげるように配し、その茎から左右に蕚肉彫の花弁を3個連ねる。 瓢箪の進行により1・2段階に分ける。 1段階（55）は、内区に瓢箪が1つある。 2段階（56）は1段階より、界線に瓢箪が1つ増える。外区に文様と同様の花弁を伸張する。	瓦当部成形は、平瓦凸面に顎部の粘土を付加する。曲線顎。 55は、瓦当部凹面ケズリ、側面縦ケズリ。顎部凸面横ケズリ、裏面押さえ一部ケズリ。平瓦部凹面左端に布目、凸面縦ケズリ、側面縦ケズリ。56は、平瓦凸面押さえ。57は、瓦当部凹面ケズリ。顎部凸面・裏面強いナデ。平瓦部凹面細かい布目、凸面ナデ。顎の長さが約12cmある。胎土は少量の砂粒を含み、色調は灰色、焼成はやや軟質。	18点出土。 同文瓦が池田窯、平安宮内裏・民部省、東寺、左京一条三坊九町、左京二条二坊九町、三条西殿から出土。
58		14類	唐草文。 唐草文は大きく反転し、右方向に反転する。支葉は大きく巻き込む。中心は不明。周縁不明。	瓦当部成形は、平瓦凸面に顎部の粘土を付加する。 瓦当部凹面ケズリ、側面上半ケズリ、下半押さえ。顎部凸面横ケズリ、裏面押さえ後ナデ。平瓦凹面布目、凸面押さえ。胎土は砂粒を含み、色調は明黄褐色、焼成はやや軟質。	6点出土。 同笵瓦が左京二条二坊から出土。
59		15類	唐草文か。 上半に界線があり、中央部に竹管を横方向に連続して押しつける。竹管の間隔は不規則である。周縁不明。	瓦当部成形は不明。曲線顎。 瓦当部凹面横ケズリ、側面ケズリ。顎部凸面・裏面不明。平瓦部凹面布目で周側縁縦ケズリ、側面ケズリ。胎土は砂粒を含み、色調は浅黄橙色、焼成は軟質。	1点出土。
60		16類	唐草文。 中心飾りは不明、唐草文は両側に反転する。珠文は上下不明、脇4。周縁は素文。	瓦当部成形は不明。曲線顎。 瓦当部凹面ケズリ、側面ケズリ。顎部凸面・裏面不明。平瓦部凹面布目、凸面縦ケズリ、側面ケズリ。胎土は少量の砂粒を含み、色調は灰色、焼成はやや軟質。	1点出土。
61		17類	唐草文。 中心飾り不明。唐草は両側に各単位離れて展開する。上外区のみ珠文帯があり、珠文は粗く巡り周縁部と接する。周縁は素文。	瓦当部成形は不明。曲線顎。 瓦当部凹面ケズリ、側面ケズリ。顎部凸面横ケズリ、裏面不明。平瓦部凹面布目、凸面離れ砂付着。側面横ケズリ。胎土は砂粒を含み、色調はにぶい黄橙色、焼成はやや良好。	1点出土。
62		18類	宝相華文。 唐草文は両側に展開する。主葉・支葉共に直線的にのびる。先端はふくらむ。外区は粗い珠文帯。周縁は素文。	瓦当部成形は、平瓦凸面に顎部粘土を貼り付け。 瓦当部凹面細かい布目で端部横ケズリ、側面縦ケズリ。顎部凸面横ケズリ、裏面押さえ。平瓦部凹面細かい布目で側縁縦ケズリ、凸面押さえ、側面縦ケズリ。胎土は少量の砂粒を含み、色調は灰色、焼成は良好。	2点出土。
63		19類	文様無し。 瓦当面はケズリで仕上げる。	瓦当部成形は不明。曲線顎。 瓦当部凹面横ケズリ、顎部凸面横ケズリ、裏面丁寧な押さえ。胎土は砂粒を含み、色調は灰白色、焼成は良好。	

遺物番号	種類	形式	文様の特徴	手法の特徴	備考
64	丸瓦	1類		凹面布目で糸切り痕跡あり、一部離れ砂が付着。凸面縄叩きで横ナデ。側面ケズリ。胎土は砂粒を含み、色調はにぶい橙色、焼成は軟質。	
65		2類		凹面布目で糸切り痕跡あり。凸面縄叩き後丁寧なナデ。側面ケズリ。胎土は少量の砂粒を含み、色調はにぶい橙色、焼成は軟質。	
66		3類		凹面布目で糸切り痕跡あり、一部離れ砂が付着。凸面縄叩きで、丁寧な横ナデ。側面ケズリ。胎土は少量の砂粒を含み、色調は灰色、焼成は良好。	
67	埠	1類	全容不明。厚さ9.5cm。	側面、上・下面共にナデ。胎土は砂粒を多く含み、色調は灰色、焼成はやや軟質。	
68		2類	形は、正方形と推定。厚さ5.8cm。	側面ケズリ後ナデ。上・下面は一定方向のナデ。胎土は精良、色調は黒灰色（表面）・黄灰色（中）、焼成は良好。	
69	平瓦	1類		凹面布目で糸切り痕跡あり、一部離れ砂が付着。凸面叩き。側面ケズリ。胎土は砂粒を含み、色調は灰色、一部浅黄橙色、焼成は良好。	
70・71		2類		平瓦凹面に陽刻の「木工」銘の印を押捺。凹面細かい布目で糸切り痕跡あり。凸面縄叩き。側面ケズリ。胎土は少量の砂粒を含み、色調は灰色、焼成良好。	平安宮太政官・内酒殿
72	鬼瓦	1類	右上半のみ残存。眼球が飛び出し、瞼が大きい。周縁に珠文帯をつくる。	成形は、粘土板の上面に粘土を付加し、文様をつくる。裏面縦ケズリ、側面ナデ。右上半のみ残存。胎土は少量の砂粒を含み、色調は灰色、焼成は良好。	
73		2類	右上半のみ残存。眼球が大きく眉が太い。瓶傷が確認できる。	成形は瓶による成形。調整不明。胎土は少量の砂粒を含み、色調は灰色、焼成はやや軟質。	
74		3類	右上半のみ残存。周縁に界線が2重に巡り、間に密な珠文を配す。瓶傷が多い。	成形は瓶による成形。側面横ナデ。胎土は砂粒を含み、色調は灰色、焼成は良好。	

※刻印は5点出土するが、全て同じである。

時代のものと考えられる。

土錘（76）は一方の端が欠損しているがほぼ形状を保っている。細長い紡錘形で中心に円孔が貫通している。外面には整形時の指圧痕が認められる。残存重量12g、瓦質である。包含層から出土している。

4 まとめ

今回の調査における最大の成果は瓦窯跡を確認できたことである。これによって「小野瓦窯跡」が文字通り瓦窯跡であったことを確定することができた。また、このことは『延喜式』に登場する官窯、「小野瓦屋」の所在が明らかになったことでもある。『延喜式』にはもう一つの「栗栖野瓦屋」が記載されているが、これについては、同じ岩倉盆地の南西の端にある幡枝地区に想定されており、

ここでは既に多くの瓦窯跡が発見、調査されている。従って、今回の発見によって『延喜式』に登場する二つの官窯の位置がそれぞれ確定できたことになる。以下、調査で明らかにできた点といくつかの問題についてついてまとめる。

(1) おかいらの森について

今回の調査ではいずれの調査区でも、いわゆる地山（無遺物層）を確認することはできなかった。つまり、この「おかいらの森」と呼ばれる小丘は自然地形ではなく、全て人工的に盛り上げて形成されている可能性が高いことがわかった。平安時代の基盤層である暗赤褐色砂泥層の中にも瓦や焼土、炭、窯体の一部までもが大量に含まれており、それ自体が瓦の生産過程で生み出された廃棄物であると考えられる。その総量はおよそ770m³におよぶものと推定できる。この膨大な廃棄物の存在は、それに見合った多くの瓦窯がさらにこの周辺に埋没している可能性を示すものであり、小野瓦窯跡群全体の規模を探る上で貴重な資料となるものといえる。

(2) 窯跡について

立地　1号窯の最大の特徴はその立地にある。上述のごとく、おかいらの森自体は廃棄物で盛り上げられた丘であるが、瓦窯本体はこの丘を掘り込んで構築されている。なぜこうした立地であるかについては不明である。ただ、現在おかいらの森の西裾を流れる水路が常に豊富な水量を保っていることが示すように、周辺は地下水位が高い可能性がある。水分を嫌う窯が、それを避けるために人工的な丘を必要としたとは考えられないだろうか。

構造　検出した窯跡は全長およそ3.6m、半地下式の有牀式平窯である。これらは平安時代前期の官瓦窯として知られる岸部瓦窯[8]、西賀茂瓦窯[9]、あるいは中期の池田瓦窯[10]など平安京の近郊で検出されている窯と規模・構造共にさほど差は認められない。ただ、今回の窯は分焔牀の中央にあたる焔道の幅が他よりも狭い特徴がある。最も火当たりの強い中央部を制限することによって、焼成室全体の温度を均衡に保つための工夫とみられる[11]。また、窯に付属する施設として奥壁に接して作られた土壙2がある。当初、これについては先行する別の窯の掘形と考えていた。しかし、1号窯との重複関係を検討した結果、同時期のものであることがわかり、現在はその位置や規模、形状などから窯詰め、窯出しなどの際に用いる作業空間として設えたものであると判断している。

年代　1号窯の操業年代に関しては、焼成した軒瓦の型式から推測することができる。ただ、灰原の調査を行っていないので焼成した軒瓦を特定することは難しい。しかし、窯体内や焚き口付近で採集した比較的量の多い型式の瓦を製品と仮定することは可能であろう。現段階ではこの内最大の出土量を誇る軒丸瓦11類、これと組み合うと考えられる軒平瓦11・13類、それに次ぐ出土量の軒丸瓦10類、これと組み合う考えられる軒平瓦12類などを1号窯の製品と考えている。これらについては現在11世紀前葉のものと考えている[12]。一方、窯体の埋土からは11世紀中葉の土器が出土している。従って、1号窯の操業年代は11世紀前葉を中心とし、中葉には廃絶したとみられる。また、今回の調査区全域の出土遺物にも11世紀中葉以降のものは認められない。このことから1号窯はおか

いらの森（小野瓦窯）最後の瓦窯であった可能性が高い。また、廃絶に際しては焚き口部分を石で丁寧に閉塞しており、計画的であったと思われる。

（3）出土瓦について

瓦からみた小野瓦窯の存続年代　1号窯に関しては上述の通り11世紀前葉の操業と考えているが、調査で採集した軒瓦にはそれに先行するとみられる型式のもの多数ある。この内、軒平瓦1類や2類は今回の資料で最も古い型式とみており、9世紀中葉のものと考えられる。[13]その他の型式の瓦は、この瓦と上述の1号窯の瓦の間に比定できるものと考えている。[14]従って、小野瓦窯跡群全体の存続年代は9世紀中葉から11世紀前葉までの間と考えられよう。

これらの中で10世紀の前葉に比定できる軒丸瓦3類、軒平瓦7・8・9類、上述した11世紀前葉に比定できる軒丸瓦10・11類、軒平瓦11・12・13類の出土量が多く、この2つの時期に画期があったものと考えられる。

瓦の分布傾向　調査では調査区全域で総数332点におよぶ軒瓦を採集しているが、その分布に特徴が認められる。上述のごとく調査区南部の瓦窯周辺では11世紀代の瓦が多く出土している。しかし、調査区の北側では11世紀代の瓦は少なく、それよりも古い形式の瓦が多く出土する。特に、今回の資料で最も古い形式とみられる軒平瓦1・2類などは1トレンチの北半に堆積する褐色砂泥層や平安時代の基盤層である赤褐色砂泥層から出土している。つまり、北から南に向かって散布する瓦が新しくなって行く傾向が認められる。今後、層位的な検討が必要があるが、おかいらの小丘の形成過程を解く手がかりの一つになるかも知れない。

製作技法　軒瓦の製作技法については二つの点を指摘しておく。一つは時代が下がるにつれて、製品の質が大きく低下していく点である。特に小野瓦窯終焉間近と推定できる11世紀代の瓦には、瓦当に明瞭な笵傷をそのままの残しているものや、笵の傷みが進行し、もはや文様として認識が困難なものも含まれている。生産遺跡であるから不良品として処分された品が含まれているためと思われるが、消費地でもこうした製品が少なからず認められることから、多くは製品として出回っていたものとみられる。

もう一つは軒丸瓦の技法についてである。今回の資料には、同じ笵の軒丸瓦でありながら瓦当裏面に布目のつくいわゆる「成形台による一本造り」のものと、それとは異なる「接合式」のものの2種が存在することが認められた。しかも複数の型式のものにこの現象が認められる。こうした事実は、同じ工房内に異なった技術集団が存在したことを示していると思われ、瓦屋内の生産体制を考察するに際して興味深い事実である。

（4）他遺跡との関連

他の生産遺跡との関連　小野瓦窯と最も関連が深い生産遺跡はやはり同じ『延喜式』に記載された栗栖野瓦窯であろう。今回の調査でも同笵の軒平瓦1点と多くの同紋の瓦を確認している。[15]同笵の瓦は栗栖野瓦窯のものより笵傷に進行が認められることから、栗栖野瓦窯から小野瓦窯へ瓦当笵

が移動した可能性を示唆している。また、栗栖野瓦窯では「木工」の刻印のある瓦が採集されている[18]が、今回の資料にも「木工」の刻印のある平瓦が数点ある。栗栖野瓦窯のものは陰刻であり、今回のものは陽刻でサイズも小さいといった違いはあるが、書体には強い共通性がある。「木工」は木工寮を示すと考えられ、共に木工寮所管の官窯であることの証である。

その他に、修理職に属すると考えられている京都市東山区今熊野池田町の大谷高校で発見された池田瓦窯[17]、京都市右京区森ヶ東で発見された森ヶ東瓦窯[18]、右京区太秦安井西裏町で発見された安井西浦瓦窯[19]、北区西賀茂丸川町の河上瓦窯[20]などにも類似性の強い同文の瓦が認められる。このように現在認識されている平安京の近傍で営まれた平安時代中期の主だった瓦窯群全てにおいて、同紋の軒瓦が認められることは、小野瓦窯を含めたこれらの生産遺跡間に極めて密接な関係があったことを示すものであり、当時の瓦生産体制を考察する上で興味深い。

供給先について　消費地に関しては充分に検討できていない。現状では平安宮[21]、平安京左京二条二坊の高陽院[22]、鴨東岡崎に造営された法勝寺の下層[23]などに同笵の軒瓦が存在していたことを把握している。この中で高陽院と法勝寺下層からは１号窯の製品とみている瓦が多く出土している。高陽院は平安時代中期に摂政・関白として権力の中枢に上りつめた藤原頼通が造営した邸宅で、『栄華物語』や『駒競行幸絵巻』にも記された平安時代を代表的する邸宅である。一方、法勝寺の地は元来藤原氏の別業が存在した所である。藤原頼通の死後これを継承した藤原師実が時を経ずして承保２年（1075）に白河天皇に献上[24]し、そこに法勝寺が造営された経緯がある。従って、法勝寺下層の遺物は前身である藤原頼通の別業に伴うものである可能性が高い。このように１号窯の製品の出土地点が共に、藤原頼通に関連する遺構であることは非常に興味深い。

以上、ごく簡単にまとめたが、今回の調査によって、おかいらの森「小野瓦窯」の実態解明に大きな一歩を踏み出すことができた。さらに、小野瓦窯をめぐる新たな課題もみえてきた。今後これらの調査、研究を継続的に進める必要があろう。なお、本報告作成にあたって、瓦の分類、整理について帝塚山大学の学生、鈴木久史氏に応援していただいた。記して感謝したい。

註

1）梅原末治「小野毛人の墳墓と其の墓誌」考古学雑誌第７巻第８号　1917年

2）梅原末治「修学院村高野ノ古瓦出土地」『京都府史跡勝地調査会報告』第２冊　京都府　1920年

3）梅原末治「修学院村平安京所用瓦址」『京都府史跡勝地調査会報告』第３冊　京都府　1922年

4）木村捷三郎「平安中期の瓦についての私見」『延喜天暦時代の研究」　吉川弘文館　1969年
　木村捷三郎「造瓦と考古学」　木村捷三郎先生頌寿記念論集刊行会　1976年

5）板東善平「小野瓦窯址出土の瓦について」『古代文化」第10巻第５号　(財)京古代学協会　1963年

6）馬瀬智光「小野瓦窯跡」『京都市内遺跡試掘調査概報」平成９年度　京都市文化観光局　1998年

7）窯体各部の名称については『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』昭和60年度（京都市文化観光局　1986年）に準じる。

8）『岸辺瓦窯跡発掘調査概報　－吹田市小路－』　大阪市教育委員会　1968年

9）『平安京跡研究調査報告　第4　－西賀茂瓦窯跡－』（財）古代学協会　1978年
南　孝雄「上ノ庄田瓦窯跡」『平成12年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　2003年

10）『大谷中・高等学校校内　遺跡発掘調査報告』　大谷高等学校法住寺殿遺跡調査会　1984年

11）浅田製瓦工場　浅田晶久氏のご教授による

12）同笵の瓦が法勝寺の造営（落慶供養：承暦元年〔1077〕）に伴って埋没した溝状遺構から11世紀中頃の土器類と供搬している。
『法勝寺跡発掘調査概報』昭和61年度　京都市文化観光局　1987年

13）植山　茂「平安時代中期の官瓦窯について」『瓦衣千年　森郁夫先生還暦記念論文集』　森郁夫先生還暦記念論文集刊行会　1999年

14）註13文献において植山氏は小野瓦窯は「平安時代中期前半代以降生産を中断し、11世紀代に一時的に再開した」としている。しかし、今回の調査によって10世紀代に比定できる瓦が新たに認められ、これまでものにも瓦当笵に著しい痛みの進行や再三にわたる追刻が認められる状況などから、11世紀代まで継続的に生産されたとみるのが妥当であろう。

15）今回報告の軒平瓦（30）と『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』平成4年度（京都市文化観光局　1993年）に記載されている軒平瓦（65）が同笵であるとみられる。また『木村捷三郎収集瓦図録』（財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年）所収の「栗」銘軒丸瓦（No.1366）について『器瓦録想』（伏見城研究会編　2004年）では、おかいらの森の採集とし、栗栖野瓦窯と小野瓦窯を結びつける有力な根拠とみているが、この瓦については今回の資料には全くみとめられない。

16）『木村捷三郎収集瓦図録』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996年

17）註10文献に同じ

18）久世康博「森ヶ東瓦窯（UZ18）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度　京都市文化観光局　1987年

19）田中利津子・辻　裕司・大立目　一「平安京右京二条四坊・安井西裏瓦窯」『平成9年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1999年

20）木村捷三郎「京都洛北「川上瓦窯」址発見の宇瓦について」『古代文化』第27巻第10号　1975年

21）網　伸也・鈴木久男「平安京内裏」『平安京跡発掘調査概報』昭和63年度　京都市文化観光局　1989年

22）平尾政幸・辻　純一「左京二条二坊（2）高陽院跡」『平安京跡発掘調査概報』昭和56年度　京都市文化観光局　1982年

23）註12文献に同じ

24）『百練抄』承保二年六月十三日条

Ⅲ　鳥羽離宮150次調査

1　調査経過

この調査は貸事務所新築工事に伴い実施したもので、鳥羽離宮関連では150次の調査となる。調査対象地は北に鳥羽天皇陵、東に近衛天皇陵、西は北向山不動院に囲まれた一角で、東殿庭園の一部である。調査地の道路をはさんだ北隣で実施した134次調査や調査地の東で行われた112・117次調査では、東殿の園池と洲浜を検出しており、その広がりを確認することを目的として調査を行った。とくに134次調査では園池北西汀の洲浜を確認しており、当調査地では南へ延長する洲浜の存在が期待できた。

計画建物面積は約７ｍ×13ｍの92.74㎡であったが、隣家と接する部分にゆとりを持たせて、調査区を南北６ｍ、東西13ｍに設定し調査を実施した。実際の調査面積は81.25㎡で、期間を考慮して池検出面までは重機を導入して掘り下げ、池確認後池埋土は人力で除去した。湧水が激しく壁面崩落の恐れがあったため埋土掘り下げは壁際約１ｍを残して行い、東殿の園池跡と洲浜の一部を検出した。調査期間は平成16年５月25日から６月６日までで、実働10日である。なお、調査中の排土は全て場外処分とした。

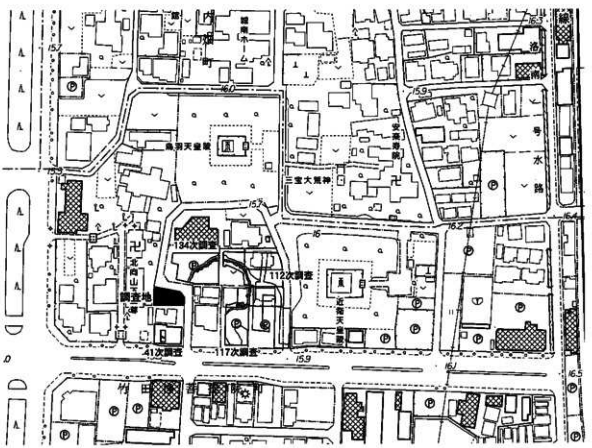


図35　調査地位置図（１：2,500）

図36　調査前全景

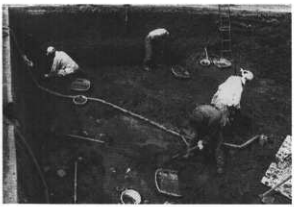


図37　調査状況

2 遺　構

調査区の基本層序は、調査直前まで使用されていた駐車場の整地と舗装（20cm）、耕土（10cm）、圃場整備に伴う整地（40cm）、床土（10cm）、江戸時代の整地（20～30cm）、桃山時代の流路、湿地跡（40cm）、その下に池埋土を検出した。調査期間の都合上、池上面までは調査対象とせず。調査を行った遺構はこの池のみである。池埋土は暗褐色腐植土が40cmほど堆積し、建築部材と思われる木片が多く含まれる。その下層に褐灰色粘土が堆積し、池底部は小石と砂が5～10cmほどの厚みで広がる。調査区西北隅でわずかながら洲浜の立ち上がりが認められ、その傾斜に沿って瓦や土器が分布していた。調査区西壁の観察では腐植土層は薄く、その下に細かな白砂と腐植土との互層堆積が10cm程の厚さで認められる。北壁には白砂の堆積はごくわずかであり、洲浜の景観が

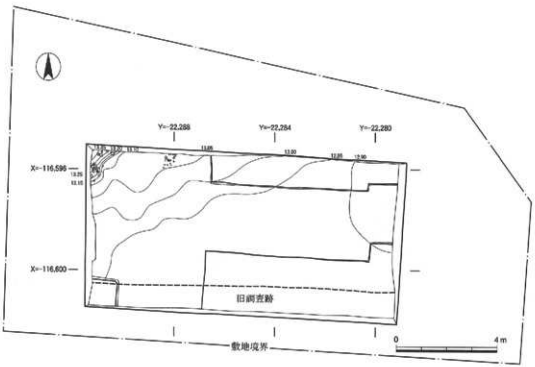


図38　調査区遺構平面実測図（1：150）

図39　北壁断面実測図（1：50）

変化する地点のようである。池の下に旧流路と思える微砂、細砂、粘土の堆積が認められたが面での確認はできていない。

3 遺　物

遺物は整理箱11箱出土している。全て池SG1からの出土で、その内容は土師器・瓦器・須恵器・焼締陶器・磁器・瓦・木製品等である。量的には瓦がもっとも多い。

(1) 土器類

土器類では暗褐灰色腐植土からは12世紀後半の土師器・瓦器・須恵器・焼締陶器が、池底部の小石敷きの下層粘土からは、11世紀中頃の土師器・瓦器・白磁が出土している。

池SG1腐植土層出土土器　土器類は総破片数1,571片あり、その内容は土師器93.4%、瓦器6.1%、

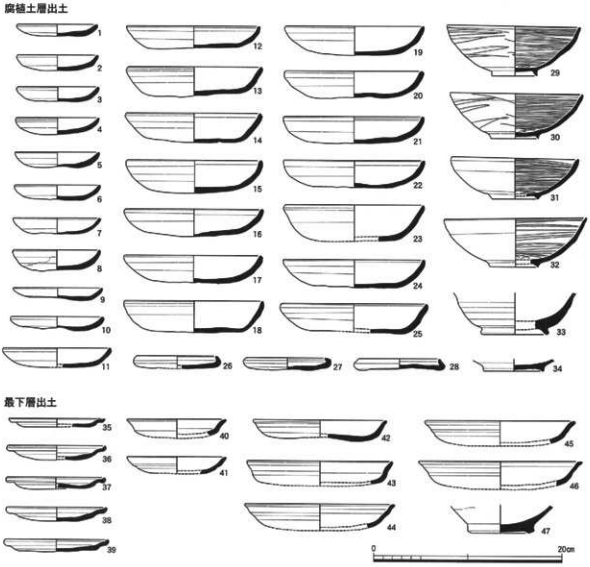


図40　SG1出土土器実測図（1：4）

須恵器0.5%、その他焼締陶器が１点ある。機能別に見るとその殆どが椀皿などの供膳具である。量的にもまとまりのある平安京Ⅴ期新（12世紀後半）の資料である。

土師器には皿N（1～25）、皿Ac（26～28）がある。皿Nは口径8.6～10.0cmの小型品と、口径14.2～15.8cmの大型品に大別できるが、その中間的な要素を持つ口径11.6cmのもの（11）もある。皿Acは口径9.3～9.7cm。口縁部を内側に折り曲げたコースター形のものである。

瓦器椀（29～32）は口径13.6～15.2cm、高さ4.4～5.4cmである。外面にも粗いミガキを施すものと、内面のみにとどめるものとがある。いずれも内面底部に細かな回転を連続させたミガキで花文をあらわす。

山茶椀（33・34）は貼り付け高台の底部破片であり、口径は不明。

その他に常滑の甕があるが小片のため図示していない。

池SG１底部出土土器　池底部から出土した土器の総破片数137片の内訳は土師器82.5%、瓦器13.8%、須恵器0.7%、輸入陶磁器2.9%である。平安京Ⅳ期中（11世紀中頃）に位置づけされる。

土師器には皿A（35～39）、皿N（40～46）がある。皿Aは口径10.2～11.2cmで、口縁部が屈曲し端部をつまみ上げたものである。皿Nは口径10cmの小型品と口径14.2～17.2cmのものがある。口縁部は外反し外面には２条のナデ痕を残す。

輸入陶磁器には白磁椀（47）がある。体部下段以下を露胎、他の部分を施釉する。白磁は他に３点出土しているが、いずれも小片で図示することはできない。

（２）瓦　類

瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦・鬼瓦がある。出土数は軒丸瓦が17点、軒平瓦は11点、鬼瓦２点、他にヘラ記号のあるものが３点ある。

軒丸瓦　（48・49）は蓮華文軒丸瓦である。（48）は中房が盛り上がり、１＋４の蓮子を配する。不揃いの連弁は凸線であらわし、外区には小さな珠文がまばらに配される。山城産。（49）は中房が平坦で圏線が巡り、１＋４の蓮子を配する。中房の圏線から外区まで延びる直線により弁をあらわす。播磨産。（50）は単弁蓮華文軒丸瓦である。中房は平坦で弁区とは圏線で画する。蓮子は１つ認められる。連弁は凸線で表す。焼成は軟質。山城産。（51）は剣巴文軒丸瓦である。中房は左巻き三巴文。その周囲に10弁様の剣頭文を配し蓮華文をあらわす。胎土細粒灰色。瓦当裏面には指痕が明瞭に残る。山城産。（52・53）は珠文を持つ三巴文軒丸瓦である。中房に右巻きの三巴文を配し、外区に珠文帯がめぐる。珠文は大粒で、瓦当裏面にはオサエ痕を明瞭に残す。（52）の瓦当面は楕円形を呈する。山城産。（54）は珠文帯と周縁部のみ残存し、文様構成は明らかでない。裏面には丸瓦の剥離痕が観察できる。山城産。（55～64）は珠文のない右巻き三巴文軒丸瓦である。（55・56）は外区に２条の細い界線がめぐる。（55）は裏面に丸瓦の剥離痕が明瞭に残る。胎土はいずれも細粒灰色。（57）は１条の界線を持ち、外区には不明瞭であるが凸線で蓮弁を表す。（61）は内区と外区を画する界線が１条めぐる。（58～60・62～64）は界線を持たない。（60）は胎土が硬質で暗灰色。瓦当面に降灰を受ける。（62・63）は軟質黄灰色で著しく摩滅している。（60）は播磨産。

図41　SG１出土瓦拓影および実測図（１：４）

他は山城産。

軒平瓦　(65) は均整唐草文軒平瓦である。唐草の第2主葉までは反転するが、第3主葉は反転せずに波打つように延びる。中心飾りは水滴状である。瓦当部は包み込み。凹面には布目。凸面はタタキが認められず、板状の道具を使ったナデ。接合部は内外面ともヨコナデ。播磨産。(66) は唐草文軒平瓦である。瓦当面は折り曲げ。瓦当范が瓦当面をはずれて押されている。焼成はやや硬質。胎土にはやや大粒の砂粒を含む。山城産。(67・68) は唐草文軒平瓦。尾張産。陶質で自然釉がかかり一部ビードロ状を呈する。(69) は唐草文軒平瓦。中心部分は枝葉がC字形主葉は3反転

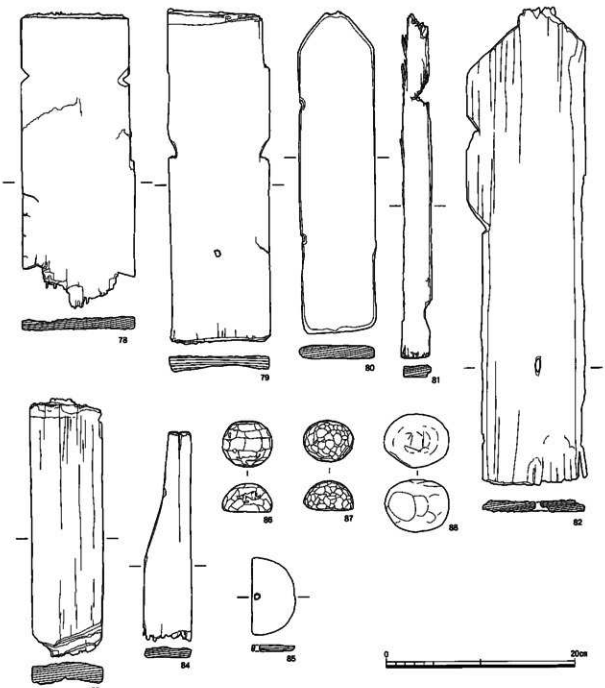


図42　SG1出土木製品実測図（1：4）

し反転部分で2葉派生する。凹面は布目、凸面は平行タタキ。瓦当部は包み込み。焼成は硬質。播磨産。(70～75) は剣頭文軒平瓦。(70・71) は凹面布目上に細くシャープなヘラ記号を有する。山城産。

鬼瓦　(76) は左側珠文帯の一部である。硬質で灰色、うっすらと自然釉がかかる。尾張産。(77) は目の一部である。胎土は細粒で緻密、暗灰色を呈する。非常に良く焼き締まっている。播磨産。

(3) 木製品

木製品は建築部材の一部と思えるものが殆どだが、木球が3点の他、箸と卒塔婆などがある。箸は全て小片であったため図示していない。

(78～81) は卒塔婆である。いずれも五輪塔を表現する切り込みを入れている。(79・82) には径1㎝程の小穴が開けられている。(83・84) はどちらも建築部材の破片と思われるもので、切断面が残る。(85) は円盤状の板材中央に小穴が開けられている。用途は不明である。(86～88) は木球である。(86・87) は細かな単位の面取りを明瞭に残すが、(88) は面取りの痕を潔らかに調整している。その他自然遺物では松の毬果、ヒシ果実などが出土している。

4　ま と め

当調査地周辺ではこれまでに幾度かの調査が行われ、東殿の庭園遺構が明らかになりつつある。調査地の北に位置する134次調査では南東への傾斜を持つ洲浜が、南部での41次調査では北に落ち込む洲浜が検出されており、今回の調査では洲浜の延長と池の西岸を確認することが期待された。しかし予想していた以上に池は西へ広がり、調査区のほぼ全域に広がる。洲浜は調査区西北隅で下部をわずかに検出したにとどまり汀線及び陸部は確認できなかった。

池最下層からは11世紀中頃の土師器が出土しており、この付近に泉殿の頃と考える園池の存在が考えられる。12世紀後半まで園池として整備されていた様であるが、埋土に含まれる建築部材の有り様から東殿廃絶後は江戸時代前期の整地まで放置され、池ないしは湿地状を呈していたことがうかがえる。

今回の調査では池と洲浜の立ち上がりをわずかに認めたにとどまるが、今後の調査によって解明されて行くであろう池の全形を考察するうえで一つの資料が追加される事となった。

Ⅳ　栢ノ杜遺跡

1　調査経過

本調査は、史跡醍醐寺境内（栢杜遺跡）の隣接地における伽藍遺構の広がり、遺存状況を知るための確認調査である。栢ノ杜遺跡は、『醍醐雑事記』や『南無阿弥陀仏作善集』に「大蔵御堂」「栢ノ杜堂」として記される平安時代後期、醍醐寺の子院跡であり、源師行や重源によって造営された。その所在は、長く不明であったが、昭和40年代に周辺で大規模な宅地造成が計画され、これが契機となってその所在が確認された。昭和48～49年（1973～1974）にかけて行われた調査では、八角円堂跡、一辺21.67ｍの大規模な方形堂跡、庭園跡などが確認された[1]。これらの遺構が確認された範囲は、昭和58年（1983）に醍醐寺境内（栢杜遺跡）として国史跡に指定された。

栢ノ杜遺跡と推定される範囲は、史跡指定地に隣接した耕作地や竹藪をも含んでいる。京都府・京都市ではこれらの土地と栢ノ杜遺跡との関連を確認するための調査を計画し、その調査を(財)京都市埋蔵文化財研究所に委託した。調査は、３ヶ年計画で行われ、本年がその最終年度にあたる。平成13年度の調査では、史跡指定地西側で人工的なカット面が確認され、遺跡が史跡指定地よりも更に西側に広がることが判明した[2]。また、平成14年度の調査では史跡指定地南側において、南北方向の石垣と鎌倉時代の瓦が出土したことから、この付近に何らかの建物跡が存在することが推測された[3]。

図43　調査地位置図（１：5,000）

これらの成果を受けて、今年度は平成14年度調査区周辺で建物跡の存在が考えられた敷地内を面的に拡げて調査する事となった。調査の結果、丘陵斜面地において、建物基壇とその建設に必要な平坦面を得る為に構築された石垣などが検出された。検出された基壇1は、その規模と周辺から多量の瓦、風鐸などが出土した事から、文献史料に記される「大蔵卿栢杜堂」の「三重塔」であることが明らかとなった。昭和48年調査時に航空写真が撮影され、遺跡の他に周辺の建物なども撮影されていた。今回再度、遺跡周辺を撮影し、当時の建物を撮り込む事により、昭和48年調査の遺構の位置を正確に確定することができた[41]。

2 遺　構

調査地は東から西へさがる傾斜地となっており、調査前は竹藪となっていた。基本層序は調査区東側では遺構面までの土の堆積は浅く、竹藪盛土直下の地表下から0.3mで遺構面に達する。西側では堆積は東側よりもやや厚く、地表下から0.4mまで竹藪盛土、0.7mまでが近世耕作土で、これより下が遺構面となる。調査は当初設定した調査区が小さく、基壇の存在を認識する事ができなかった。後述するように建物基壇は地山削り出しであるが、基壇を構成する地山に対して最初に断ち割りを入れる形となってしまった。基壇検出の端緒となったのは当初設定していた調査区の壁面にわずかに認められた瓦の堆積である。この堆積を追いかけながら調査区を拡げる事によって、建物基壇の全容が明らかとなった。

基壇1　南北10.4m、東西現存長4.2m、現存最大高0.3mを測る。基壇は西半分が崩れて遺存せず、北面と南面も遺存状態は悪いが、東面は遺存状況が良好で屋根から落下した瓦も基壇外縁に沿って多量に検出された。現状の平面形は長方形を呈するが、後述する石垣2との関係から、本来は一辺約10mの正方形であったと推定される。基壇は地山削り出し。後世の削平を大きく受けており、礎石及びその据え付け痕跡は全く残っていなかった。地山には石が多量に含まれている。石は0.1～0.4mのものが多い。石の表面は風化が進み鉄分の沈着が著しく、堆積方向に規則性は認められない。これらの事から、基壇を構成する堆積土は土石流によるものとみられ、基壇の東半分については地山削り出しであることが分かる。基壇の外縁部には、浅い掘形を持って黄橙色粘土が幅約0.6mで帯状に巡る。これは地山を削り出した後、基壇裾部の崩壊を防ぐ事と化粧を兼ねて薄く粘土を貼り付けたものとみられる。

また、この0.6m外側には0.1～0.2mの石が検出され、雨落ち溝の可能性も考えられた。しかし、断ち割り面積が狭かった事と、この石の東側が宅地境であるコンクリート製の擁壁掘形による攪乱を受けていたため確定するには至らなかった。

基壇周辺で多量に出土した瓦は取り上げていない為、基壇裾部の形状を面的には検出していない。但し、部分的に瓦堆積層を断ち割った東辺中央部では、黄橙色粘質土外側には石積みなどは存在せず、裾部は外側に向かって緩やかに傾斜し、断面が弧状を呈する亀腹となっていた。基壇上部の構造は明らかではないが、遺存状況からすると亀腹基壇の可能性が高い。

石垣２　基壇西側では、南北方向の石垣を検出した。これは、東から西への低い傾斜地に建物を建てるために必要な平坦面を造成するのに構築したものである。石垣は延長約12m検出し、基壇正面の約５ｍが最も高く積まれており比高差0.7～0.9m、北に行くに従い低くなり、北側１/４はやや大振りな石を１石並べるのみで比高差は0.1m。基壇正面より南側は石を積まずに地山のカット面の

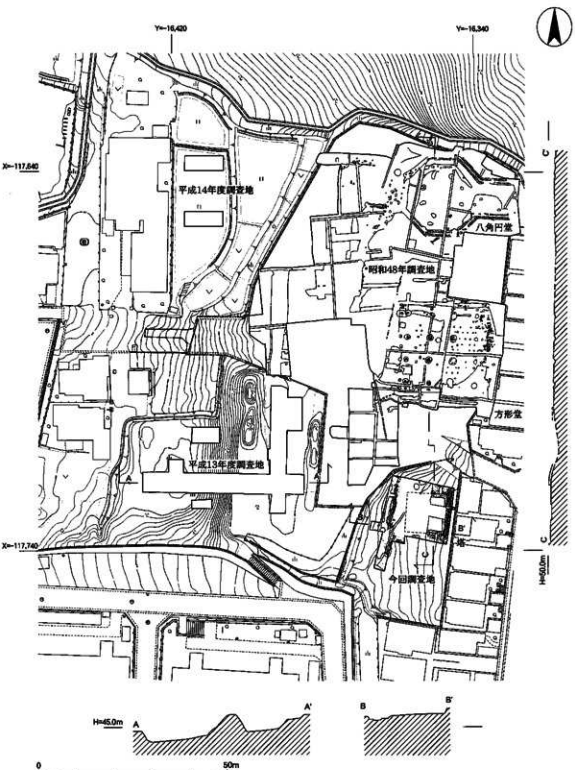


図44　栢ノ杜遺跡調査区配置図（１：1,000）

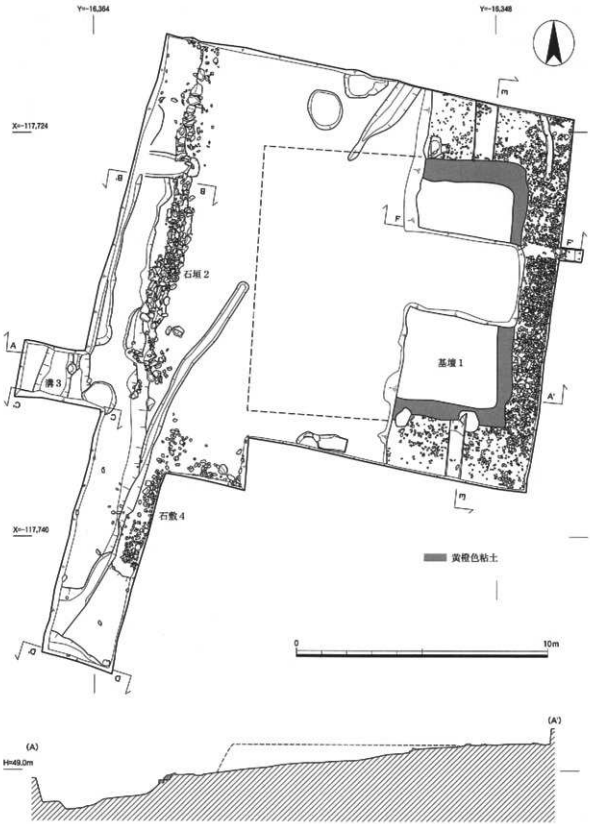


図45　調査区遺構平面および断面実測図（1：150）

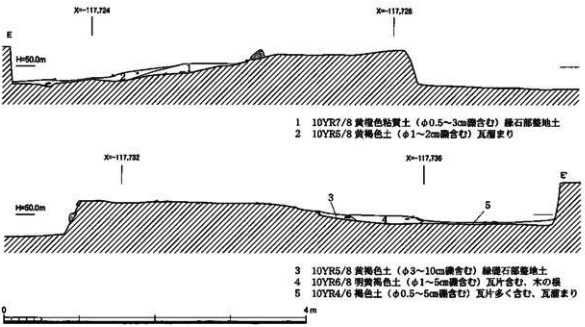


図46　基壇南北断面実測図（1：50）

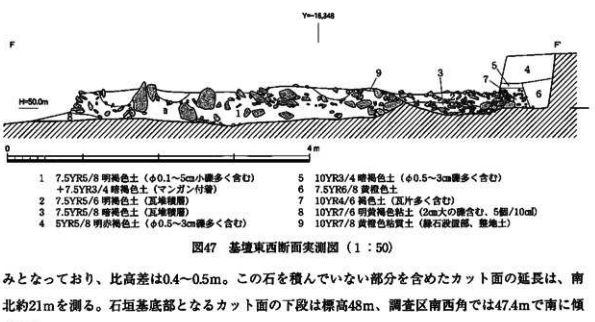


図47　基壇東西断面実測図（1：50）

みとなっており、比高差は0.4～0.5m。この石を積んでいない部分を含めたカット面の延長は、南北約21mを測る。石垣基底部となるカット面の下段は標高48m、調査区南西角では47.4mで南に傾斜する。

最も石が高く積まれる基壇正面の石垣は、長辺0.2～0.4m、短辺0.1～0.2mの石を4段、階段状に積んでいる。石はカット面に対して横方向に置くものが多いが、大振りな石を縦方向において積んでいる部分もある。これは石を横方向に置く積み方では石垣が弱くなるので、強度を得るために一定間隔で石を縦使いにしたものと思われる。

掘形確認の断割調査は遺構保護のために行っていないが、表面観察から石を置くために若干掘り下げる程度で裏込石は存在しないようである。

石敷き4　石垣が構築されるカット面上段で検出した。石の大きさは0.1mの拳大のものが多いが、0.3～0.4mのものも含まれ、ばらつきが大きい。調査区の南西部が遺存状況がよく、基壇1北

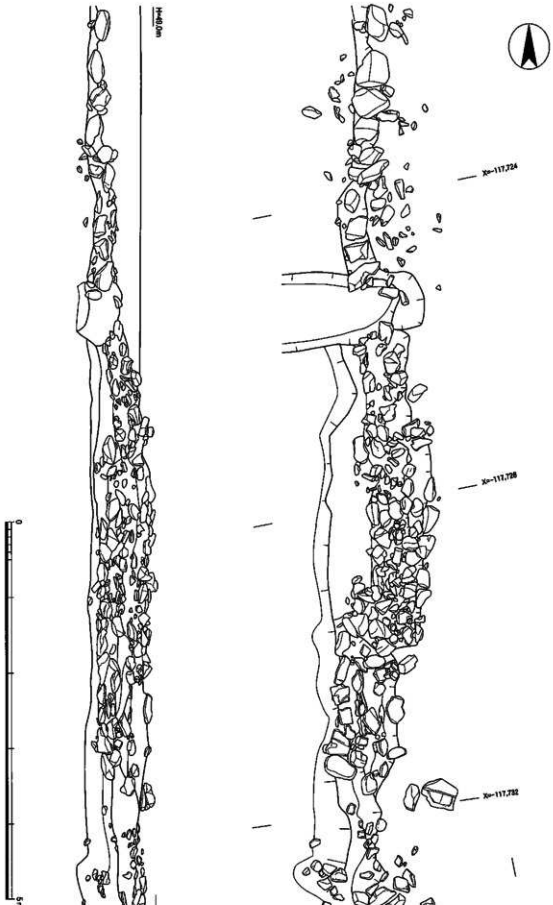


図48　石垣２平面および見通し実測図（１：50）

西部でも一部検出している。しかし、基壇推定範囲より南西側の遺構面上層には、同質・同形の多量の石が出土しており、本来は検出範囲よりも広く基壇周辺に存在したとみられる。この石敷きは、傾斜地に建つ基壇1建物周辺に地山の流出を防ぐ為に施されたものと考えられる。

溝3　石垣2の西側で検出した溝。上層・下層の2時期ある。上層は幅2.2m、深さ0.5mを測る。溝埋土には、石敷きに使用されている石と同質・同形の石が多量に含まれており、これが崩れて溝が埋没したことが分かる。下層は、幅2m、深さ0.3mを測る。この埋土にも石は含まれるが、上層ほど多くはない。昨年の調査でも、この溝の北側延長部が検出されており、その高低差から北から南に排水されたことが分かる。

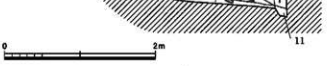


図49　石垣2東西断面実測図（1：50）

図50　溝3東西断面実測図（1：50）

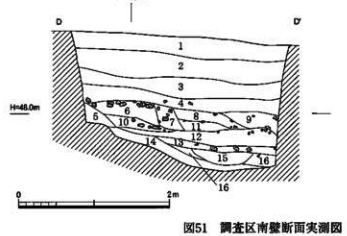


図51　調査区南壁断面実測図（1：50）

3 遺　物

遺物は、遺物整理箱で51箱が出土した。その殆どが瓦類である。瓦は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦があり、鬼瓦の出土は無い。瓦以外には土師器皿や風鐸、釘などがある。

(1) 瓦　類

軒瓦　基壇周辺から出土した軒瓦は検出中に取り上げたもの以外、現状保存を原則とした為その全容は不明である。ただし、瓦当類に関しては瓦当種の出土比率などを現地で検討しながら取り上げており、一定実態に近いものと考えている。

軒丸瓦は5種22点、不明5点。巴文が19点、宝草華文が1点。(1) は右巻きの三巴文軒丸瓦、8点が出土。焼成はやや軟質で断面色調は灰白色、胎土中には白色粒が目立つ。(2) は (1) と同笵。焼成はやや軟質で、色調も (1) と類似する。(3) は、右巻きの三巴文軒丸瓦、2点が出土。焼成は軟質で胎土には1～2㎜の大粒の白色粒が多く含まれる。(4) も右巻きの三巴文軒丸瓦、1点出土。他の軒丸瓦よりも瓦当径が大きい。焼成はやや軟質で胎土には1㎜以下の白色細粒が含まれる。方形堂出土軒丸瓦と同笵[5]。(5) は左巻き三巴文軒丸瓦。焼成はやや軟質、胎土は比較的精良で砂粒はほとんど認められない。(6) は宝草華文軒丸瓦、1点出土。焼成は硬質で須恵質に近く、胎土も精良である。

軒平瓦は6種43点。軒平瓦は12世紀の京都系2点を除けば、後はすべて13世紀代の南都系と考えられるものである。(7) と (8) は剣頭文軒平瓦、瓦当成形は折り曲げによる。(9) は唐草文軒平瓦、12点が出土。平瓦部凸面の調整は縦方向のヘラ削り、瓦当成形は接合式。顎部裏面には凹型台の圧痕が残る。焼成はやや軟質で胎土には白色細粒が含まれる。(10・11) は唐草文軒平瓦、2点出土。平瓦部凸面の調整は縦方向のヘラ削りの後に顎部裏面に横ナデ、顎部裏面には凹型台の圧痕が残る。瓦当成形は接合式、(11) は (10) に比べると顎部が直線的である。焼成はやや軟質で胎土には黒色粒が含まれる。東福寺より同笵と見られる瓦が出土[6]。(12) は唐草文軒平瓦、17点が出土。平瓦部凸面の調整は縦方向のヘラ削りの後に顎部裏面に横ナデ、顎部裏面には凹型台の圧痕が残る。瓦当成形は接合式。焼成は硬質で、胎土には白色砂粒が多く含まれる。平瓦部に釘が残る。東福寺、東大寺念仏堂より同笵瓦が出土[7]。(13・14) は唐草文軒平瓦、8点が出土。平瓦部凸面の調整は縦方向のヘラ削りの後に顎部裏面に横ナデ、顎部裏面には凹型台の圧痕が残る。瓦当成形は接合式。焼成はやや軟質で、胎土には白色砂粒が多く含まれる。東福寺より同笵と見られる瓦が出土[8]。

丸瓦・平瓦　出土した瓦の大半を占めるのが丸瓦・平瓦である。その大半は未整理であるが、大きさとしては全長約30㎝のやや小型のものがほとんどであり、建物の性格を現していると思われる。ここでは、その一部を報告する。

(15) は丸瓦。全長34.8㎝。凸面は縦方向の縄タタキ痕後、縦方向ヘラ削りを施す。凹面には吊り紐痕跡が2箇所に残りともに波状を呈するが、下位にあるものの方が波形が大きい。(16) は丸

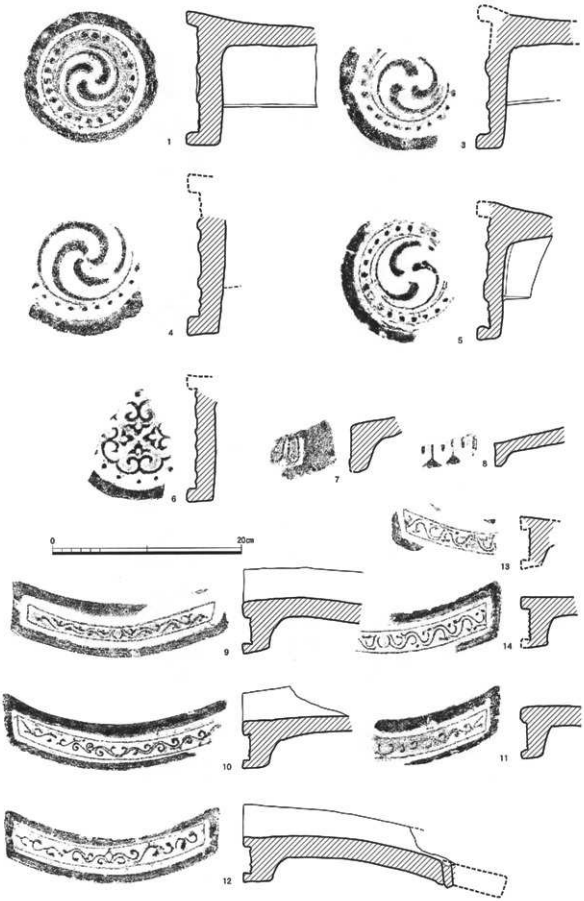


図52　軒瓦拓影および実測図（1：4）

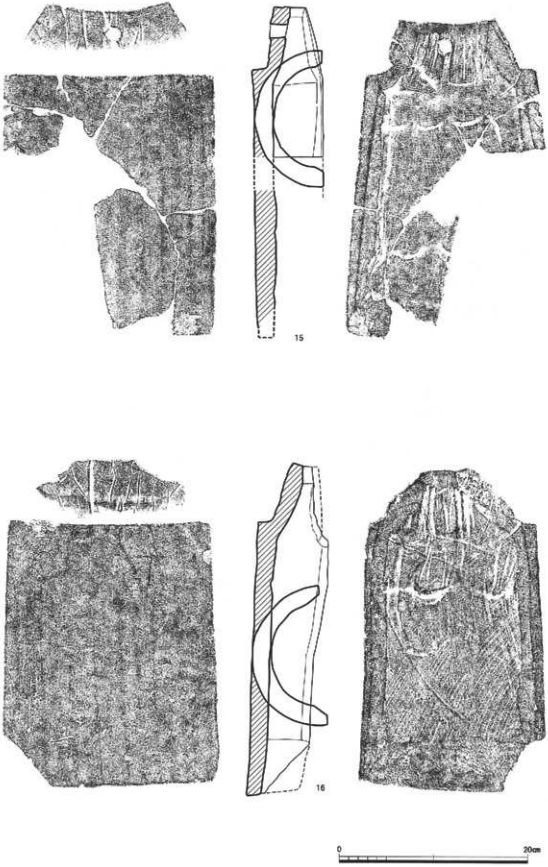


図53　丸瓦拓影および実測図（1：4）

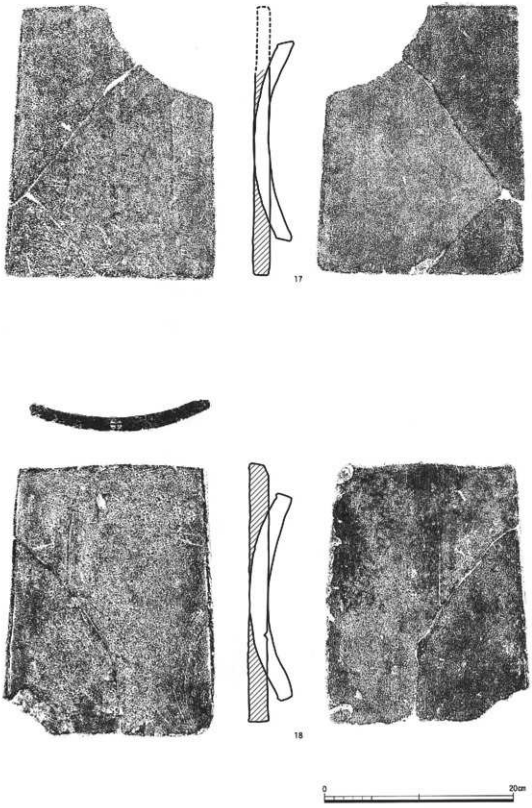


図54　平瓦拓影および実測図（1：4）

瓦。全長35.2cm。凸面は縦方向ヘラ削りを施し、縦方向の縄タタキ痕跡をわずかに残す。胎土には白色砂粒を含み、焼成はやや硬質で灰褐色を呈する。凹面には1箇所に吊り紐痕跡が残る。

(17) は平瓦。全長30cm。凹凸面ともに縦方向ヘラ削りが施されており、タタキ痕跡は認められない。凸面には粗い砂が付着し、凹型台の痕跡を留めている。胎土には白色砂粒を含み、焼成はやや硬質で灰白色を呈する。(18) は平瓦。全長29.6cm。凸面は表面が摩滅しているが一部にヘラ削りが認められる。凹面には縦方向ヘラ削りが施されている。凸面には粗い砂が付着し、凹型台の痕跡を留めている。狭端面に刻印がある。白色砂粒を含み、焼成はやや軟質で白灰色を呈する。

(2) 土器類

土器類の出土は極めて少ない。土師器皿がわずかに出土するのみである。(19〜23) が平安京土器編年V期中段階、(24〜27) はVI期古段階にあたり、実年代ではそれぞれ12世紀後半と13世紀前半に比定されている[21]。出土地はいずれも石垣の埋土より出土した。

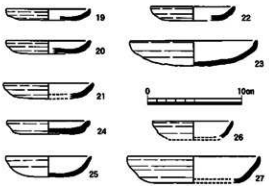


図55 出土土器実測図 (1：4)

(3) 金属製品

金属製品は、基壇1周辺から瓦と共に出土している。釘や風鐸、飾り金具などがある。風鐸は鐸身2点、風招1点が出土、いずれも鋳鉄製。(28・29) は鐸身。いずれも約8cm×5cmの破片。横方向に2条の突線がある。(30) は鐸身の裾部。(31) は風招。横7cm、縦9cmでほぼ中央付近で縦に割れているとみられる。(32) は用途不明の鉄製品。現状は平面Jの字形を呈するが、両端とも欠損しており原型は不明。釘が3箇所に残されており、建物に取り付けられる装飾具と思われる。(33〜40) は釘、頭部形式はいずれも平安時代から鎌倉時代に一般的な折れ頭釘。断面形は四角形。残存長から長さにはいくつかのサイズが存在した事が窺えるが、直径はいずれも6mm程度。(34・35) は全長7.2cmを測る。(33・36) も先端部を欠損するが、同じサイズと見られる。(37) は残存長11.5cm、頭部、先端共に欠損。(38) は残存長13cmを測る。頭部は折り曲げ、先端は欠損。(39) は残存長14.7cm、頭部、先端共に欠損。(40) は残存長15.8cmを測る。頭部、先端共に欠損。(41) は鎹、残存最大幅14.7cm、先端は欠損。直径1.2cm×0.6cmの断面長方形を呈する。

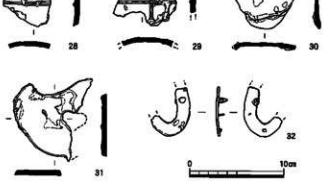


図56 鉄製品実測図 (1：4)

4 まとめ

栢ノ杜遺跡は、昭和48年に調査が行われ、八角円堂跡、方形堂跡、庭園跡が確認された。これらの遺構が検出されたことから、遺跡は『醍醐雑事記』『南無阿弥陀仏作善集』に記される「大蔵卿堂」あるいは「栢杜堂」「大蔵卿栢杜堂」などと記される醍醐寺の子院跡であることが明らかになっていた。今回の調査では、この子院跡に新たな建物跡が確認できた。この建物の性格は史料に記される塔の可能性が高いと思われる。「栢ノ杜堂」に関連する重要な史料が幾つかある。煩わしさを避けるため、史料を先に掲げ引用するときは、それぞれ史料番号をもって用いる。

史料1　『醍醐雑事記』巻五

「大蔵卿堂八角二階　九躰丈六堂　三重塔一基各檜皮葺　本仏阿弥陀丈六像　願主

大蔵卿正四位上源朝臣師行之建立也　敷地者三寶院領也」

史料2　『醍醐雑事記』巻七・八裏書　具注暦　久寿二年（1155）六月二十一日条

「大蔵卿栢杜堂供養御導師　讃衆廿口」

史料3　『南無阿弥陀仏作善集』

「下醍醐栢杜堂一宇并九躰丈六　奉安置皆金色三尺立像」

史料4　『醍醐寺新要録』第十四　醍醐寺座主次第　建久六年（1195）十一月七日条

「春乗房聖人被施入唐本一切経於当寺　栢森大蔵卿入道師行堂奉渡為讃歎　寺僧十人

遐屋津参向」

（1）検出基壇の性格

今回の調査で確認した基壇1は、以下の点から、史料1に記される「三重塔」跡の基壇と考えられる。基壇は上部と西半分が失われているものの、石垣2などとの位置関係などから一辺約10m四方の規模であったと復元できる。この時期の一辺約10mの方形建物としては他に一間四面堂などを考えることもできるが、瓦と共に出土した風鐸は、この時期には塔以外には殆ど用いられない。この基壇周辺から出土する土器・瓦などの出土遺物から、その時期が12世紀から13世紀にかけてのものであり、史料の時期とも矛盾しない。また、史料に記された以外の建物が存在した可能性もあるが、「大蔵卿堂」と呼ばれたこの醍醐寺の子院にそれほど多くの堂舎を備えていたとは考えがたい。以上から塔跡とするのが妥当と考える。

（2）基壇の復元

検出した塔基壇は西半分が既に失われていたが、基壇規模は、一辺10.3mの正方形プランに復元でき、外周部の黄褐色粘質土帯を除くと一辺8.7mとなる。基壇上面には礎石及びその掘形は全く残らず、後世の削平が大きい事が分かる。粘質土帯は、石を殆ど含まない土を用いている事から、礎石の設置時に安定を得る為のものと思われる。本来は、基壇全面にこのような土が積み上げられており、基壇下部は地山削り出し、上部は盛り土による構築であったと考えられる。この事からす

ると、一定の高さで削られた基壇東半において、黄褐色粘質土帯の盛り土が残っていた基壇外周部と地山の土で検出されたその内側とでは、基壇の高さが異なっていた事になる。これは建物の上部構造の違いによるものと考えられる。

平安時代後期の三重塔の現存例として承安元年（1171）建立の兵庫県加西市一乗寺三重塔がある。この塔基壇は、地山削り出しの亀腹基壇である。塔の建物は、塔身の外周に縁を持ち亀腹基壇はこの縁の中程から始まる。亀腹基壇の規模は高さ約0.6m、長さ7.67mを測る。縁の外側には雨落ちのための地覆石のみを並べた低い基壇が設けられており、これを含めた基壇規模は10.6mとなる。平安時代には床板貼りの建物発達と共に縁が取り付く建物が増加する。これに伴って建物の足下は、煩わしさ避けるため壇上積基壇などは用いられる事が少なくなり、塔にも亀腹基壇が採用され始める。[19]

これらの事から考えると、今回検出した塔基壇も、基壇外縁部の帯状に巡る黄褐色粘質土帯に縁の礎石が置かれ、その内側の基壇上面には塔身のための亀腹基壇が築かれていたと復元できる。今回の検出した縁裾部は、現在の一乗寺でみられるような雨落ち溝を兼ねる地覆石のみを並べた低い基壇は設けず、亀腹状の仕上げとなっている。ただし、西側は基壇がかなり高くなる為、この部分は石積みなどの構造物を用いた基壇であった可能性もある。縁外側の基壇まで含めた基壇規模は一乗寺と極めて近い。後世の削平を考え粘質土帯の幅が若干広かったとすると、塔本体の亀腹基壇の規模は粘土帯内側の8.7mよりも狭くなり、一乗寺三重塔の7.67mに近いものになる可能性がある。建立時期の近い栢杜堂三重塔と一乗寺三重塔の基壇規模が極めて近似するという事実は、この時期の三重塔の規模の一つの規格であった可能性もある。

（3）出土瓦について

基壇1の東辺からは多量の瓦が出土し、この建物が瓦葺きであった事が分かる。出土した瓦の主体を占めるのは13世紀南都系と考えられる瓦である。軒平瓦の主体となるのは、南都系の軒平瓦（9～14）である。これらのうち、（10～14）は東福寺境内より出土しており、この内、（12）は東大寺念仏堂からも出土している。

東福寺出土軒平瓦は、大きさから瓦当面幅24cmのものと30cmの大型品に分かれる。個々の瓦には若干の製作技法の差はあるものの、大型品は仏殿周辺から、24cm前後のものは山門の東西に存在した経蔵・鐘楼跡周辺から出土が集中し、その出土傾向は分かれる。この事は、瓦のサイズの違いは使用される建物、或いはその場所によって使い分けられたものであることが分かる。東福寺は九条道家により、嘉禎2年（1237）に造立発願、延応2年（1239）仏殿上棟、建長7年（1255）仏殿供養が為されている。また、東大寺念仏堂は嘉禎年間建立とされており、今回出土した瓦は、嘉禎年間以降に製作されたものと考えられよう。

塔は、当初桧皮葺であった事が史料1によって分かる。文治2年（1185）までに編纂が成ったとされる『醍醐雑事記』には、醍醐寺子院の記事が多く記されているが、そこに記されるすべてが桧皮葺或いは板葺きであり、平安時代後期の醍醐寺のこれらの建物には瓦葺きの建物は無かったよう

である。この事と出土した瓦の時期を考え合わせれば、建立当初桧皮葺であった三重塔が、嘉禎年間頃に東福寺所用瓦などを用いて瓦葺きの屋根に葺き替えられた事となる。この事は、今回、出土した土器が12世紀後半から13世紀前半のものがあることからも肯首できよう。

（4）栢ノ杜堂の堂舎の配置と建立時期に関する問題

昭和48年調査では、八角円堂跡、一辺21.67mの大規模な方形堂跡と庭園跡などが検出され、それぞれの建物は先に挙げた史料1の「大蔵卿堂八角二階」「九躰阿弥陀堂」に比定された。今回の調査で確認した建物基壇は三重塔のものと考えられることから、『醍醐雑事記』にみえる「大蔵卿栢杜堂」の建物はすべてが揃ったことになり、建物は南北にほぼ一直線に並ぶ配置を取る事が確認できた。これはこの子院が西に山科盆地を望む山の西斜面に造営されたという自然地形の規制とともに、山裾に通る奈良街道からの景観を意識したとも考えられる。但し、今回三重塔の位置が判明したことにより、新たな問題も生じる。

昭和48年の調査で確認された方形堂は重源建立によるものと考えられている。これは建物平面プランが、重源の建立による兵庫県小野市の浄土寺浄土堂と全く同じである事、大仏様の建築部材が出土したこと等による。さらに、方形堂は、浄土寺浄土堂が阿弥陀堂である事から、『醍醐雑事記』にみえる「九躰阿弥陀堂」であると考え、史料3にみえる重源が建立した「栢杜堂一宇」も同一の建物とし、その建立時期については、史料4から重源が建久6年（1195）に栢杜堂で宋版一切経の讃歎供養を行う頃とされた[11]。

この年代観の正否については、昭和48年調査で出土した遺物からは判断ができない。只、重源は文治元年（1185）の大仏開眼供養まではそれに専念しており、重源が東大寺再建に取り組んだ後に別所などの寺院を各地に造営するのは、文治2年の周防阿弥陀寺が最初である。また、大仏様の建築様式は、東大寺の巨大建造物を再建するため新たに導入されたものであることなどから（大仏殿上棟：建久元年　落慶法要：建久6年）、重源による方形堂の建立は、「栢杜堂」における宋版一切経の供養と関連する可能性は高い。

しかし、問題はこの大仏様の方形堂を『醍醐雑事記』にみえる「九躰阿弥陀堂」と同じ建物かどうかという点である。『醍醐雑事記』は巻十五の内、巻十三迄は文治2年迄に編まれたと考えられている。方形堂の建立時期が先に述べたように建久6年頃とすると、編集時期とは合わなくなる。また、「大蔵卿栢杜堂」の本尊は阿弥陀丈六像であり、これを安置する建物は当然「九躰阿弥陀堂」とおもわれる。久寿2年に供養が行われたこの子院には本尊を安置する建物が、建久6年頃の方形堂建立まで存在しなかった事になる。また、建久6年頃まで九躰阿弥陀堂が建てられなかったとすると、八角堂と今回調査で確認された三重塔の間の距離は約50mもあり、重源によって方形堂が建てられるまで、この間には広大な空閑地が存在したことになる。

これらの事からすると、少なくとも『醍醐雑事記』に記された「九躰阿弥陀堂」と昭和48年の調査で検出された方形堂は違う建物の可能性が高い。九躰阿弥陀堂は、史料上では寛仁4年（1020）藤原道長建立の法成寺阿弥陀堂を初例として、平安時代後期を中心に約30例ほどが知られるが長堂

形式が普通である。[12] 方形堂が小野浄土寺浄土堂と同じように阿弥陀堂であるとすると、源師行建立の「九躰阿弥陀堂」はこれの前身建物として存在した可能性が高い事になる。

昭和48年調査では、遺構保存のため基壇断ち割りなどによって、下層遺構の有無は確認されておらず、先に述べたことの当否を知ることは現状では不可能である。また、重源が新たに方形堂を新たに建てた背景も考えなければならない。以上、推論を述べたが、今回の調査によって、栢ノ杜遺跡に今まで考えられていなかった変遷が存在する可能性を指摘しておきたい。

註

1）『栢杜遺跡調査概報』　鳥羽離宮跡調査研究所　1975年

2）小森俊寛「栢ノ杜遺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報』平成13年度　京都市文化市民局　2002年

3）小森俊寛「栢ノ杜遺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報』平成14年度　京都市文化市民局　2003年

4）昭和48年当時の航空写真は京都市埋蔵文化財調査センターより提供を受けた。

5）註１文献に同じ

6）長谷川行孝「瓦」『東福寺防災工事・発掘調査報告書』　東福寺　1990年　所載の瓦No.56

7）註６文献　所載の瓦No.62

『重要文化財東大寺念仏堂修理工事報告書』　奈良県文化財保存事務所　1963年

8）註６文献所載の瓦No.57。

9）小森俊寛・上村憲章「京都都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996年

10）工藤圭章「古代の建築技法」『文化財講座　日本建築２』　第一法規出版　1976年

11）註１文献に同じ

12）清水　擴『平安時代仏教建築史の研究』　中央公論美術出版　1992年

V　史跡・名勝嵐山

1　調査経過

調査地は史跡・名勝嵐山の一画、京都市右京区嵯峨天竜寺芒ノ馬場町に所在する。当地は天竜寺の南、大堰川（桂川）の北に位置し、亀山殿推定地の一部でもある。今回の調査地の南約30mでは、この亀山殿の桟敷殿の建物地業や天竜寺の南側に造営された後醍醐天皇の霊庇廟に関連するとみられる遺構が検出されている。また西方約50mでは平安時代前期の遺物が多量に出土した苑池跡、さらに東方では臨川寺境内や美空ひばり館建設地などの発掘調査で古代から中・近世の遺構が数多く確認されている。

調査は現地において制約があったため、５ヶ所の小トレンチを設定し実施した。発掘調査は平成16年10月27日より掘削を開始した。いずれの調査区も遺構の残存状況は良好で、室町時代の溝などを検出した。なお、４区は先述した南側の調査で検出した霊庇廟関連と見られる南北方向の溝の延長上に設定したが、溝は検出できなかった。これら検出した遺構は記録写真・実測を行い平成16年11月30日に全ての作業を終了した。

図57　調査地位置図（１：5,000）

2　遺　構

今回の調査で検出した遺構は江戸時代後期の溝（SD18）、近現代の溝（SD1）以外はおもに室町時代（15世紀代）のものが中心である。すべての遺構は約20～40cmの現代層を取り除いた同一の面で検出している。以下、主要な遺構についてその概略を記す。

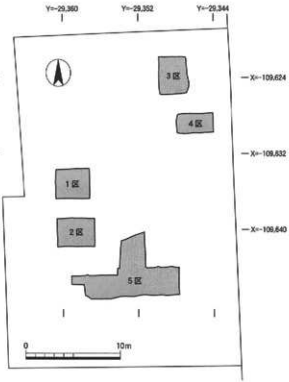


図58　調査区配置図（1：400）

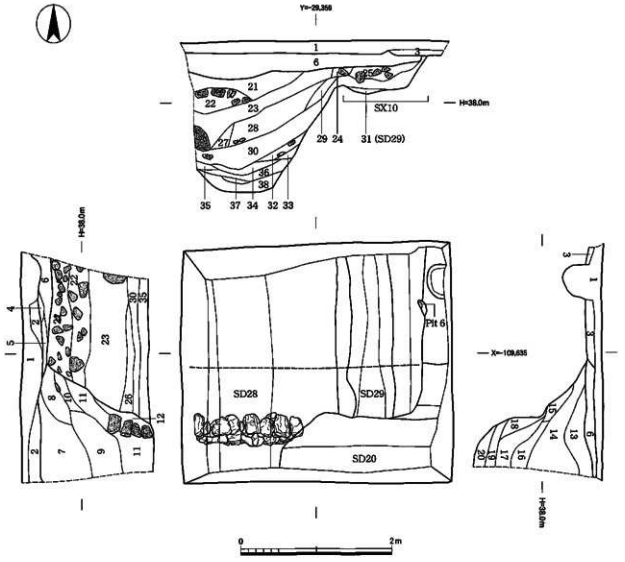
SK 9　2区で検出した土壙。2区東西のほぼ中央部から東へ緩やかに落ち込んでいる。堆積土中には瓦類が多量に含まれていた。調査区外に広がっているため規模は不明だが、5区のSK21に連続するものと思われる。

SD12　3区北壁沿いに検出した東西方向の濠状の遺構。南肩から底部にかけて幅約1.5mを確認した。北肩は調査区外。深さ1.25mで、堆積土は礫を含む暗褐色および黒褐色の砂泥などで、水が流れたか貯まっていたような形跡はない。遺物は15世紀頃の土師器が少量のほか、平安時代前期（9世紀後半頃）の土師器や須恵器が混入しており、量的にはそちらの方が多い。今回の調査範囲内ではこの時期の遺構は検出されておらず。濠が埋め戻されたときに付近の平安時代の遺物を含む土砂が運ばれたものと考えられる。

SD20　1区南壁沿いに検出した東西方向の濠状遺構。深さ約1.5m、幅は北肩から約1mを確認しているが、南に3m隔てた2区で南肩が検出されていないので、4m以内であることが推測できる。SD28が廃絶した後に造られており、その際SD28を横切る部分の底部付近に石垣を組んで肩部を補強している。石垣は長径0.2～0.3mの自然石を小口積みにしたもので、裏込めは認められなかった。肩部から斜めに下がり、途中からほぼ垂直に落ち込む、いわゆる薬研濠の断面形状を呈する。

SD28・SD29・SX10　1区・2区・5区で検出した南北方向の溝とその関連施設と思われる遺構。2区・5区では土壙で破壊されていたためSD28の他は確認できなかった。SD28は深さ約1.5m、西肩は未確認だが底部から西への立ち上がりが認められ、2.5m程度の幅が推定できる。SX10とSD29はSD28の東で検出した一連の遺構である。SD28の東肩から約1m程の平坦面（SX10）があり、そこからさらに0.5m程立ち上がる。この平坦面のほぼ中央が浅く窪んでいる（SD29）。SX10が犬行、SD29が雨落ち溝と

図59　調査状況



1～3（現代層）
1　10YR3/1 黒褐色砂泥　非常に固く締まる
2　10YR3/4 暗褐色砂泥
3　10YR3/3 暗褐色砂泥　礫混
4　10YR3/3 暗褐色砂泥・焼土
5　10YR3/4 暗褐色砂泥　径3cm礫・土師器少量含む
6　7.5YR3/4 暗褐色砂泥　締まらず　土師器・瓦少量含む
7～20（SD20）
7　10YR4/4 褐色砂泥
8　7.5YR3/4 暗褐色砂泥
9　7.5YR4/3 褐色砂泥
10　7.5YR4/4 褐色砂泥
11　7.5YR3/3 暗褐色砂泥　土師器・瓦少量含む
12　7.5YR3/4 暗褐色砂泥
13　10YR4/4 褐色砂泥　径5cm以下の礫混
14　7.5YR4/4 褐色砂泥
15　7.5YR4/4 褐色砂泥　締まらず
16　7.5YR3/4 暗褐色砂泥
17　10YR3/4 暗褐色砂泥
18　7.5YR3/4 暗褐色砂泥　やや締まる
19　7.5YR4/4 褐色砂泥　小礫混
20　7.5YR4/3 褐色砂泥
21～（SX10）（SD28）
21　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
22　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥　径10～20cm礫含む
23　7.5YR4/3 褐色砂泥
24　7.5YR4/4 褐色砂泥　やや粘質
25　7.5YR4/3 褐色砂泥　径10cm前後の礫含む
26　10YR4/4 褐色砂泥
27　10YR4/2 灰黄褐色砂泥　礫混
28　7.5YR4/4 褐色砂泥　やや粘質
29　7.5YR4/4 褐色砂泥　粘質　砂混
30　7.5YR4/3 褐色砂泥　締まらず　砂混
31　7.5YR4/3 褐色泥砂　礫混（SD29）
32　7.5YR4/4 褐色砂礫
33　7.5YR4/4 褐色砂
34　7.5YR4/4 褐色砂礫
35　10YR4/4 褐色泥砂
36　7.5YR4/3 褐色砂礫
37　10YR4/4 褐色泥砂　礫混
38　7.5YR4/3 褐色砂

図60　1区遺構平面および断面実測図（1：50）

考えれば、東側の高みに築地などの施設が想定できる。SD28の堆積土中には人頭大の礫が多量に含まれており、人為的に埋め戻された状況を示している。また、SD12などと同様に水が存在した形跡はなく、空濠として機能していたものと考えられる。

SD24　5区中央部で検出した南北方向の溝。やや東に振れる方位を持つ。東肩部には護岸の石列が施されている。この溝には3時期が認められ、下層の幅2m前後の溝（SD24c）の上に石列を組み、溝（SD24b）を作り替えている。この2時期目の溝内の堆積は均質な砂層だが最上層には焼土が堆積し、その一部は護岸の石を覆っていた。石自体も上面に火を受けており、溝の最終に近い段階に付近で火災があったような状況を示している。さらに後に、この焼土を切り込んで幅0.5m程度の溝（SD24a）が掘り直されている。出土遺物の型式差からは、この3時期の溝にはあまり大きな時期幅は認められず。これらの変遷が比較的短期間におさまることを示している。

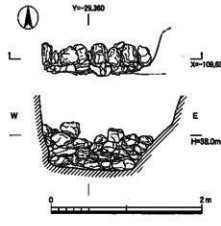


図61　SD20石垣実測図（1：50）

SD32　5区中央部やや東寄りに検出した南北方向の濠。SD24石列保存のため一部しか掘り下げていない。幅約3m、深さ1.2m。中奥部が一段深くなる断面形状を示している。この濠も礫を含む砂泥層で埋め戻されたような状況を示しており、他の堀と同様に空濠であった可能性が高い。SD24（b）の護岸石列背後の整地層を切り込んで掘られており、それよりも新しいものであるが、出土土器の型式差はほとんどない。

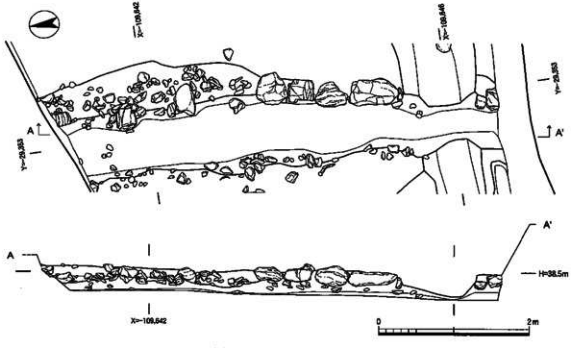
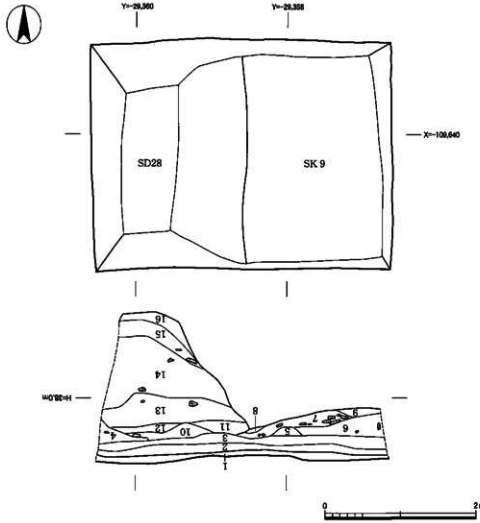


図62　SD24(b) 平面および見通し実測図（1：50）

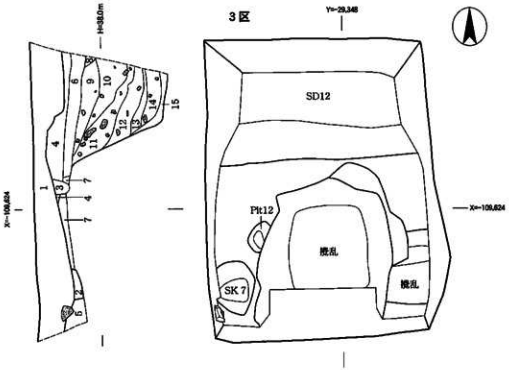


1　10YR3/1 黒褐色砂泥　固く締まる（現代層）
2　10YR3/3 暗褐色砂泥　炭混
3　7.5YR3/4 暗褐色砂泥　締まらず　土師器小片少量含む
4　10YR3/4 暗褐色砂泥
5～9（SK 9）
5　7.5YR3/3 暗褐色砂泥　径1～3cm礫・炭少量含む
6　7.5YR3/3 暗褐色砂泥　径5～10cm礫・瓦少量含む
7　7.5YR3/3 暗褐色粗砂　土師器・瓦多量に含む
8　7.5YR4/3 褐色砂泥　やや粘質
9　7.5YR4/3 褐色砂泥　土師器・瓦含む
10～16（SD28）
10　10YR4/4 褐色砂泥　径5cm以上の礫・炭含む
11　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
12　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥　やや粘質　炭多量に含む
13　10YR4/4 褐色砂泥　粗　径1～10cmの礫中量含む
14　10YR4/6 褐色砂泥　やや粘質　礫の含み具合は上層13に似る　下層は砂を含む
15　10YR4/6 褐色砂質
16　15に10YR4/4 褐色砂泥+細砂

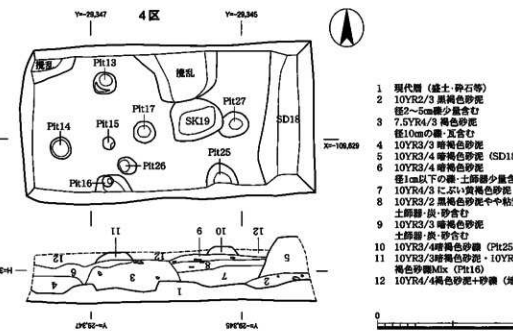
図63　2区遺構平面および断面実測図（1：50）

SX33　5区SD32に切られた東西方向の溝状遺構。南肩部もSD 1に切られ、検出したのは一部のみで規模は明らかではない。土師器のほか輸入天目茶椀が出土した。

このほか4区では小規模な土壙やピットを検出したが、調査区が狭小であったため相互の関係性等は不明である。



1 現代層
2 10YR3/4 暗褐色砂泥（SK7）
3 10YR3/3 暗褐色砂泥 締まらず
4 10YR3/4 暗褐色砂泥 炭少量含む
5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 小礫少量含む
7 10YR4/4 褐色砂泥・10YR3/3 暗褐色砂泥Mix
8～15（SD12）
8 10YR2/3 黒褐色砂泥
9 10YR3/2 黒褐色砂泥 径5cm前後の礫少量含む
10 7.5YR3/3 暗褐色砂泥 径5cm前後の礫少量含む
11 7.5YR4/6 褐色砂砂 径5～20cm以上の礫中量含む
12 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 やや粘質 土師器片少量含む
13 7.5YR2/2 黒褐色砂泥
14 7.5YR3/2 黒褐色砂泥・7.5YR4/4褐色砂泥Mix
径5～10cmの礫中量含む
15 10YR4/4 褐色細砂



1 現代層（盛土・砕石等）
2 10YR2/3 黒褐色砂泥
径2～5cm礫少量含む
3 7.5YR4/3 褐色砂泥
径10cmの礫・瓦含む
4 10YR3/3 暗褐色砂泥
5 10YR3/4 暗褐色砂泥（SD18）
6 10YR3/4 暗褐色砂泥
径1cm以下の礫・土師器少量含む
7 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
8 10YR3/2 黒褐色砂泥やや粘質
土師器・炭・砂含む
9 10YR3/3 暗褐色砂泥
土師器・炭・砂含む
10 10YR3/4暗褐色砂質（Pit25）
11 10YR3/3暗褐色砂泥・10YR4/4
褐色砂質Mix（Pit16）
12 10YR/4褐色砂泥+砂礫（地山）

図64　3・4区遺構平面および断面実測図（1：50）

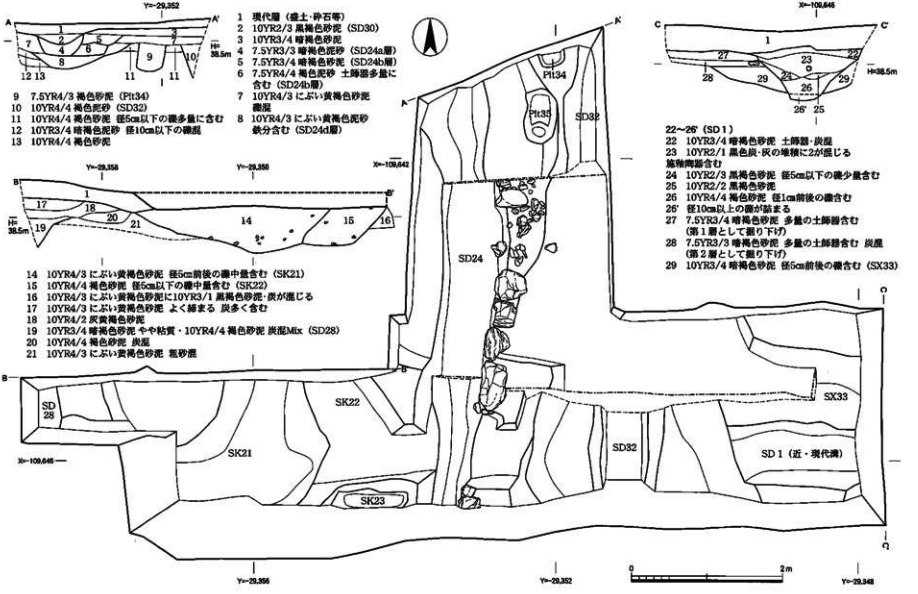
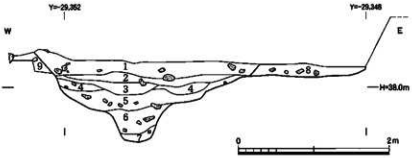


図65 5区遺構平面および断面実測図（1：60）



1～7（SD32）
1　10YR3/4 暗褐色砂泥　径5～10cm以上の礫多量に含む
2　10YR/4 褐色砂泥
3　10YR3/4 暗褐色砂泥　径5～10cm の礫多量に含む
4　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥　径5～10cm以上の礫多量に含む
5　10YR/4 褐色砂泥　径5～10cm以上の礫多量に含む
6　10YR3/3 暗褐色泥砂　径10cm以上の礫多量に含む
7　10YR/4 褐色砂礫
8　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥　粗　径10cm以下の多量の礫・土師器・炭含む（SX33）
9　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥

図66　SD32断面実測図（1：50）

3　遺　物

遺物は整理箱22箱出土した。その内容は土器・陶磁器・瓦類である。土器類はSD24からまとまって出土したほかは散発的である。瓦類はおもにSK 9 から出土したが、大半が丸・平瓦で、いずれも小片である。遺物の時期は室町時代のものが最も多く、それ以外の時期に属するものは非常に少ない。ここではSD24出土遺物を中心に記述する。

SD24出土土器　総破片数にして9,950片の土器類が出土している。その内容は表２に示したごとく、ほとんどが土師器である。土師器以外には瓦器・古瀬戸・山茶椀・焼締陶器・輸入陶磁器が出土しているが、いずれも少量で、全体に対して１％を超えるものはない。

土師器には大型品の一部と思われる小片が１片あるほかはすべて皿であり、煮炊具などは全く含まれていない。土師器皿（１～19）はすべてが白色系の皿Sで、赤色系の皿Nは含まれない。皿Sは口径により6.7～7.2cm（１～３）、9.8～10.3cm（４～５）、11.5～12.3cm（７～10）、14.2～15.6cm（30～29）、18.7～19.2cm（16～18）および25.3cmの６群に分けられる。最小口径のものは底部が上方に突出するいわゆるヘソ皿である。量的には15cm前後のものが多く、12cm前後のものがそれに次ぐ。

瓦器には火舎・火鉢の類（20～22）のほか少量の煮炊具がある。火舎・火鉢には掲載した以外にも多くの形態があるが、

表２　SD24出土土器の構成

器種	器形	破片数	比率（%）	
土師器	皿	9731	100.0%	97.8%
	鍋・釜・甑	0	0.0%	
	不明	1	0.0%	
	土師器計	9732	100.0%	
瓦器	椀・皿	0	0	0.8%
	鍋・釜	9	11.1%	
	火舎・火鉢	68	84.0%	
	その他	3	3.7%	
	不明	1	1.3%	
	瓦器計	81	100.0%	
古瀬戸	椀・皿	25	64.1%	0.4%
	鉢	3	7.7%	
	壺・瓶	9	23.1%	
	その他	1	2.6%	
	古瀬戸計	39	100.0%	
須恵器・山茶椀	椀・皿	1	9.1%	0.1%
	鉢	9	81.8%	
	壺・瓶	0	0.0%	
	甕	1	9.1%	
	その他	0	0.0%	
	須恵器計	11	100.0%	
焼締陶器	壺	1	3.7%	0.3%
	甕	0	0.0%	
	擂鉢	26	96.3%	
	盤・大皿	0	0.0%	
	その他	0	0.0%	
	焼締計	27	100.0%	
輸入陶磁器	椀・皿	56	93.3%	0.6%
	鉢	1	1.7%	
	壺・瓶	1	1.7%	
	その他	2	3.3%	
	輸入計	60	100.0%	
他	他計	0	－	0.0%
総数	総数	9950	－	100.0%

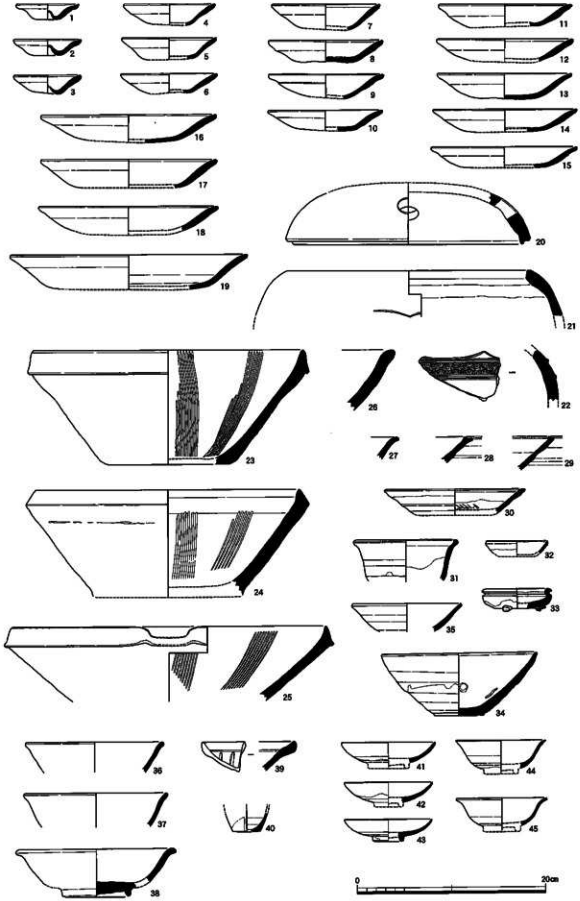


図67　SD24(b) 出土土器実測図（1：4）

いずれも小片で図示できなかった。

古瀬戸には鉢（27）、卸目皿（28～30）、行平（31）、香炉（33）、平椀（34）のほか小型の紅皿（32）がある。(29)と（33）が鉄釉、その他にはすべて灰釉が施されている。(34）の内面には重ね焼きの目跡が残る。

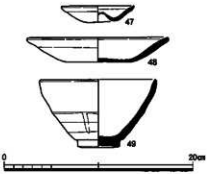


図68　SX33出土土器実測図（1：4）

須恵器系の製品には須恵器鉢と美濃産の山茶椀（35）がある。(35）の内面にはわずかに赤色の顔料が付着している。焼締陶器には備前（23～25）と信楽（26）の擂鉢のほか生産地の特定できない甕の胴部片が1点ある。(24）と（25）の焼成は堅緻だが、(23）は焼きが甘く備前の製品としては軟質である。

輸入陶磁器には青磁椀（36・37)、鉢（38)、盤（39)、白磁皿（41～43)、椀（44・45）と鉄釉の茶入れ（40）がある。青磁椀と比較すれば白磁の椀皿類は小型品が多い。また、(40）の底部外面は著しく摩滅している。

土師器皿がきわめて多く、皿Sに限られること、さらに多様な法量があること、白磁の比率が比較的高い点などがこの土器群の特徴としてあげられる。年代については多量に出土している土師器の型式が京都中心部で出土する土師器の編年でⅨ期中の新相あるいはⅨ期新あたりに該当するところから、15世紀の後半頃に位置づけておきたい。ただし、Ⅸ期に関しては今のところ実年代を明らかにできる資料がほとんど無く、今後の検討次第で多少前後する可能性は残されているといえよう。

SD24以外の遺構からはまとまった遺物の出土は無かったが、SX33の土師器（47・48）と輸入天目茶椀（49）を図示した。(図68)

4　ま と め

今回の調査によって検出した遺構の時期は少数の近世後期以降のものを除けば、室町時代に集中し、少量の土器の出土がみられた平安時代前期や亀山殿に関連する遺構は全く検出できなかった。その反面15世紀の後半代を中心とした遺構が集中的に検出され、特にそれが濠という防御的な施設であることが注目される。またSD24が3時期重複しており、それに近接した位置に2条の南北方向の濠が造られていることからは、この場所に何らかの境界線が継続して存在していた可能性が推測できる。先述したようにこの調査地の南側に鹿苑廟の推定地があることを前提に考えれば、この境界は『山城国臨川寺領大井郷界畔絵図』に廟の北側に描かれている『神主家』の西限に該当する可能性も考えられよう。

報告書抄録

ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさがいほう
書名	京都市内遺跡発掘調査概報　平成16年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	網　伸也・吉崎　伸・山口　真・南　孝雄・平尾政幸
編集機関	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	〒602-8435　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1　TEL 075-415-0521
発行機関	京都市文化市民局
所在地	〒604-0925　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488　TEL 075-222-3108
発行年月日	西暦2005年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大宅廃寺・大宅遺跡（おおやけはいじ・おおやけいせき）	京都市山科区大宅島井脇町24番地（きょうとしやましなくおおやけとりいわきちょう）	26100	633 635	34度 57分 52秒	135度 49分 29秒	2004/6/7～ 2004/6/25	36㎡	個人住宅建設
小野瓦窯跡（おのがわらがまあと）	京都市左京区上高野小野町16番地（きょうとしさきょうくかみたかのおのちょう）	26100	358-09	35度 03分 39秒	135度 47分 51秒	2004/1/29～ 2004/3/4	90㎡	範囲確認調査
鳥羽離宮跡（とばりきゅうあと）（150次調査）	京都市伏見区竹田浄菩提院町64番地（きょうとしふしみくたけだじょうぼだいいんちょう）	26100	1166	34度 56分 55秒	135度 45分 22秒	2004/5/25～ 2004/6/6	81㎡	事務所建設
栢ノ杜遺跡（かやのもりいせき）	京都市伏見区観鋼南殖山町20番地の2（きょうとしふしみくぎんこうみなみうえやまちょう）	26100	1161	34度 56分 19秒	135度 49分 15秒	2003/11/19～ 2004/1/29	340㎡	範囲確認調査
史跡・名勝嵐山（しせき・めいしょうあらしやま）	京都市右京区梅嶋天竜寺ご馬場町10番地の1および10番地の14（きょうとしうきょうくうめしまてんりゅうじごばばちょう）	26100	A809	35度 00分 40秒	135度 40分 42秒	2004/10/27～ 2004/11/30	80㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大宅廃寺・大宅遺跡	寺院跡 散布地	白鳳時代 縄文時代	瓦積基壇・礎石据付穴・柱列	瓦・土師器・緑釉陶器・青銅製品・鉄釘	二窯構造の瓦積基壇建物の東辺を良好に検出した。
小野瓦窯跡	窯跡	平安時代	瓦窯跡・土壙・石積	瓦・埴・土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器	『延喜式』に記載された「小野瓦屋」に伴う瓦窯跡を検出した。
鳥羽離宮跡（150次調査）	離宮跡	平安時代	園池	瓦・土師器・瓦器・山茶椀・白磁・木製品	鳥羽離宮東殿の園池西岸部を確認した。
栢ノ杜遺跡	寺院跡	鎌倉時代	塔跡基壇・石垣・石敷き・溝	瓦・土師器・鉄製風鐸・鉄釘	『醍醐雑事記』に記された三重塔の基礎を検出した。
史跡・名勝嵐山	史跡・名勝	室町時代	土壙・溝・石垣・小柱穴	土師器・瓦器・山茶椀・輸入陶磁器・古瀬戸・焼締陶器・瓦	防御的施設である濠を確認した。

図　　版

1　調査区全景（東から）

2　瓦積基壇（東北東から）

1　瓦積基壇（北東から）

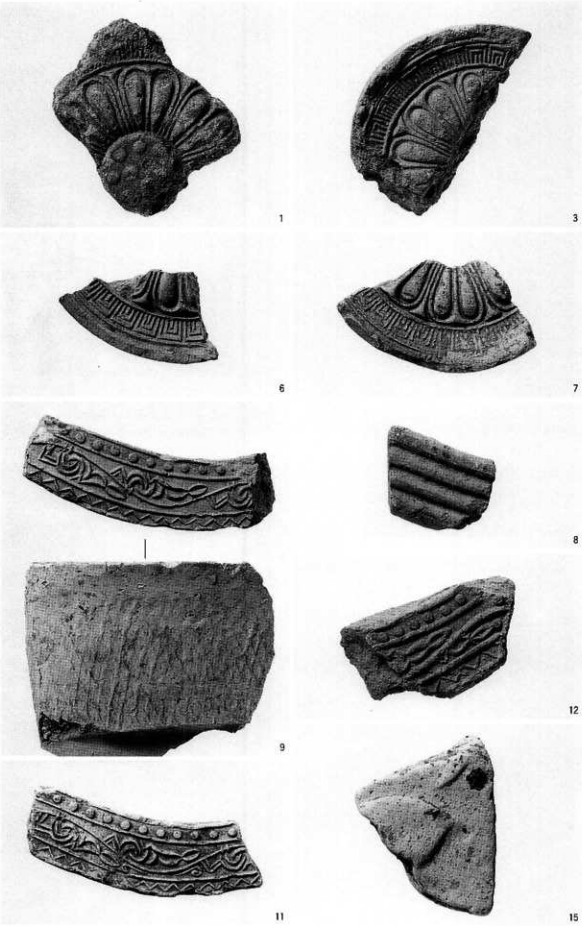
2　瓦積基壇東瓦落ち状況（北から）

1　礎石据付穴1（北西から）

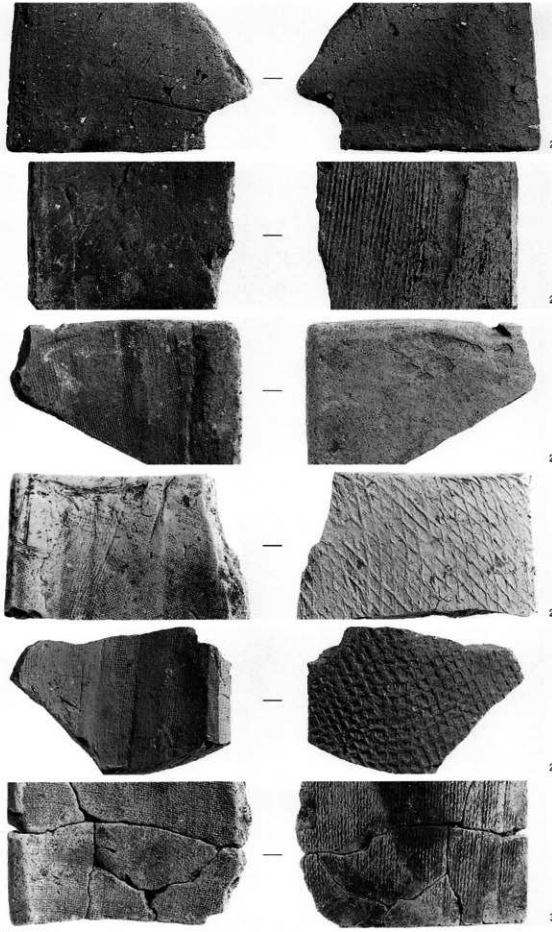
2　瓦積基壇断面細部（南から）

3　瓦積基壇断面（南東から）

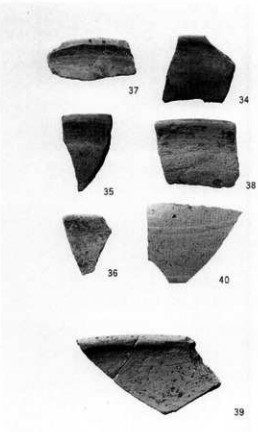
図版4　大宅廃寺・大宅遺跡　遺物



軒瓦・鬼瓦



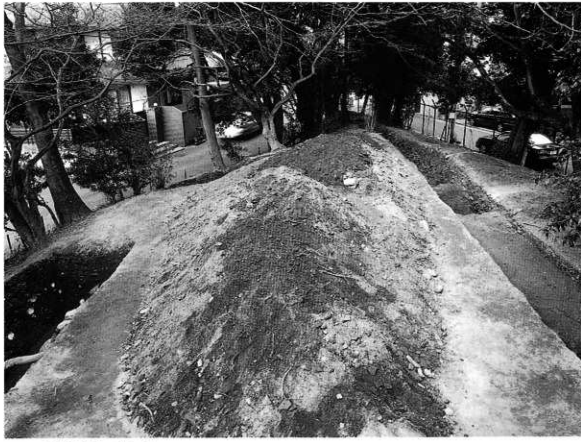
平瓦



1　土器類

2　青銅製品

3　鉄釘類



1　調査区全景（南から）

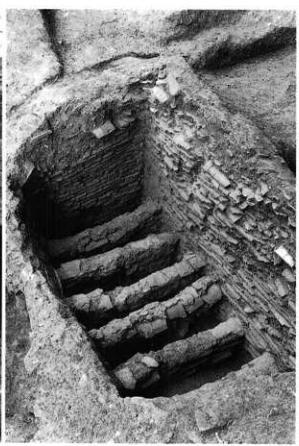
2　石積3（北から）

3　1トレンチ壁面瓦堆積状況（北から）

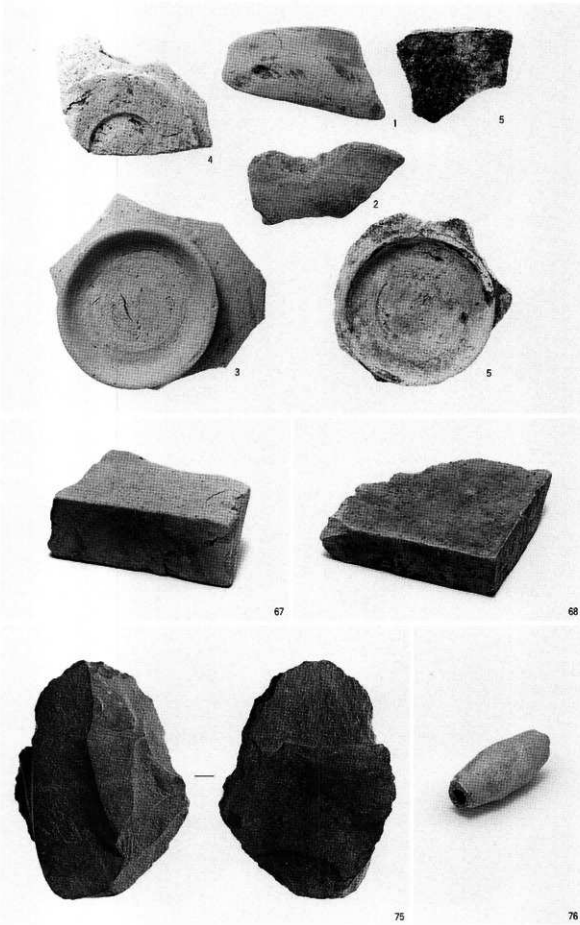
図版8　小野瓦窯跡　遺構

1　1号窯全景（南西から）

2　1号窯隔壁（西から）

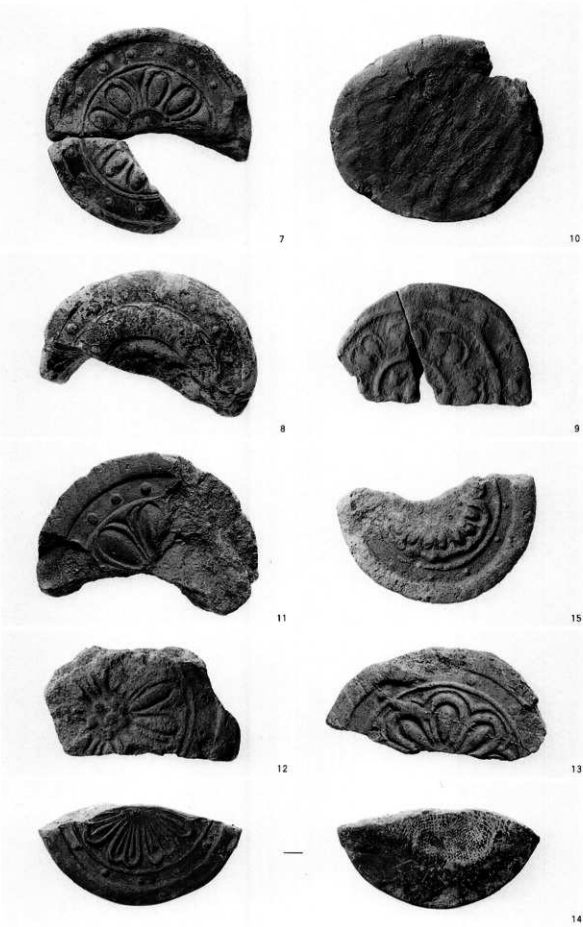


3　1号窯焼成室（南から）



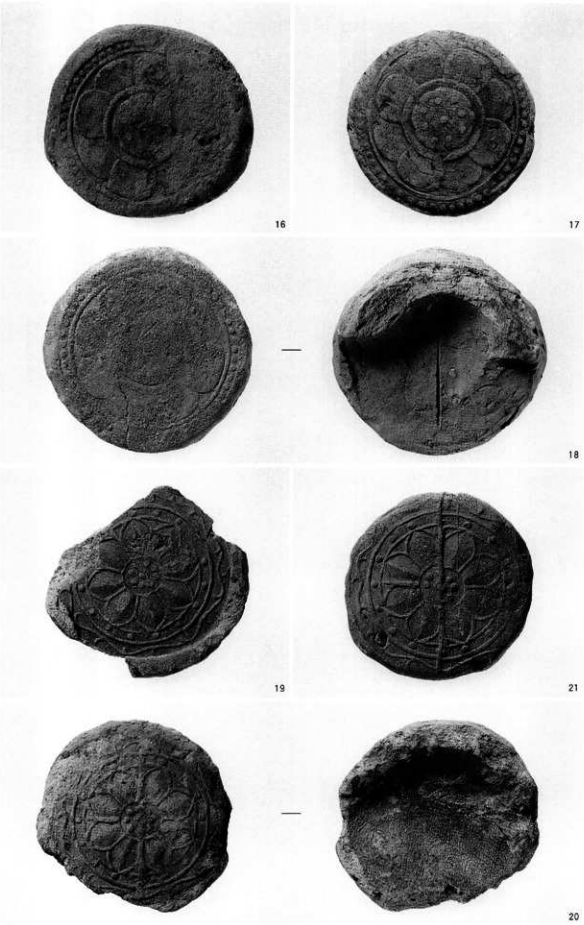
土器・埴・その他の遺物

図版10　小野瓦窯跡　遺物



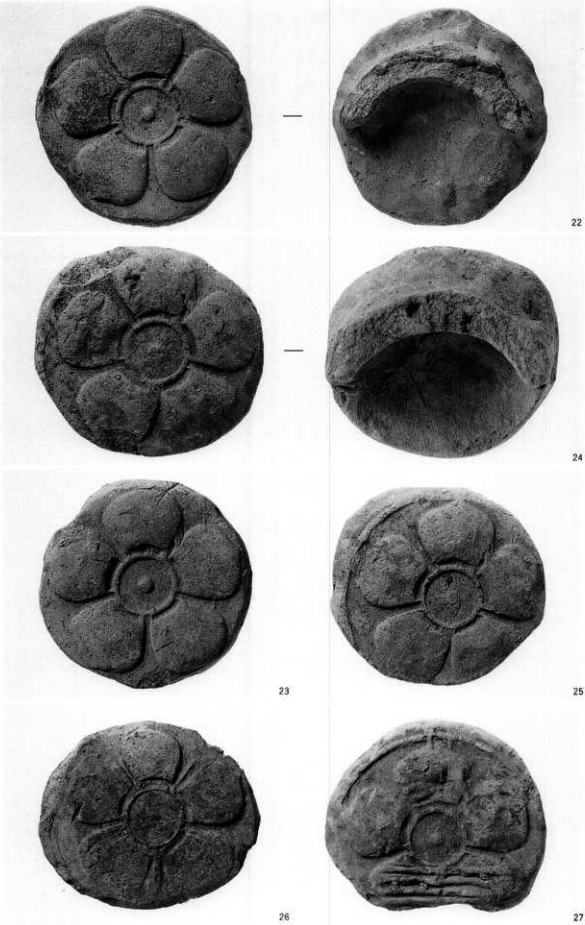
軒丸瓦

図版11　小野瓦窯跡　遺物



軒丸瓦

図版12　小野瓦窯跡　遺物



軒丸瓦

図版13　小野瓦窯跡　遺物

28

31

29

32

30

33

34

36

35

軒平瓦

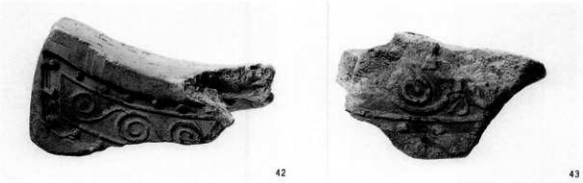
図版14　小野瓦窯跡　遺物

38

39

37　40

41


42　43

軒平瓦

図版15　小野瓦窯跡　遺物

44

45

47

46

49

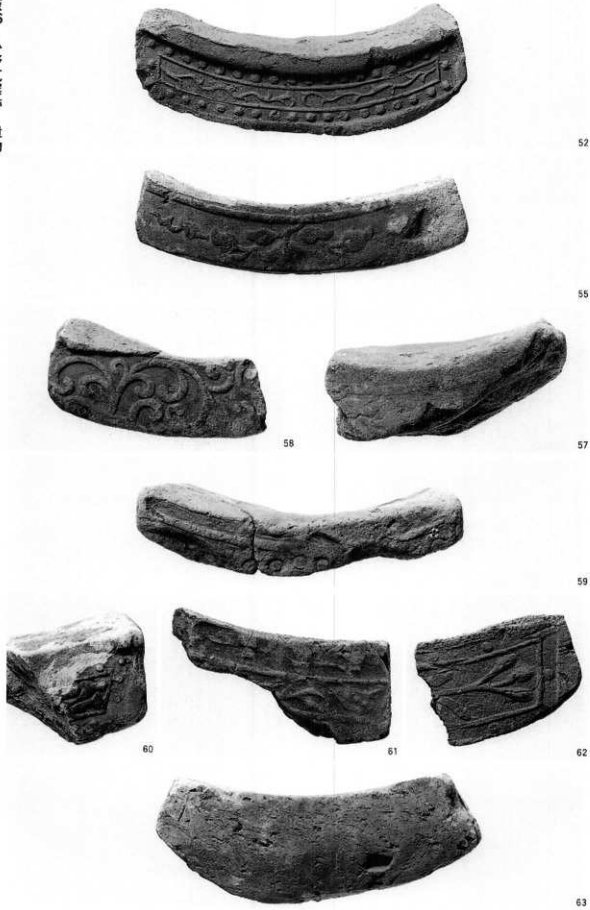
48

50

51

軒平瓦

図版16　小野瓦窯跡　遺物



軒平瓦

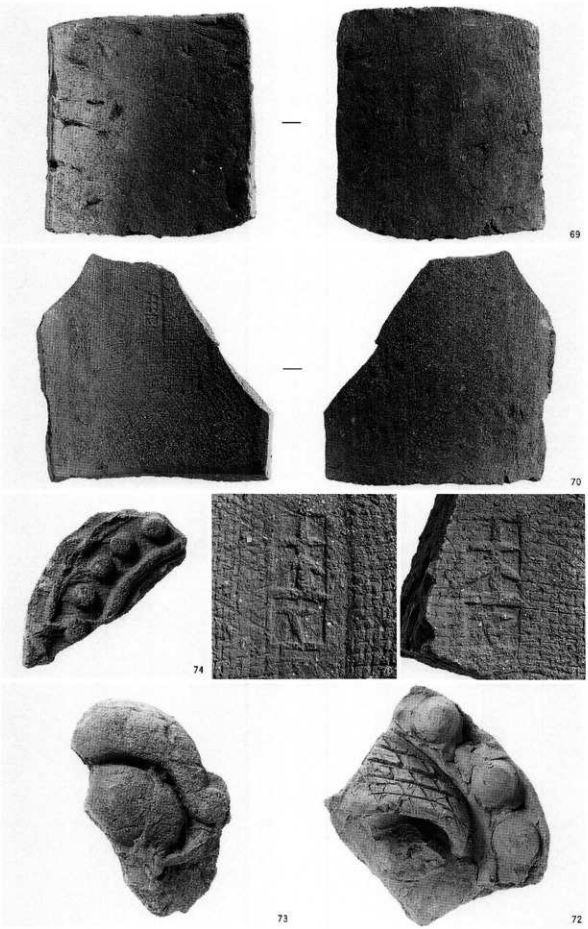
65

64

66

丸瓦

図版18　小野瓦窯跡　遺物

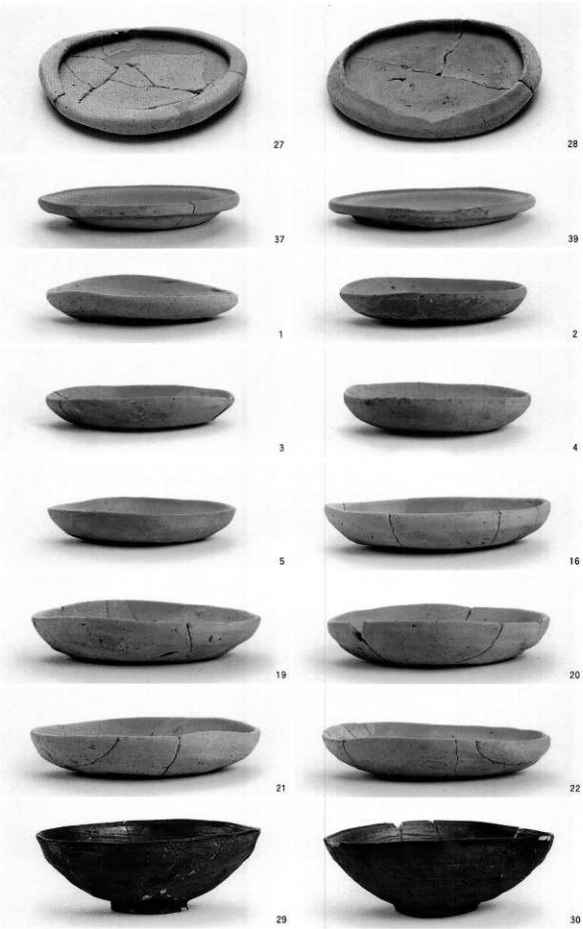


平瓦・丸瓦

1 調査区全景（東から）

2 SG 1 腐植土層遺物出土状況（東北から）

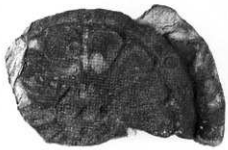
3 SG 1 洲浜（東から）



SG 1 出土土器

49

50


48

51

55

57

56

52

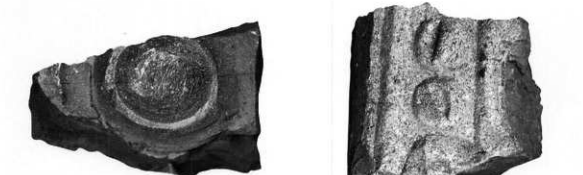
SG 1 出土軒丸瓦

65

66　69

67　68

71　74


77　76

SG 1 出土軒平瓦・鬼瓦

1　調査区全景（南から・写真奥が史跡指定地）

2　石垣2（北西から）

3　溝3（北西から）

図版24　栢ノ杜遺跡　遺構

1　塔跡全景（西から）

2　塔基壇（北から）

3　塔基壇東辺瓦落ち状況（北から）

図版25　栢ノ杜遺跡　遺物

1

2

3

4

5

6

軒丸瓦

図版26　栢ノ杜遺跡　遺物

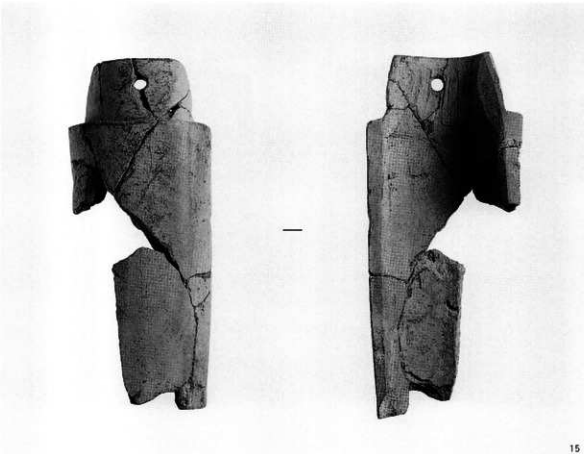
9

10

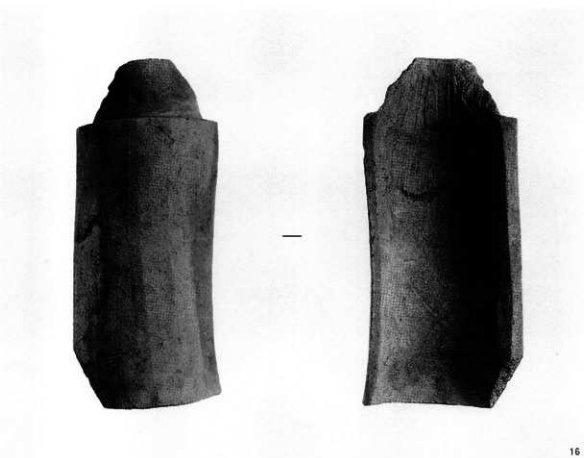
12

13　14

軒平瓦

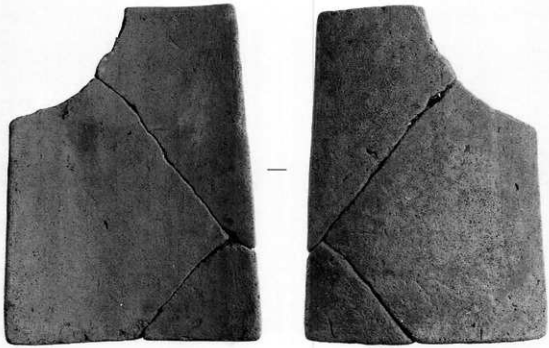


15

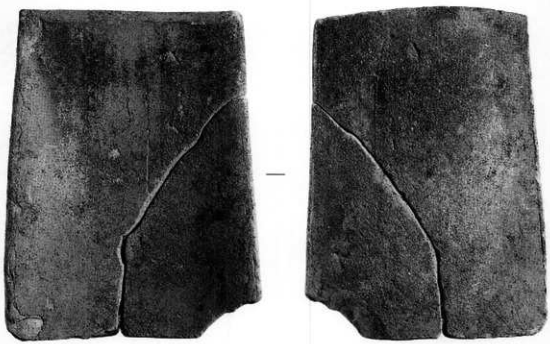


16

丸瓦

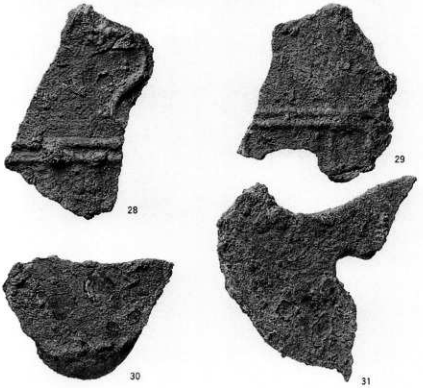


17



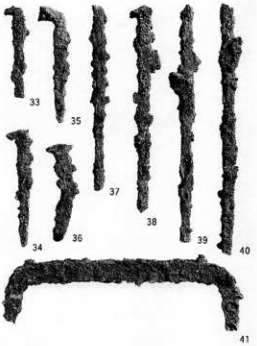
18

平瓦



1　鉄製風鐸

2　用途不明鉄製品



3　鉄釘類

1　調査前全景（南から）

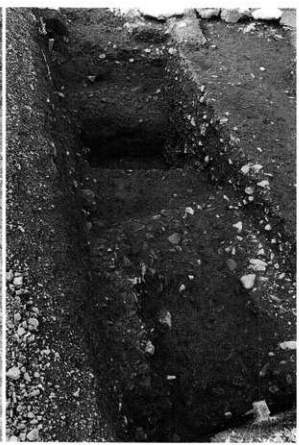
2　1区全景（北から）

1　2区全景（北から）

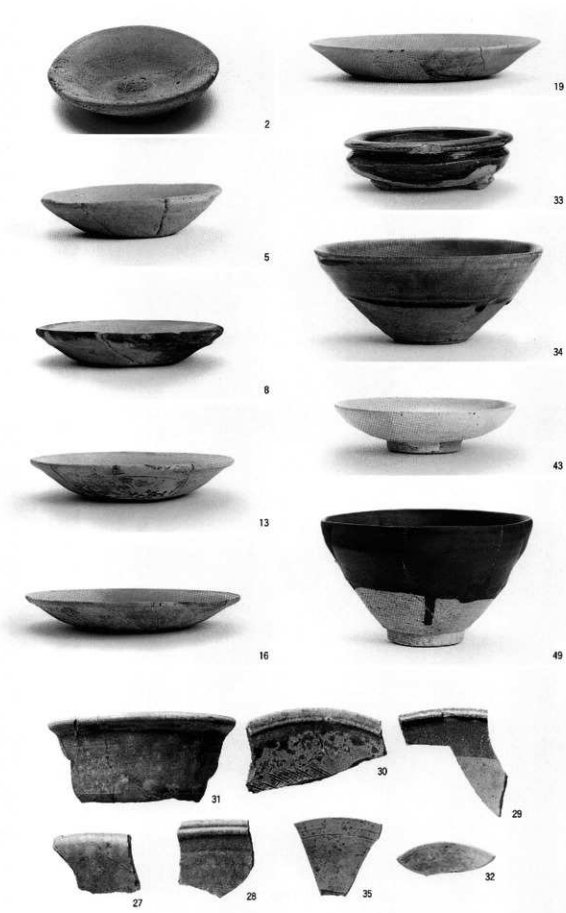
2　3区全景（北東から）

1　5区全景（南西から）

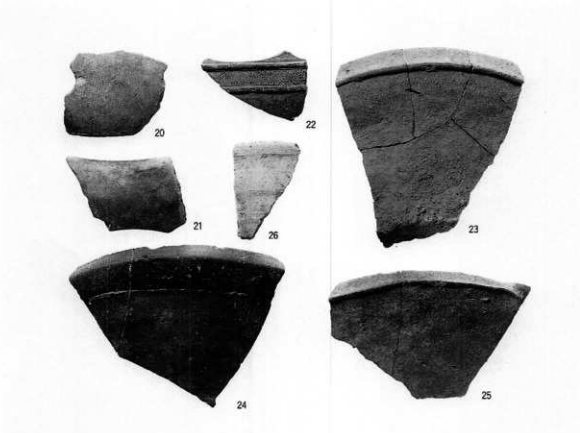
2　4区全景（北東から）



3　5区SD32（東から）



SD24(b)・SX33出土土器



1 SD24(b)出土瓦器・焼締陶器

2 SD24(b)出土輸入陶磁器

京都市内遺跡発掘調査概報

平成16年度

発行日　2005年3月31日

発　行　京都市文化市民局

住　所　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488

編　集　(財)京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1

〒602-8435　TEL 075-415-0521

http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　真　陽　社